

693-176



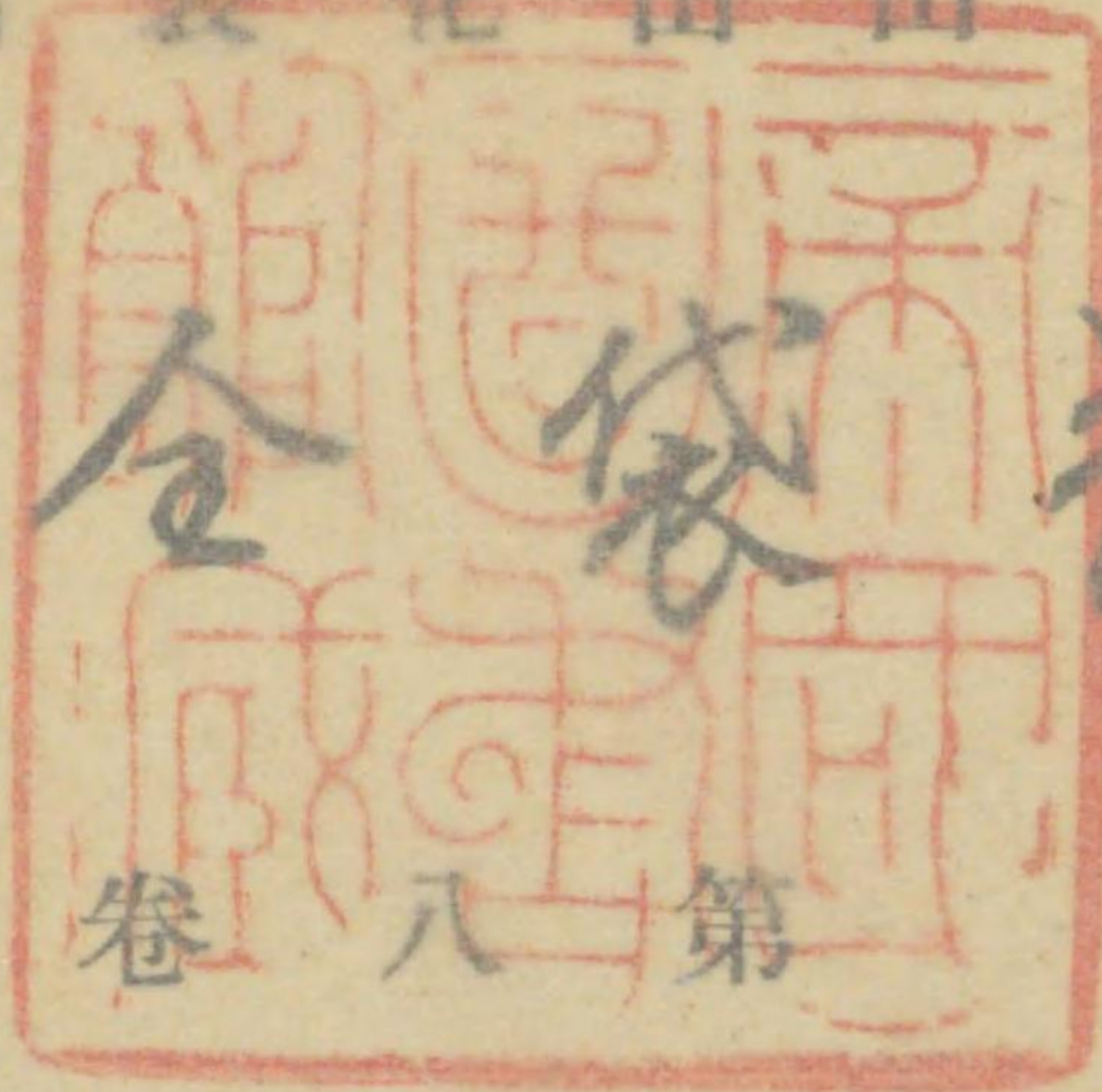
1200501580639

258

著 袋 花 山 田

集 全 袋 花

卷 八 第



春のひぞ河・に野の草び再・殺銃の卒兵一

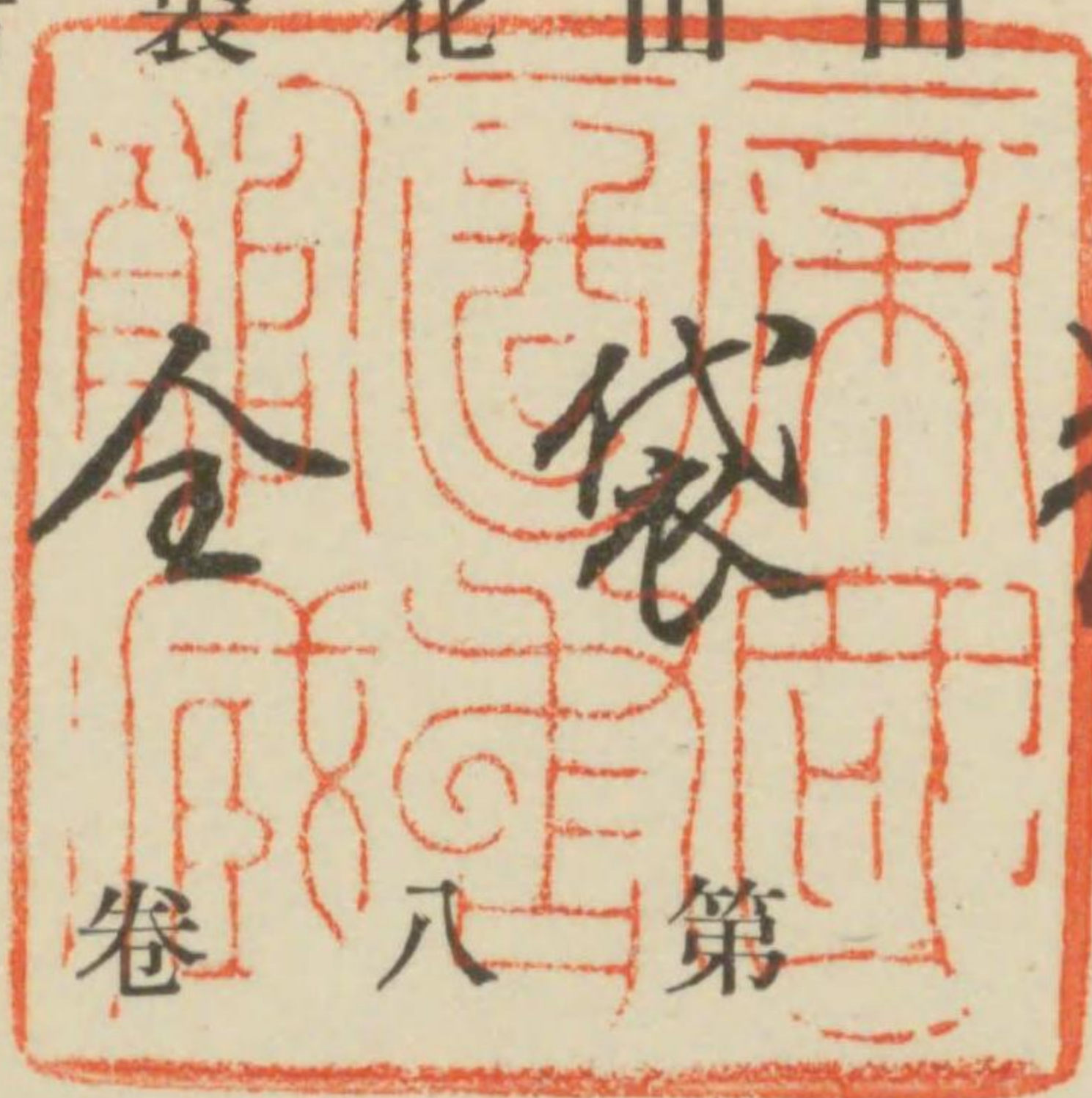
會 行 刊 集 全 袋 花



著 袋 花 山 田

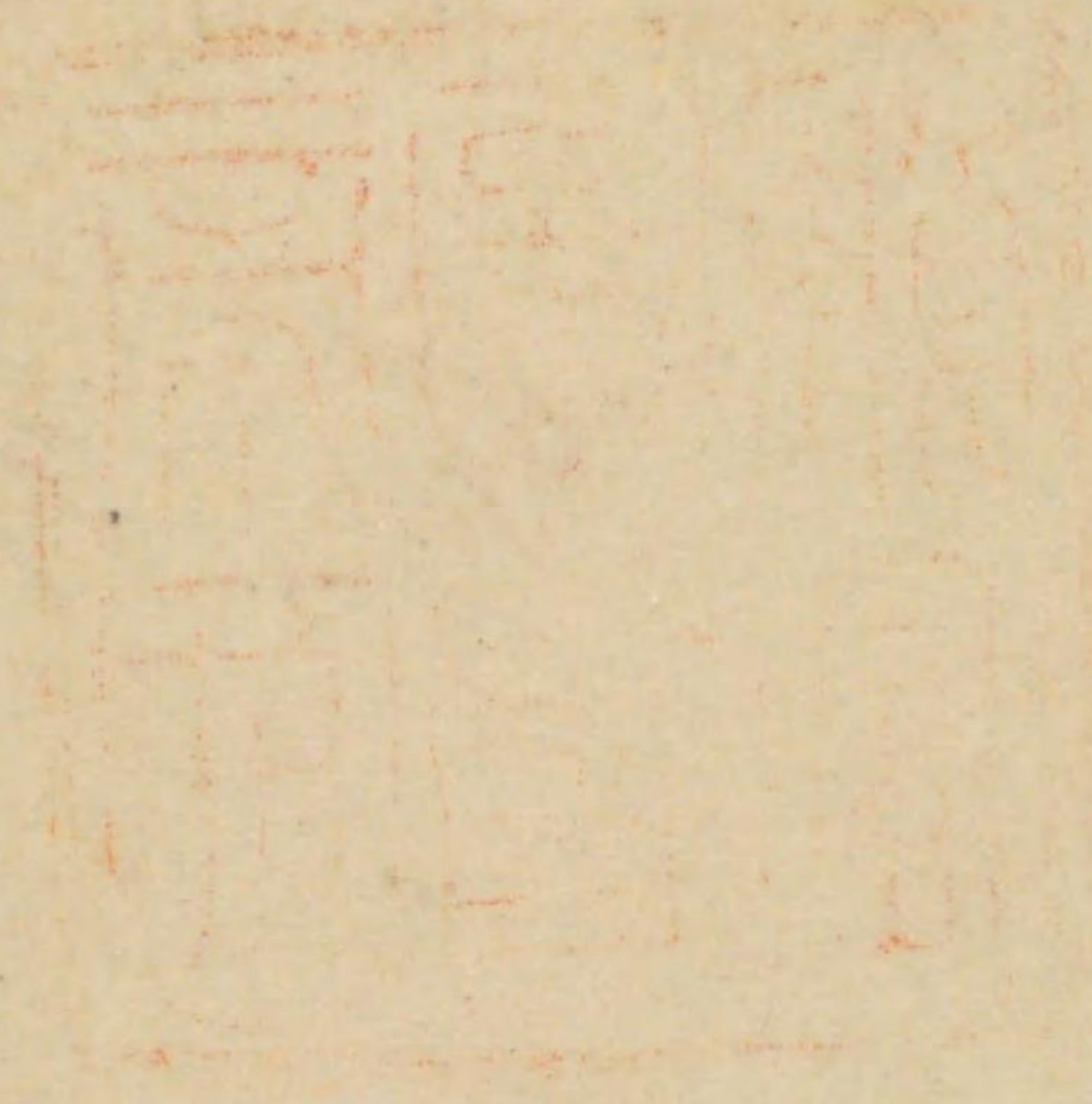
集 全 袋 花

卷 八 第



春のひぞ河・に野の草び再・殺銃の卒兵一

會 行 刊 集 全 袋 花





前列、向つて左端が著者。右へ古屋登代子、片上伸、國木田収二。
後列、向つて左端が齋藤弔花、厨川白村、佐藤紅綠の諸氏。

(秋初の年七五七六)

者著の折たつ行に演講へ阪大

693

176

序

いろいろのことで花袋君がおもひ出される。然しその中で花袋君が生得の抒情詩人であつたこと——それを私はここに擧げて見たい。それは確に花袋君の出發點であつた。その純眞素朴の美德は自然主義を主唱し、身を以て闘ひぬいた苦惱の心をも潤ほしてゐた。「生」「妻」等に於ける印象的描寫に輝かしい境地が拓かれたのも、この抒情詩的資質のおのづから然らしめたところであらう。更に同じ素因から、かのドオデエを想はしむるユーモラスな短篇の幾つかが遺されてあるのも、私には

懐しい極みである。

花袋君は絶えず詩に關心を有ち、エルレエヌの名作をいちはやく邦語に移し、後にはユイスマンス、ロオデンバツハの諸作を繙いた。乏しくなつた私の書架にもその當時花袋君に追隨して手に入れ、しかも読みさしたままの「途上」一篇が、今だに埃にまみれてゐるのも悲しい。私は三十年前交遊のあとを追想して覺えず活然たるものがある。

蒲原 有明

花袋全集 第八卷 目次

序文 (蒲原有明)

一兵卒の銃殺……………三

再び草の野に……………一〇七

河ぞひの春……………四七

解説 (前田 晁)……………七五

目次

一 兵卒の銃殺

一兵卒の銃殺

薄暮はその静けさと、初夏の頃によく見る夕べの靄と、處々に輝き初めた灯と、そことなく靡き渡つた夕炊の烟とを以て、次第にあたりに迫りつゝあつた。大きな兵營のある町の通りでは、今しも門限に遅れないやうに、彼方からも此方からも兵士達が急いで歩いて來るのが見えた。向うの横町からも出て來れば此方の通りからも出て來た。急いで駆けて行くものもあれば、暢氣さうに二人づれで何か話しながら歩いて來るものもあつた。列に離れた雁のやうに淋しさうに向う側をほつり／＼歩いて來るものなどもあつた。さういふ人達は總て一日の日曜の外出を出來るだけ十分に楽しんで來た。親類の家に行つたもの、活動寫真小屋に半日を費したものの、小料理屋に行つて女を相手に戯れて來たもの、知己も下宿もなく、さうかと言つて酒を飲んだり芝居を見たりする趣味もないので、ひとり郊外の静かなところで菓子などを食つて來たもの、昨日圖らず若い女房が母親とやつて來てゐて、町の小さな旅籠屋で久し振りで樂し

く一日を送つたもの、總て一週間の激しい勤務と勞苦とを忘れて、籠を離れた鳥のやうに、自由に快活に遊び廻つて來た。しかしその待焦れた楽しい一週の日も過ぎた。これから六日は又骨の折れる演習をしなければならぬ。上官の叱責も黙つてきかなければならぬ。朝も暗いうちに起きなければならぬ。こんなことを思ひながらかれ等は皆急いで、歩哨の立つてゐる大きな營門へと近づいて行つた。門の前で一々立留つて敬禮して、手帳などを見せて行つた。門の中には大きな建物と廣い營庭とが見えた。營庭にはぶら／＼彷徨いてゐる兵隊が二三見えた。横に長く連つてゐる兵舎にも、正面に見える兵舎にも、もうところどころ灯がついてゐた。夕べの露は靜かに地上に這つてゐた。

横町から出て來た二人の兵士は、

『何うだつた、今日の外出は、もてたか？』

『……………』

『いやに莞爾笑つてゐるな、持てたな。』

『駄目さ。』

『何が駄目なものか。聞いたぞ、聞いたぞ。』

『それよりも貴様は何うだ？』

『俺か……。俺なんか隠しやしねえ。奴と三人で、これを……………』と鼻を觸つて見せて、『これをやつてな、すつかり負けちやつた。』

『取られたんか？』

『すつからひんさ。』

『何うだか。』

『本當だよ。隠しやしねえぞ。仕方がねえ、今度の日曜は拳でも打つて籠城さ。』考へて、『あつたら、少し貸せや。』

『あるもんか、俺だつて。』

『貴様なんか好いや、家はいゝし、金は何うでもなるし、あゝいふ情婦もあるしよ。金がなくなれや、爲替ですぐ送つて來るぢやねえか。』

『家だつて、さう／＼は送らねえや。』

ふと、營門の前に近づいて來てゐるのに氣が附いて、急に話をやめて立留つて、型の如く歩哨に敬禮して、急いで門の中に入つて行つた。

續いて三人づれの初年兵が入つて行き、そのあとから又一人入つて行つた。刻々毎に門限の時刻は迫りつゝあつた。慌てゝまた脊の高い古兵が一人、二人、三人まで駆足で走つて來て、急いで敬禮をして、

門内にその姿を隠した。

暫くは往來が絶えた。何處か工場で、汽笛の鳴る音が吼えるやうにきこえた。また一人二人入つて來た。しかしそれだけであとは絶えた。門限の時刻を報ずる喇叭はやがて夕暮の空氣を劈いて、嚙喰として、四邊に鳴り渡つた。

二

その鳴り渡る門限の喇叭の音を要太郎はそこから五町ほど手前で耳にした。しまつた！と思つてかれは立留つた。胸は俄かに強い鼓動を感じた。

さつき氣が附いて時計をポケットから出して見た時にも、門限の時刻の既に迫りつゝあるのを知つた。慌て、かれは其處から出て來た。かれは兵士達のよく行く白粉を塗つたあやしい女のゐる小料理屋の二階の奥にゐた。『大變だ、大變だ、ほやく／＼してるとまた營倉だ。』かう言つてズボンを穿いたり上衣を着たり劔帶を緊めたりした。送つて出て來ただらしな風をした女をも見ようとせすに、金を財布からぢやらぢやらと音させて出して、そして狼狽へて其處から出た。あたりにはもう兵士達の姿は一人も見えなかつた。さつきあれほど彼方此方を彷徨いてゐた兵士達はいつの間にも何處に行つたかと思はれるほどであつた。かれは駈足で走つた。女と戯れてゐる間にいつとなく時間が経つたことなどを考へた。つ

づいて女の艶めかしい言葉や、白い肌や、その時の状態や、さういふものが、駈けてゐる間にも、かれの頭を横ぎつて通つた。かと思ふと、營倉に入れられた時のガランとした室がそれに聯關して繰返された。寢臺も何もない室、大きな格子戸の卸された室、何もない冷たい板敷の室、そこでかれはまた七日も十日も暮さなければならぬのか。宛がはれた冷めたい握飯を食はなければならぬのか。あの氣難かしい意地惡な班長や曹長に横鬢を張られなければならないのか。

……かれは急いで走つた。かれは左の手で、小さな劔のブラブラするのを押へながら走つた。

ある町家の店にかゝつてゐる時計はもう時刻を過ぎてゐた。かと思ふと、まだ二三十分間のある時計の處もあつた。かれは走りながら自分の時計を出して見た。もう五分しかない。それに、兵營まではまだ十五六町もある。

あるところでは『なるやうになれ』と思つて、多少自暴氣味で、小さく歩調を緩くして歩いた。班長などにも反抗してやるやうな氣分で歩いた。五分か十分、それが後れたためばかりに、營倉に一週間も十日も入れられなければならぬといふ情ないはめなども考へた。しかし、少し行つた時には、矢張さうしては居られなかつた。矢張要太郎は駈けた。

兵營が見えるかと思ふあたりにも、門限の喇叭が鳴らないので、ほつと呼吸をついて立留つたと同時に爽かに夕暮の空氣を劈いて鳴りわたつたその音！ 急に閉ざされた鐵の門！

『しまった！』かれは思はず立留つた。

もう日は暮れてゐた。あたりは茫と夕べの靄に包まれて、兵舎の灯や町家の灯がぬれたやうにほんやりとかすんで見えた。突然、さつきあそこに自分が入つて行く所を意地悪の班長にチラと見懸けられたことを思出した。一緒に行つた同年兵が女にふられて自分より早く歸つて行つたことを思ひ出した。『駄目だ駄目だ！』かうかれは心の中に叫んだ。

地團太踏んでも及ばないやうな焦燥がかれの全身を領した。感情に強いかれ、意地に強いかれ、幼い時から強情で母親に持餘されたかれ、さういふかれが底の底から現はれて来て、全身が赫とした。

入營した一年はかれは非常に評判がわるかつた。營倉に入つたのも一度や二度ではなかつた。ある時は窃盜罪に擬せられて、自分の私物箱や寢臺を調べられたり、丸裸にされて調べられたりした。紛失した物品が自分の寢臺の下から出た時には、班長や上等兵に打つたり蹴られたりした。それが去年戦争に行つてから、大分さうした不名譽を恢復して来た。戰場ではかれは勇敢な一兵卒として誰にも認められた。斥候に出かけた時には、敵の騎兵の追跡に逢つて、林にかくれたり、池の中に半身を浸けてその目を避けたりして、その重要な任務を果した。

『貴様は、此頃は好くなつたぞ。その意氣を忘れてはならん。帝國の名譽ある軍人と言ふことを第一に念頭に置かなければいかんぞ。』こんなことを言つて中隊長から褒められた事もあつた。その褒められ

たり信用されたりして来たことが、自分には不徹底な淺薄な上つらな觀察としか見えなかつたけれども、それでもかれに取つては、評判のわるいものよりも好い方が好かつた。それに、第一、國の方で安心した。父母もその操行の改まつたのを手紙で喜んで寄越したりした。此間母親が逢ひに来た時にも、ほくほく喜んで行つたことなどを要太郎は思出した。

遅刻、營倉、そんなことは、考へやうによつては、よくあり勝のことで、おとなしくその制裁を受けさへすれば、何でもないと云ふことは一方にはわかかつてゐるが、しかし要太郎にはさういふ風に考へることは出来なかつた。自分の生活、漸く恢復しかけた生活、それがまた今度の事件ですつかり全く破壊されて了つたやうにかれには思はれた。何うしても此のまゝ歸つて行けないといふ氣分が強い力でかれを壓迫した。

氣が附くと、要太郎はいつか兵營の柵の側近く來てゐた。もうすつかり夜だ。それは星のない曇つた夜で生温かい人を焦燥させるやうな空氣があたりに満ちてゐた。ほやけた夜風が壓すやうに不愉快に塵埃を吹いた。

皆な揃つて食事もう終つた頃だ。かう思つてかれは兵營の窓毎に明るくついでゐる灯を仰いだ。あたりはしんとしてゐる。歩哨が黙つてあちこち歩いてゐるのが闇の夜を透して見える。一步二歩、近づいて見たが、かれは又引返した。

特務らしい男が一人、剣をがちやがちやさせて、門から出て来た。歩哨が敬禮をしてゐるのがそれと微かに見えた。要太郎はそれを見ると、さながら重い罪人でもあるかのやうに、慌てゝそこから遁け出した。

三

一時間後には、要太郎は川の畔に来て、ほんやりして立つてゐた。

今時分は隊ではもう自分に就いて、種々な噂をしてゐるに相違ない。あの赧ら顔の意地悪の班長は、得意さうに、自分のあの料理屋に入つたことを週番士官や仲間へ報告してゐるだらう。あの同年兵は女にもてなかつた恨を誹謗と讒誣とに託して、あしざまに自分を罵つてゐるであらう。勝手なことを誇張して言つて自分の罪を重くしようとしてゐるだらう。同班の肥つたあいつは、しかつめらしく、あの厭な世辭笑ひをして、班長の機嫌を取るべくあることないこと自分のことに就いて饒舌つてゐるだらう。かう思ふと、その一室のさまが歴々と見える。二つづつ並べた寢臺、その上の棚に置いてある手廻りのものを入れる箱、中央の大机、整頓を入れた包、廊下の架に立てゝある銃、それにびかびかと輝いて反射する電燈、つゞいてその室から扉を排してすつと長い階梯を下りて行くところにある中隊長のゐる室、週番士官のゐる室、長い卓、そこに班長や週番下士が立つてゐる自分の話をしてゐる。無論、自分の箱や衣

類はすつかり搜されたに相違ない。あの女から来た手紙もすつかり見られたに相違ない。こゝまで思つて、ふとかれは吐息を吐いた。さうだ、たしかにあの爲替の巻き込んであつた奴の手紙が入つてゐる筈だ。あの爲替はもうとうに郵便局で受取つた。が奴め、二三日前から来た筈の手紙が来ない、来ないと言つてゐた。それなのに、そこからその手紙が出る。自分のやつたことが知れる。もう知れてゐるに相違ない。

『馬鹿な、ドヂな真似をしたもんだ！』かう自分で口に出して言つたが、もう追附かなかつた。

かれはかれと兵營との距離が非常に遠くなつたのを感じた。もう何うしても歸れない、そこに歸つては行けない。かう思ふと、かれはぐつたりした。

何も彼も完全に破壊されたやうな気がした。續いて今日の日、かうした運命になる最初の一步を歩き出した今日の日を呪ひたくなつた。それと言ふのも財布に、あの爲替の金があつた爲めだつた。要太郎は朝皆と元氣よく兵營の門を出て行つたことを思出した。金があるので、大手を振つて、かれは町から町を歩いた。ある遠い親類になる家を訪問した。そこにかれより四つほど年下の丸ほちやな娘がゐた。それを調戲つたり何かして、晝飯を御馳走になつて、一本飲んだ麥酒に酔つて其處を出た。又町を歩いた。丁度山王の祭か何かで、軒には美しく並んで提灯が下つてゐた。それから活動小屋をちよつと覗いた。ジゴマか何かをしてゐた。俺にもあゝいふことが出来ないことはない。すればいくらでも出来る。こん

なことをかれは考へて、そのすむまで其處で見つてゐた。で、一時間ほどして、其處を出ようとすると、ばつたりその同年兵に逢つた。また二人で町を彷徨き歩いた。そしていつ入るともなく、その横町に入つて了つた。あの時、彼處に入る氣にならなければ好かつたのだ。奴さへ誘はなけれやあそこに入る氣にもならなかつたのだ。かう思ふと、その同年兵が呪はれた。あいつめ今は俺のことを何の彼のと言つて、班長や下士共におべつかつてゐるのだらう。

あいつの顔が……えへらえへら笑つてゐるやがるあいつの顔が。女に調戲つてまづい唄をうたつて、その揚句、女にふられやがつたあいつの顔が。

ふとまた、『何故あの時ぐんぐん兵營の門の中に入つて行かなかつたらう』と思つて、かれはその時の逡巡と躊躇とを後悔した。あの時なら、まだ、入つて行けたのであつた。いや、あの特務の出で來た時でも入つて行けたのだ。何故あの時に入つて行かなかつた？　かう思つたかれは頭の毛を撈りたいやうな焦燥を渾身に感じた。

雜然とした回想が颯風のやうにかれの頭の中をかき廻した。稚ない時分からのわるい癖、郷黨から指彈され冷笑され度外視されたやうな自分の生活、自分のことに就いて怒つたり泣いたり恥を忍んだりした父母の顔、何うして自分はさういふ生活をしなければならなかつたか、自分がわるいのか、それとも自分を生んだ親がわるいのか。それとも又自分を取巻いた周圍のものがわるいのか。それとも又さうい

ふ運命の下に生きなければならぬ自分なのか。

……兎に角、今はもう駄目だ。今は何うしても兵營に歸つて行くことは出來ない。よし又強ひて歸つて行つたにしても、あの懲罰令の規定の下に嚴重な所罰を受けなければならない。

かれはぢつと闇を見詰めた。

すぐ下に大きな川が流れてゐた。それはかなりに廣い幅で、闇の中にも水の黒く光つて流れてゐるのがわかつた。對岸の土手などもそれと微かに見えた。自分の下には、荳だの薄だの、新芽の繁つてゐるのがあつて、その向うに灯の小さくついた船が靜かに通つて行つてゐた。櫓をあさつてゐる船頭の影が黒く闇を劃つて動いた。ギーと舵の鳴る音がした。

ふとかれのゐるすぐ上の土手の路を提灯をつけて誰か二三人で通つて行く氣勢がした。かれははつとした。中隊の者でも捜しに來たのではないかと思つて、體を小さくして草の上に蹲踞るやうにした。話聲は自分のすぐ上を掠めて通つたが、さういふ兵士がそこにゐるなどは氣がつかずにそのまゝ通つて行つて了つた。

暫し經つた。かれはほんやりしてゐた。今まで種々な雜念が起つて來たとは反對に、今度は落附きすぎる位に冷靜になつてゐる自分を要太郎は發見した。それはこれまでも度々かれの經驗した心の状態であつた。『この子はまア何て圖太いんだか。おつかねえやうな子だ。』かう言つて稚い頃から母親は呆れ

た。戦地に行つた時でも、いざと言ふと、かれは糞落附に落附いた。危難に瀕した時とか、大事に臨んだ時とか、さういふ時にはかれはいつでもさうしたわるく落附いた冷靜な心持になつた。

かれの前には、兵營の狭苦しい窮屈な生活とは違つて、自由な、廣い天地が横はつてゐた。かれは脱營兵に就いての種々な話を思ひ浮べた。十人の中、九人までは、何處かで捜し出されてつかまへられるが、その中の一人は巧に遁け終らせることが出来たものだといふ話をかれは聞いたことがある。現に、長い間その逃跡を晦してゐたものから直接にその話を聞いたこともある。その一人になり得ない筈はない。何處か遠くに行く。知人などの一人もゐない海の涯とか山の奥とかいふところに行く。そして一二年働いて暮す。何處に行つたつて、食つてゐられないことはない。かう思ふと、罪惡を犯して巧にそれを隠蔽してゐる人達の心持などが想像されて來た。

灯のついた河舟がまた一つかれの前を動いて通つて行つた。

四

通りに面した田舎の三等郵便局の一室がかれの眼の前に浮んだ。それは丁度山の裾のやうな處になつてゐる町で、温泉が湧出してゐて、古い二階造の家々には、温泉御宿とか、御宿とか書いた招牌が古くなつてかゝつてゐた。山の羣微はすぐその町の前から起つて、雲は絶えずそれにかゝつた。それに、そこに

は大きな山脈を此方から向うに通つて行くやうな街道が町を横断してゐるので、荷車だの運送車だの乗合馬車だの俥だのが絶えず音を立て、通つた。十月になると、山又山の奥は雪で、その月の末はもう屋根の上がいつも眞白になつた。半ば雪の解けた泥濘の中に深く喰ひ込んだ二條の車の轍の跡、向うの家の屋根を越して黄く硝子窓にさし込んで來る夕日、物干棹に並べてかけられてある衣服や足袋、深く雪の積つた朝にチャ／＼と喧しく軒下に集る雀、さういふ時には、湯の元の大湯からは、白い湯氣がぱつと颯つて、それが遠く二里も三里も下の山の路からも指さゝれた。

通りに面した三等郵便局のベンキ塗の大きな構、それはもう今は古くなつて目に立たなくなつてゐるけれども、その始めて出來た時は、それは立派なものであつた。眼も眩いほどであつた。「まア、立派だな、分署よりや立派だ。」など、町では皆評判した。青いベンキ塗は、日に光つて、銅版畫でも見るやうであつた。それは丁度かれが七八歳の頃で、かれを此上なく愛した老祖母がまだその時分には達者で生きてゐた。父の顔ももつと若々しかつた。白髪なども生えてゐなかつた。父が通りに面した卓で事務を執つてゐる傍で、かれはよくその手にぶら下つたり膝に抱かれたりした。

三人の孫の中で一番かれを愛した老祖母の顔は、今でもその前にあるやうにはつきりと思ひ出された。良工が苦心して刻んでも、あゝは出來まいと思はれるやうな慈愛の籠つた深い複雑した顔の皺、笑ふとやさしく出る鬢、「よし、よし、泣くんぢやねえぞ。それ呉れべ。」など、言つて老祖母はよく煎餅などを

呉れた。

何でもかれの記憶では、かれは毎朝床から起されると、すぐその老祖母に負はれたらしかつた。長く軒に垂下つた氷柱、軒下を子供の群つてすべつて遊んでゐる雪橇、はアとつく人の白い呼吸、遠くに白くぴか／＼する山の雪、寒い朝の軒の雀の囀り、手拭を下げて大湯に出かけて行く浴客のどてら姿、さういふもの、最初の印象を、かれはすべてその老祖母の背中から得た。『そら見ろよ。チウ／＼がたんとゐたべ。』こんなことを言つて老祖母は背に負つたかれに指し示した。

ある日、かれは矢張その老祖母の背中の上で、今まで聞いたことのないやうな賑かな音楽の音を聞いた。かれは負はれた老祖母の肩のところから小さい首を出して、延び上つて、それを見ようとした。『今來るで、見せてやるで、おとなしくしてろや。』かう老祖母は言つて、段々近くなつて來る賑やかな囃の方へ近寄つて行つた。何でもそれは秋の午後であつた。黄ばんだ日が一面に人家の並んだ街道にさし込んで來てゐた。それは男と女と隊を組んで、旅から旅へと稼いで歩いてゐるやうな人の群で、頭に載せた番臺の上には、小さな旗が、ピラピラと靡き、三味線を弾いた女の顔には、處々斑らに白粉がついてゐた。一人の女は月琴、一人の女は三味線、男は面白い剽軽な恰好をして、丸い太鼓を打つて唄をうたつて歩いた。子供達は大勢其處に集つて、錢を出して、飴とその小さな旗とを喜んで買つた。かれもその小旗が欲しかつた。老祖母がなだめても賺しても、その小旗を手にしないうままでは言ふことを聞かなか

つたことをかれは今でもをり／＼思ひ起した。

その老祖母のゐる中は、かれは唯愛せられ、撫でられ、甘やかされて育つた。家はさう大して財産があるといふ方ではないが、それでもその老祖母のつれ合ひの祖父が一生懸命に家道に熱中したので、さう醜しくなくつても樂に生活することが出來てゐた。郵便局の尾崎さんと言へば、縣内でも誰知らぬ者はない位であつた。父は隣村から來た養子で、従つて母親と老祖母とに権力があつて、お婆さんの前では、父は頭が上らなかつたのをかれは稚心にも覺えてゐた。かれには一人の兄と一人の妹とがあつた。兄とかれとは物心のついた時分から仲がわるかつた。それは何うしたわけかわからないが、老祖母に自分一人可愛がられたことなども、その一つの原因を成してゐるのであらうとかれは思つた。

老祖母の死んだのは、かれの十一の時であつた。雪のふる日で、學校で授業を受けてゐると、先生がかれの傍に寄つて行つて、『内から迎へが來たから、すぐお歸り。』といふ。何事かと思つて外に出て見ると、近所の爺が學校の下駄箱のところまで待つてゐた。『御隠居さき、加減がわりいで。』かう言つてかれを伴れて行つた。

歸つて行つた時には、もう老祖母は死んで了つてゐた。一三日前から、加減がわるいにはわるかつたが、さう急に死んで行かうとは家の人もかれも思はなかつた。しかしかれは死といふことをまだよく知つてゐなかつた。かれは涙もこぼさなかつた。葬式をして穴に埋めて了つてからでも、かれは幾日かし

たら又あのお婆さんが来て、『坊や、可愛い坊や、』と言ふだらうと思つた。かれは今でもその老祖母のこゝとををりく思ひ浮べた。現にさつき河の畔までやつて来る時にも、かれはその老祖母の顔を眼の前に浮べた。

その老祖母の墓は、町から山路を五六町登つて行つた大きな寺の墓地の中にあつた。歴代の尾崎家の墓地の中にあつた。歴代の尾崎家の墓地の中に！ 一生財産をつくることにのみ没頭して死んで行つた老祖父の墓の隣りに……。

今時分は屹度あの山の上の栗の花が咲いてゐるだらう。その時々につれて、かれはそんなことを思つた。

しかしその老祖母の死んだ後のかれの記憶は索寞たるものであつた。幼い頃は身體が弱く、頭ばかり大きかつたので、『布袋、布袋、』と言つて、兄に酷められた。町でも有名な悪戯な兄は、父母の前では、やさしいことを言つてゐて、陰ではよくかれをひどい目に逢はせた。母に言つても、母はそんなことに取り合つてゐるやうな女ではなかつた。父は兄を愛してゐたので、『弟の癖に何だ。』と言つてすぐ反對に叱られた。

老祖母が死んでからは、かれは一人でさびしく寝なければならなかつた。飯もいつも冷飯ばかりを食はせられた。十三四歳の頃は黙つてむつつりしてゐるやうな兒であつた。そして嘘をつくこと、物を盗

むこととをその頃から覺えた。

老祖母の生きてゐる中にも、さういふ経験は一度あつた。八疊の間に簞笥がある。そこには前に縁側があつて、南向きの日當りよく、冬でも障子を明けて置いて好い位に暖かであつた。かれは其處でよく遊んでゐた。ところがその簞笥には錢が仕舞つてあつたのであつた。老祖母は時々そこを明けてヂャラヂャラと音をさせながら錢の勘定をした。それを度々見てゐるので、かれはある時そこが明いてゐるちよつとの間をねらつて、錢を五錢か六錢かつかみ出した。が急に老祖母は入つて來た。かれは見られて顔を眞赤にした。しかし老祖母は別に叱りもしなかつた。『錢が欲しいけ？ なア欲しけれや言へやな。いくらでもやるで、お婆さん金持だで。』など、笑つた。その言葉が小言を言はれた以上に身に染みたと見えて、かれは今でもそれを思ひ出した。

何うしてかれの經て來たやうな心と體の境遇に置かれたかと言ふことは、かれ自身にもわからなかつた。かれの家は物に困つてゐる家ではない。食ふものでも使ふ物でも何でもあり餘つてゐる。金錢がいれば母親でも父親でも平氣で出して呉れる。それに、家庭と言ふ上から言つても、何方かと言へば、圓滿で、團欒的で、町でも數へられる好い家庭を成してゐた。かれの十四五の時、父親が町の藝者にはまつて、酒に酔つたり金を使つたりしたことはあつたが、それも養子の身分なので、萬事がこつそりと内所で、泊つて家を明けるやうなことはつひぞなかつた。何うかすると、朝から母親が赤い神經性の顔をして父

親に喰つてかゝつてゐることなどもをり／＼はあつたけれど、いつも父親の方が下手に出て、大きな聲を立てることはなかつた。さういふ穩かな圓滿な家庭に生ひ立ちながら、何うしてかればかりが統一を失つた感情的な強情な反抗的な性質を養成したであらうか。

かれが成年期に近づいた頃には、町でのかれの評判は散々なものであつた。郵便局の次男息子、かう言つて誰も彼も背を向けた。『えらいわるが出来たもんだ。今にあれや何んな事をするかわからねえ。』かういふ町の人の定評であつた。學校は十一位まではよく出来たが、大抵三四番のところを下らない位の成績であつたが、十二三からはぐつとわるくなつて、落第も二度ほどするし、卒業する時にも、最後から二番目といふ最もわるい成績であつた。それでもかれは別に自省するといふやうな風もなかつた。脇を向いて、黙つて、執念深く、皮肉な表情をしてゐた。

五

他人が何うしてかう自分にばかり辛く意地悪く當るのかわからないといふやうな氣がいつでもしてゐた。何故この自分がわるいんだらう。また自分のやることは何故さうわるく他人に見えるのだらう。他人も自分自分で勝手なことをしてゐる。自分の好きなことをしてゐる。それでゐて、何故自分が自分の好きなことをしてゐるのを他人は咎めるのだらう。お世辭を言つてゐれば好いのか知れないが、それが己

には出来ぬ。あの醜い諂諛、あの野卑な獸のやうな笑顔、あんなことは己には出来ぬ。陰では人はわるいことをしてゐる。己のやつたことなどよりも數等わるいことをしてゐる。唯、かれ等はそれを旨くやつてゐるばかりである。人に知れないやうにやつてゐるばかりである。かう思ふと、かれはいつでも他人のお先につかはれて、正面に立たせられて、それで汚名を買つてゐることを考へた。

ある時、かれは金を持ち出して、家出をしたことがあつた。それはかれが十八の冬であつた。かれはもう町の周圍と汚辱と壓迫とに堪へられなかつた。街上で逢ふ誰の顔にも、自分の悪名がはつきりと書かれてゐるやうな氣がした。面と向つて何も言はないでも、向うから來る奴が自分に向つて何を言はうとしてゐるのかはつきりとかれにはわかつた。それほどかれは神経過敏になつてゐた。さうかと言つて、家にばかり引籠つてもゐられない。その狭苦しさと窮屈さと退屈とに堪へられない。神経性らしい焦々した母親の顔も氣にかゝる。黙つてのんきさうに煙草をふからふからふかしてゐる父親の顔も癢に觸る。友達と言ふ友達は誰も彼もかれを一種冷やかな眼で見ると。かれはとてもこんな狭い處にはゐられないやうな氣がした。かれはある夜かねて知つてゐる奥の箆笥の鍵を別に拵へて置いた合鍵で明けて、金を百圓ほど持出して、そしてまだ夜の明けない頃に、こつそりと裏からぬけ出して、雪の積つてゐる上をさくさくと踏んで歩いて、そして街道の方へと出た。

一里、二里ほど行つて夜が明けた。振返ると、國境を劃つた大きな山脈の雪が美しく耀々と日に光つ

た。自分の生れて生立つた町が山裾に黒く固まつてゐるのがそれと微かに見える。大湯の白く颯つてゐるのもそれと指さされる。かれは急に悲しくなつた。ひとりでかうして雪を踏んで、誰も知る人もない広い世間に出て行くのが——故郷にもゐられず、父母の膝下にも居られず、人に見放され、また自ら見放して、かうして知らない世間に出て行くのが、堪らなく悲しかつた。一方ではまたさういふ境遇に此身を置かれるやうにした町の人々を呪ひ、一方ではさういふ弱い心と感情とを持つた自分を鞭打ちながらも、堪らなく悲しさが込み上げて来て、オイオイ聲を擧げて泣きながら歩いた。

箆笥をこち明けて中から金を持ち出して来た自分の行爲も悲しければ、黙つて皮肉に人に打突つて行つた自分の心持も悲しかつた。『俺には、こんなにやさしい美しい弱い心持があるのだ。町の奴等の持つてゐる心よりも、もつともつと淨いやさしい素直な心持があるのだ。それが誰にもわからない。誰も知つて呉れない。生みの父母すらも知つて呉れない。知つて呉れたのは、唯お婆さんばかりだ。そのお婆さんはもう墓の下にゐるのだ。』かう思つたかれは益々聲を立て、オイオイ泣きながら歩いた。

『俺のこの美しい心、やさしい心、故郷を別れるについてもかうして泣いて行く心、その心を何故他人は知つて呉れないのか。何故父母は汲んでそれを養成して呉れないのか。俺がわるいのか。それを普通の人のやうに表面に出さない俺がわるいのか。いや、いや、さうぢやない、さうぢやない。父母も同胞も親類も友達も学校の先生も、俺にさういふ心持を起させないやうに、やうにと仕向けた。俺がわる

いんぢやない……』大きな涙はほろほろと、積つて氷つた堆雪の上に落ちた。

鋭い明方の寒氣は廣い荒涼とした雪の高原に満ちた。あたりにはまだ人の影は見えなかつた。早立の俥も馬車もやつて來なかつた。かれは思ふさま泣きながら歩いた。かれの前には、大きな高原を隔て、高い凄じい山が眞白に雪に包まれて、によきくと並んで立つてゐた。今、始めてその形を現はし始めたばかりの朝日は、赤い眩い血汐のやうな光をあたりに漲らせて、黒い小さな點のやうになつて歩いて行くかれの姿を照した。

餘りに泣いたので、かれは朝日を正面に見ることも出來なかつた。

六

かういふ記憶がをり／＼かれに蘇つた。それはかれが十六の時であつた。その原因はそれはもうとうに忘れてゐる。何ういふことであれほどまでにいきり立つたか、又あれほどまでに抵抗する氣になつたか、それはわからない。

兄はその時M市の中學校に行つてゐた。兄はよく出來た。學校の成績も好ければ、品行も正しいといふ評判であつた。弟のわるいといふことで兄の好いといふことを一層色濃くした。兄は制服制帽で有望な少年のやうな顔をして、夏や冬の休暇には、得意さうにして歸つて來た。町の娘達も、『正男さん、正

男さん、』と言つて兄の周圍に大勢集つて來た。

何でも夏の休暇中であつた。場所は裏の廣場で、釣竿などがあたりに散らばつてゐたといふ記憶から考へると、例の裏の川へ釣魚にでも行つた歸りかとも思はれる。

その原因は忘れたが、何でもかれがひどく兄から壓迫されてゐたことは覚えてゐる。ひどく馬鹿にされてゐたことも覚えてゐる。かれは始めはいつものやうに暗く笑つてにやにやしてゐた。何方かと言へば、押へつけられて小さくなつてゐた。

急にもう堪らなくなつたと言ふやうに、かれは兄に武者振り附いた。

『何ッ！』

かう叫んで、其處に立つてゐる兄の胸倉をいきなり攫んだ。其時は流石に兄も弟の劍幕に呑まれたと見えて、ぐつと押されて倒れさうになつた。兄はかれに比べて、脊も大きく、體も肥つてゐた。何方かと言ふと、父親似である。年も三つ違ひの十九だ。

『何しやがる？』

兄は押されながら拳骨でかれの頭を二つ三つ擲つた。しかしかれは其時はもう平生の猫を被つた狼ではなかつた。かれは獐猛な本性を露はしたもののやうに、いきなり兄の腕に着物の上からかじりついた。『痛い！』かう叫んだ兄は、それを放さうとして猶ほ弟の頭をボカボカ打つた。引かく、かぢり付く、打

つ、起きつ、轉けつしてゐるのを遠くで見てるた妹は泣きながら駈けて行つてそれを母親に知らせた。驚いて母も出て來た。父も出て來た。

それでもかれは容易に兄に嚙り附いた手を離さなかつた。兄の顔から濃い血がだらだらと流れ落ちた。

『こら！ 要、何しやがる。兄に手向ひする奴があるか。』縁側から飛んで下りて來た父と母とは、一生懸命になつて二人を引離さうとした。しかしだにのやうに執ねく食ひついたかれは容易にその手を離さなかつた。

無理に離されたかれは、今度は父と母とに向つて食つてかゝつた。眼は血走り、體は震へ、齒をくひしばつて、誰彼の見さかひもなく飛び蒐つて行つたかれは、さながら狂人か猛獸のやうであつた。父と母とに押伏せられて、自分がわるいもののやうにボカボカ頭を打たれた時には、かれは口惜しがつて身もだえして聲を擧げて泣いた。

『此子は兄ばかりか、親にまで手向ひするのか。』

かう母親は叫んだ。

オイオイ聲を擧げてかれは泣いた。この世が盡きて了つたかと思はれるやうな大きな悲哀がかれを壓した。滅多に聲を立て、泣いたことのないかれであるが、その時ばかりは押へても押へても、その悲哀があとからあとへと胸にこみ上げて來るので、目の當つた白壁の前に立つて、いつまでもオイオイ泣い

てゐた。

七

情事を始めて知つたのは、かれがまだ家出をしない前であるから、確か十七位の時であつたらうと思ふ。

かれの故郷は、温泉があり、温泉宿があり、それに雜つて、街道に面して、宏大な女郎屋が何軒もある。町の空氣としては、何方かと言へば淫猥に傾いてゐた。女郎がだらしない風をして、二階の欄干に凭つて通りを見下してゐることなどは決してめづらしい事ではなかつた。それに藝者も二三十人はゐたし、處々にある小料理屋には、其處にも此處にも色の白い酌婦が大勢置いてあつた。男と女と艶めかしい風をして並んで通りを歩いてゐたり、男のあとを追ひかけて女が袖を引張つてゐたりするさまを、かれは度々見かけた。其時分はまだ汽車が出来ない時分なので、此方から向うへ大きな山脈を越えて行く旅客は皆此處を通つて、一夜を温泉に過すのを例としてゐた。草鞋がけの旅客、俥に乗つて行く洋服姿の紳士、一緒に伴れた若い細君、をり／＼は乗合馬車が客を集めるための喇叭をけた、ましく鳴らして折れ曲つてや、坂になつてゐる町をガタガタ通つて行つた。大きな温泉宿のある角のところには、俥の立場があつて、元氣の好い車夫が六人も七人も寄り集つて客を待つてゐた。「馬鹿言ふなえ？ 六貫で山

越しをして、それで飯が食へるかえ？」かう勧めてついて行つた旅客を離れて来て、車夫は大きな聲で言つた。

夜の町の賑かさ！ 何處の女郎屋にも客が上つて、きやつきやつと女の騒ぐ聲が手に取るやうにきこえて、三味線と鼓とが到る處で自暴に鳴つた。お酌の小さな姿の踊つてゐるのがはつきりと明るく障子に映つて見えたりした。と思ふと、やがてその騒ぎはぱつたりと静まつて、あとはしんと静かになる。手を叩く音などがする。何處か遠くでまだ騒いでゐる鼓や三味線の音がきこえる。

その賑やかな町の通りを、白くおつくりした顔をはつきりと闇に見せて、褌を取つて、急いでお座敷へ出かけて行く藝者などをかれはよく見かけた。

それ以前にも、彼は父親の關係した藝者と言ふのを見たことがあつた。それは何でも十四五の頃であつた。かれは不思議な氣がした。世の中の人の言ふことは當にならないといふ氣がした。彼の眼には父親はもうかなりの年輩であつた。お爺さんと言ふ程ではないが、一廉の年寄のやうに彼には思はれてゐた。それがさうした若い二十一二の女に關係するといふことは、ありやう筈がないやうに思へた。世間の人達は好い加減なことを言つてゐるのだと思つた。その藝者と言ふのは、丸顔の、色の白い、ちよつと愛嬌のある女で、さういふ女のゐる細い巷路の中に住んでゐるが、世間の評判では、何でも父親が金を出して、自前にしてやつたといふことであつた。兄は一二度其家に行つたと言つて、よく自慢してゐた。

何うかすると、その女が綺麗におつくりをして、襦を取つて、お座敷に出かけて行くところに出會ふことなどもあつた。さういふ時には、かねて知つてゐると見えて、女は厭にじろくくと要太郎の方を見た。莞爾と笑つて通りすがつて行つたりした。それが、その綺麗な若い女が、自分の姉にしても好いやうな女が、父親と關係してゐる女だとは何うしても思はれなかつた。でも何うもそれが本當らしいといふことはをりくかれの眼や耳に觸れた。母親が機嫌のわるい時にいふ『小光』と言ふ名は、その藝者の名であつた。『小光なんかに騙されてゐて、本當にしやうがねえ。』こんなことを母親の言ふのを要太郎はよく耳にした。

かれは時には、不思議だ、めづらしいことだと言ふ感じを抱いて、父親が椅子に腰をかけて、助手と相向ひ合つて、のんきな顔をして、郵便事務を取扱つてゐるのをちつと見詰めてゐることなどもあつた。何處をさがしても、さういふところはない。さういふ感じのするところはない。やゝ淺黒い顔、尖り加減の鼻、どんよりとした眼、ところどころに白髪が雜つてゐる頭、もじやもじやと繕はない髪……不思議だとかれは思つた。

しかしさういふ風に稚かつたかれも、一年二年経つた後には、さういふ方面の知識にかけて驚くべき長足の進歩をしてゐた。かれに最初に情事を教へたのは、自分の家とは二三町隔つた大きな女郎屋にその時分ゐた、かれよりも三つ四つ年の上の女郎であつたが、その翌年には、かれは既にかなり深い情海

の波に漂つてゐる自分を發見せずにはゐられなかつた。最初伴れて行つたのは、町で若衆になつたばかりの、かれよりは年上の友達であつたが、その後は、かれは自分一人でこつそりと裏からわからないやうに入つて行つたりした。

最初の年上の女郎は、二三度行くと、かれには面白くなくなつて來たので、今度は別の女郎屋に行つて、まだ出たばかりの十七ほどの若い玉菊といふ女を聘んだ。かれはいつか酒を飲む術をも、唄をうたふことをも覚えてゐた。歡樂の興味は時の間に深くかれの成熟しかけた體と心とを完全に捕へて了つた。

その時分であつた。かれがよく金を家から持出したのは——用篋の底、父の傍に置いてある箱の底、人が持つて來たのをちよつと母親が手近に置いた金などを平氣でかれは持出した。そして聞かれると、かれは知らぬ知らぬと言つた。糺問すれば糺問するほど、かれは頑強に知らぬ知らぬと言つた。後には何を言つても黙つてゐた。

兄は其頃はもうM市へ行つて中學校へ入つてゐた。それに引替へて、かれは成績がわるいのと、さう澤山學者ばかり出來ても困ると言ふので、何處にもやられずにぐつぐつ家で遊んでゐた。かれはいつも暗い心持でゐたが、殊に學校を出てから情事に關係するまでの間の月日を暗い暗い心持で過した。そしてその暗い心の僅かな遣り場をかれは情海に發見した。

しかし大抵の若者なら、十七八の年輩では、さういふ波に深く入り込むといふことに就いて、一種の

危険と不安と反省とを感じる筈であるが、かれには、何故かさういふところが缺けてゐた。強い感情であつたからか、それとも根本から反省心の缺けてゐる青年であつたからか、それともまたわざと皮肉に反抗的に押して出て行つたのか。

けれどかれの遊び方は、初めは對者を一人きめて置くといふ風ではなかつた。かれには世間の青年に多く見るセンチメンタルなところがなかつた。女に同情したり憐憫の心を持つたりするやうなところがなかつた。現にその時分宅でつかつてゐた小婢と出来てゐて、それで矢張かれは馴染の女郎の許へも通つてゐた。

小婢はM市の少し手前の村から来たもので、その時かれと同じ年であつた。名をお雪と呼んでゐた。

『雪や、雪や。』かう呼ぶ母親の聲が奥からかれのゐる室の方まできこえた。ちよつと丸ほちやの肉の豊かな色の白い子で、眼附と眉のところに可愛いところがあつた。二人の關係は、何方かと言へば、男がちよつと觸つて見たのに、女の方から潮のやうに漲る熱い心を寄せて来たのであつた。二人はいつも裏の小舎の中で嬉曳した。

それは滅多に人の行かないやうなところであつた。家ではいくらか百姓もしてゐるので、馬までは飼つてゐなかつたが、小作の持つて来る米や豆や麥などを藏つて置く大きな小舎が裏にあつた。かれのゐる室、ちよつと樹の茂つた庭、それから野菜物の青々をつくつてある畠、それを通り越したところにある

その小屋——その中にはいろ／＼な物が雑然として置かれた。

かれに取つては、潮のやうに熱く漲つて来る小婢の情がいくらか煩さいやうな氣がしてゐた。容易く手に入れられたといふことも、戀そのものに就いての安價の表現のやうに思はれてゐた。下婢なんか、何うにもなるもんだといふやうなところもないではなかつた。それにも拘らず、かれはよく女とその裏の小屋へ行つた。

その女の縋るやうにして来るやさしい心、辛い忙しい生活の中にその瞬間をのみ唯一の生命のやうにしてゐる心、虐けられた小鳩がわづかにその安息所を其處に發見して絶えずまつて来るやうな心、大勢の中にあるてをり／＼心を通はせるやうにちつと此方を見る眼、それをなつかしいともいぢらしいとも思はぬではなかつたけれど——また田舎にはめづらしいその豊かな肌を自分で所有してゐるといふことを誇りにしないではなかつたけれど、それでもかれは決してそれだけでは満足してゐられなかつた。かれの根本の矛盾した拮据した感情は、却つてさういふ弱い柔しい美しい愛情の隙間に冷淡な鑿を打込まずには置かなかつた。

その仲が知れて小婢が暇を出されて行つた時のかれの態度は、町のある部分の人達には當分噂のたねとして語られた。『呆れた青年だ。冷めたい奴だ。』かういふ聲をかれは到る處で耳にした。誰も皆なその弄ばれた小婢の不幸な運命と涙とに同情しないものはなかつた。その小婢の母親は、要太郎の父母が冷

淡であつたといふことよりも、より一層冷淡であつたかれのことを、彼方此方に行つて話した。

然しかうした矛盾した扨拵した性格にも、聽てさうばかりはして居られないやうな時が到着した。其頃、彼の通つてゐる女郎に、十七になる梓といふのがゐた。容色はさう好い方ではなかつたけれど、その姿態やら表情やら言葉やらに、何處か人の魂まで深く入つて行つて魅して了ふやうな處があつた。要太郎は始めは矢張、例の單なる歡樂の對照として通つてゐたのであつたが、暫くして氣の附いた時には、自分がつかりその陷穽の中に陥つてゐるのを發見した。日が暮れて、灯がつきさへすると、かれは家にじつと落附いてゐることが出来なかつた。しかし、親の財産より他に一物を持つてゐない彼は、次第に思ひのまゝにならなくなつてゐる自分を見た。女郎屋でも、初めの中は、現金を持つて行かなくとも遊ばせたが、それもさうくは長く續かなかつた。父も母も注意して嚴重に箠笥に躰をかけ、ちよつと持つて來た金も其處等には置かず、爲替や貯金の爲めに出して置く金も、事務が終ると一々金庫の中に藏つた。

それに此頃では、かれの道樂と不身持があたりに知れわたつてゐるので、親類や知己や友達はもうかれの借金の相手にはならなかつた。皆な笑つて、或は怒つてかれを遇した。二里ほどある山際の叔母の許に無心に行つた時にも、あべこべに散々に小言を言はれて、腹が減つてゐるのに、夕飯をも食はせず追ひ返された。彼は女に對する苦痛と世間に對する苦痛とを二重に嘗めさせられなければならなかつた。か

れは嫉妬といふものゝ恐ろしさに體も精神も滅されて了ふやうな氣がした。梓には有力な客が二人も三人もあつた。ことに、ある村の大盡の息子が一番深く言交してゐるといふことを知つた時には、成熟の一步を経たにすぎないかれの體と心とはガランとした恐ろしいある空虚に陥つたやうな深い大きな動搖を感じた。虚偽、欺騙、陷穽、さういふものが執念くかれに絡み着いた。

金がなくて登樓することの出来ない夜もかれはじつとして家に落付いてゐることは出来なかつた。さういふ時には、かれは裏の山路から、(露地を入つて行つて、見附かつて赤恥をかゝされたことが一二度あつた。)草や樹に縋つて、溝のあるところへ下りて、そこからぬき足さし足して、その遊女屋の裏口へと忍び入つた。そこからは、梓の居間が裁込を通してそれとよく覗かれた。それにしても、かれは若い十七八の青年の身で、何んなに暗い何んなに疼い心を抱いて、その灯の明るい女の居間と微かな嬉しさうな話聲とに對したであらう。暗い暗い心、胸が上つたり下つたりするやうな心、體も精神もこなぐに打碎かれて了ふかと疑はるゝばかりの心、さういふ深い心をかれはそこで何遍となく經驗した。

人間の持つた最も底のもの、最も深いもの、最も淫蕩なもの、さういふものに邂逅すると、十分成熟し切つた人間ですら、何等かの感化を受けずには居られないものであるが、一步々深く掘つて行く穴が、さながら恐ろしい罅の口のやうに恐ろしい暗い底をひらいて見せるものだが、年の上から言つても知識の上から言つても、まだ纔に最初の階梯を上りかけたばかりの彼が、かうした境に身と心とを置い

たと言ふことは、かれの一生に取つて實に見遁すべからざる一大事であつた。かれは女に逢ふために――寧ろかれの實在を確實ならしめるために、遂に郵便物の中から、小爲替券だけを選んで窃取して、それを他の町へ行つて受取つて來た。

その爲替を受取る町にいつでもかれは青年に似合はぬ細心な注意を拂つてゐた。かれは決して同じ郵便局で二度も三度もつゞけてそれを受取らなかつた。かれはかれの町の附近にあるT町、S町、N町とわざ／＼出かけて行つた。それを實行するための認印も二つ三つほど作つて、Nの局では、何ういふ名、Sの局では何といふ名、Kの局では何といふ名といふ風にきめて置いた。

其頃にはかれの眼は鋭く光を放ち、態度にも落附かぬところがあり、何となくそはそはと注意深く四邊を見廻すといふやうな癖が出來た。かれは郵便局の人達の無心に調べる爲替券の手先や目色を不安な尖つた心持で見詰めた。そして局員がその爲替券から眼を離して、現金の入つてゐる机の抽斗を明けかけるとはつとした。金を受取つて外に出た時には喜悅が胸に溢れた。

S町から一里半、N町から二里、その間を急いで自分の町の方へ歸つて來た印象は今でもはつきりとかれは眼の前に浮べることが出來た。S町から來る方には、かなり長い坂があつた。運送車や荷車が通つた。竹藪に赤い烏瓜などがぶら下つてゐたりした。N町から來る方には、前に遠く開けた裾野を見て、山の裾をぐる／＼廻つて行くやうになつてゐた。子供達が、やさで網を持つて、小川で魚を掬つ

てゐたりなどした。かれは小石をほうつてかれ等を驚かした。

T町が一番遠かつた。そこに行くには何うしても半日かゝつた。しかし女に逢ふためには、そんなことは何でもなかつた。かれは山に添つたり泥池に添つたりして行つた。何うかすると、歸りは途中で夜になることなどもあつた。かれは何んなに山の斜陽の上に靡き下る自分の町の明るい灯を望みながら路を急いだであらう。

しかしかうした悪事が長く知れずに残つてゐる譯がなかつた。N町の郵便局は一番最初にそれに疑を挾んだ。かれはある日その局員の一人にあとを尾けられた。あらゆる秘密は發かれた。其町の郵便局の次男息子だといふこともわかつた。恐らく、今であつたなら、あらゆる人達の調停と心配と運動とを以てしても、かれは縲綆の恥を免るゝことが出來なかつたであらう。辛ひに、まだその時分には、地方警察にも何處かルーズなところがあつた。それに、同じ郵便局の息子と言ふことゝ、その父親が地方でもかなり知られてゐる人であることゝ、まだ志の固まらない青年の一生をさうした一過失で葬り去つて了ふことの残酷であるといふこと、それから父親始めその町の有力者の切なる惻願とに由つて、かれの犯した罪惡はそのまま、公に世間に發表せられずに済むことになつた。そのためには父親は跡からず金を使ひ、母親は神経性の顔を愈々赤くして、口癖のやうに愚痴を零した。『親不孝』『泥棒』『家名を汚す悪人』『お前のやうな子を何うして私が生んだか』『馬鹿な奴もあればあるもんだ。貴様が騙取つた金の百層倍

も錢を使つた』かうした言葉をかれは父母から口癖のやうに浴びせられた。

否、父母や親類からばかりではなかつた。町では誰もその事件を知らないものはなかつた。勿論口に出して、かれの面前でそれを言ふものもなかつたけれども、かれは侮辱と好奇と冷笑との眼に到る處で出會つた。誰も彼も皆なかれを指して見て笑つた。

かれは蒼白い勞れたやうな顔をして終日家の中に入つた。しかしその事件そのものよりも一層かれに強い打撃を與へたものは、その十一月の末に、女がかれの競争者であつた他の村の豪農の息子に引かされて、土地を去つたといふことであつた。事件が起つてゐる間にも、かれは二三度女に逢ひに行つたが、それがばつと世間に知れてからは、もう何うすることも出来なかつた。かれは寒熱の往來するやうな心の苦痛の中に其日其日を送つた。女を呪ひ、競争者を呪ひ、自己を呪ひ、父母を呪ひ、この世間の存在を呪ひ、金を呪つた。また曾てはかれの唯一の生命のやうに感じ、唯一の慰藉のやうに感じ、唯一の快樂の場所のやうに感じた大きな二階屋を呪ひ、色宿子の窓を呪ひ、夜毎にひびきたる太鼓を呪ひ、障子に移るお酌の踊り姿を呪ひ、女と二人相對して喃々綿々とした居間の長火鉢を呪ひ、遠くからきこえて來る長廊下のばたばたした草履の音を呪ひ、燃えるやうな緋の長襦袢を呪ひ、白い美しいベッドの中の肌を呪つた。かれは何うして好いのかわからなかつた。かれは自分がもうわからなくなつて、自分が世間の青年と同じであるかを自分に訊ねるやうな日などもあつた。それからまた女が何うしてその豪農

の息子について行つたか、あれほどの漲る情と熱い心とを見せた女が、自分には何の言葉も残さずに、わづかばかりの心残りのしるしをも見せずに、路傍の人のやうに、否、路傍の人よりもつと無關心に何うしてこゝから離れて行つたか。行かれたか。それは虚偽か、欺騙か、それとも人間にもさういふことが本當に出来るやうに造られてあるのか。そこまで行くと、かれは髪の毛を撈らすにはゐられないやうな、熱い燃えるやうな焦燥を感じた。

さうかと思ふと、それとは丸で反對に、その虚偽と欺騙とを肯定して、復讐的に自分もさうした打撃を人に與へてやらなければ止まないといふやうな氣が躍然として起つて來るのをかれは見た。かれは皮肉な顔の表情をして下唇を堅く噛んだ。年を重ねても容易に經驗することの出来ないやうな、又は或は一生さういふ經驗に逢はずにすむものもあるやうな深い大きな經驗に逢つたかれは、既に世間に多くあるナイーブなセンチメンタルな青年などとは丸で違つた心持を養成されるべく餘儀なくされたのであつた。

その年の暮には、冬期休暇で、兄はM市の方から歸つて來た。學校生活の秩序正しい、元氣な、活潑な、物を受入れることに素直な、同じ我儘でも純な兄と比べて、かれはいかに大人らしく、陰氣にひねくられて、デジエネレートして見えたであらう。肥つた色の淺黒い健康らしい兄とは反對に、かれの顔は蒼白く、眼は鋭い中にどんよりと不定な動搖を藏し、體は瘦せてひよろ長く、過重の重荷に堪へられない

といふやうなところがあつた。かれは兄と比べられることを恐れた。それが暫くして比べられることを怒るやうになつた。つゞいて自分のふしだらを詳しく父母から聞いて知つてゐながら、一言もそれに及ばない兄を仇敵のやうに憎んだ。兄の成績の好いのを以つて弟の不評判をかくさうとする父母の態度を憎んだ。

そしてかれはある夜金を持出して家出をしたのであつた。

八

しかしかれにも暢氣な時代があつた。

何うしてあゝいふ風に暢氣になつたか自分にもわからないが、一時變つた人のやうにほんやりして、その持つてゐる皮肉と觀察と動搖とは全く何處かに捨て去つて了つたやうに、置き忘れて來たやうに、唯ぶらぶらして遊んでゐた。

家出をして一年ほどしてつれられて歸つて來てからも、かれの女に對する興味は決して鈍りはしなかつたが、しかし其頃はもう以前のやうに張詰めた突詰めた考を持つてゐなかつた。金さへあると彼はそれからそれへと女をさがして遊んで歩いた。地の女などにもかれはよく手を出した。

かれはさういふ種類の男の持つ女に對しての氣安さとのんきさと無關心といふやうなものを段々と養

つて持つて來てゐた。女は男の相手、男は女の相手といふやうに、成たけさういふ風に解釋して見る方が、かれにも樂であつたし、面倒でもなかつたし、世間の受けも好いし、女に對しても却つてさういふ方が有効であるといふことをもかれは段々覺えて來た。

しかし町ではかれの評判は矢張わるかつた。それに、かれのこと、言ふと、人が殊更に注目して見るやうにかれには思はれた。かれの一つのわるいことは、十にも二十にもなつて世間の人達に反響して行くのに反比例して、かれの善いことの一つはその半分乃至三分の一も人の眼を惹かなかつたのをかれは見た。

その時代は、しかしかれに取つては無難であつた。かれも段々肥つた立派な體格を持つやうになつた。頭を綺麗にわけて刈つて、白縮緬の大幅の帯をしめて、時計の銀ぐさを其處に見せながら、小料理屋の店の長火鉢の前に坐つてゐたりした。

その時分、かれは一時釣魚に熱中して、竿をかついで一里二里のところによく出かけて行つた。かれはもう二十歳であつた。一緒に行く近所の子供達の眼には、もう好い加減な大人に見えた。白い浴衣、鼠が、つた三尺帯、長く綺麗に刈つた頭、苔蒼を下けて、釣竿をかついで、いつも二人三人の子供を伴れて、かれは廣々とした野の方へと出かけて行つた。

野にはとところどころに用水の長い流があつたり、そこから縦横に引いた小流があつたり、わざ／＼水

を溜めて置く堀、溝見たいなものがあつたりした。川柳の生えてるところや、荻や蒲の茂つてるところには、鯉や鮒やはやが澤山にゐた。さういふところで、かれは草を折敷いて、竿を水に入れて、じつとしてその浮きの動いて来るのを眺めた。『おい、おい、そんなところで騒いぢやいかん。折角、魚のゐるところに來たんだ。』こんなことを言つて、伴れて來た子供等を別の堀の方へ追ひやつたりした。

何うかすると、その堀切や溝の持主の百姓などがやつて來て、苦情を言つたりすることなどもあつたが、さういふ時にも、かれは別に反抗がましい態度を見せなかつた。かれは素直に竿の糸を巻いて、さつさと子供達を伴れて向うの方へ行つた。

夕暮など荅着を持つて、町の通りなどを歩いて行くと、知人の二三が傍に寄つて來て、『此頃は好い道樂を始めましたな。』など、言つて、ごちやごちやと鮒や鯉が動いてゐる中を覗いて、『大變取れた！ 大漁だ。女にかけての名人は、矢張、魚釣も上手と見える。釣ることの名人は違つたもんだ。』など、言つて通りすがつた。

時には一人で出かけて行くことなどもあつた。さういふ時には、かれは殊に深い靜かな空想に耽ることを樂んだ。別に學問はないし、さうした種類の文學的本も繕いて見たことのないかれではあるが、それでも川柳の蔭にそよそよと吹く風につれて小皺をつくつて寄つて來る小波、靜かに人の心に沁入るやうにあたりに淡く薄れて行く夕日の光、碧く地平線を劃つて聳えてゐる山、ふわ〜と羊の毛のやうに

靡きわたる雲、何處か遠くでガラガラと靜かな音を立て、通つて行く荷車の響、長くつゞいた街道の電信柱に添つて歩いて行く旅客、さういふものに對して何を考へるともなく、ほんやりとしてゐると、浮標が動いて針の餌が空になつてゐるのも知らず、セコンドが動いて時間が経つて行くのも知らず、自分が經て來たやうな辛い苦しい世界がこの世の中にあるのも知らず、女が男に縋つて行くのも、男が女に引張られて行くのも、何も彼も忘れて了つたかのやうに、かれには思はれた。

かれは唯ほんやりとしてゐた。

この釣魚の道樂は二年ほど續いた。その間にはかれはかれの將來のことなどを種々に考へたりした。いつそこんな處にぐづぐづしてゐるよりか、アメリカにでも行つて了はうか。過去の何物をも知つてゐない土地に行つた方が、なにほど自分の本當のことが出来るか知れないと思つた。現に一度などはすつかりその氣になつて、南米移民の勧誘員の町にやつて來たその旅館にまで押しかけて行つて、その細かい話を聞いたり、心をそゝるやうな外國の珍奇なさまに耳を傾けたり、規則書を貰つたり、そこに行くについての費用を細かく勘定して貰つて見たりした。

尠くともその希望は二ヶ月間かれの胸に燃えてゐた。しかし、信用のないかれは、父からも母からも親類からもさうした比較的眞面目な話を眞面目に聞いて貰ふことが出来なかつた。その要求は一も二もなく到る處で否定された。ある人は頭から笑つてそれを相手にしなかつた。かれの本當な眞面目な希望、

兄などに比較したならば、言ふにも足りないほどの小さい要求、それすらかれは信用して父母から出して貰ふことが出来なかつた。かれはそのときのことを今でもをり／＼は思ひ起した。それは丁度、これから冬にならうとする頃で、晴れた空は毎日のやうにつゞき、山には錦繡をかけたやうに紅葉が染め、風は大きな山脈を越して凄じく吹下して来た。奥の奥の山には雪が白く指さして仰がれた。かれは達し難い心の不平を抱いて、いつも裏の細い路を歩いた。

そこからは女郎屋の赤い蒲團が、さながらかれに昔の夢でも呼び起すやうに、または一度癒つた傷のうづきを微かに感ぜさせるやうに、または自分とは無関係でそして何處かに深い関係があるやうにくつきりと明かに午後の日影の中に現はれて見えてゐた。かれはちつとそれに見入つた。時にはまたわざとそれを見ないやうにして通つた。林に添つたところには、栗が澤山に落ちてゐて、それを拾つて歸つて來たりした。ある夜は風が凄じく吹きあれて、山の木の葉は雨のやうに散つた。

それからは寒くなるばかりであつた。やがて雪が来る。あたりは一面に深くそれに埋められる。大湯の湯氣が白く颯る。町に住む人々には、これから炬燵と酒と女との世界が来るのであつた。あの放埒と無節制と淫蕩とが来るのであつた。そして人々はその山裾の狭い温泉の町に満足して住むのであつた。女と酒との生活はまたやがてかれに迫つて來てゐた。

九

兵營生活に入る前に、かれは一度妻帯した。

かれのやうに荒んだ破壊された生活にも、進んで妻になつて來るやうなものがあるのであつた。しかしそれまでの二三年のかれの生活、それは此處に繰返す必要はない。それは再び始まつた皮肉と反抗とに満ちた生活、自分から自分の生命を浪費するやうな生活、借金と欺騙と虚偽とに満たされたやうな生活、段々と老いて氣が弱くなつた母親の愚痴を背景にしたやうな生活、汚辱と不名譽とに塗られたやうな生活、さう書いて置けば、それで澤山であつた。

兄は其時分、入學試験に及第して、東京の大きな學校の方へ行つてゐた。兄の前には美しい華やかな光明の世界への路が開けてゐた。兄は醫者になるつもりでその方の學問を修めてゐた。妹は一年前に縁があつて、近所の町の大きな商人の許に貰はれて行つた。順序としては、名目上は兎に角、實際上はかれがその家の跡をつがなければならぬやうな位置に身を置いてゐた。しかし父も母も決してさういふ態度をかれに示さなかつた。『まア、仕方がねえ、あれでも子は子だから、いくらかわけてやらすばなんぬい。まア、それより何より、一番先に鼻どん持たせなければなんぬい。何しうても、女がなぐらやじつとしてゐられねえやうな奴だから。』など、父母の言ふのをかれはよく耳にした。

『それにや、まア、兄の方からきめてかゝらなければいけねえんだが、……何うもあれは又あれで、學問ばかりで、女なんかには眼も呉れねいんで困る。この冬も、その話をしたが、今、祝儀をしねえでも、お前の好きな時まで待つから、約束だけでもして置けつて言つたんだが、それもイヤだつて言ふでな。何うも困るが、仕方がねえ。順序ではねえが、要の奴から先に鼻どんをさがすかな。これで、來年徴兵にでも取られて餘所へ出るやうになつて、それでも了簡が定まらねえやうぢや、それこそ心配だからな。鼻どんでも持たせて、行々は分家でもさせるやうにしてやつたら、いくら何でもちつとは了簡も出べいからな。』こんなことを父母は言つて、そして彼方此方とかれの妻になるべき女を捜し始めた。その相手はいくらもあつた。息子は評判がわるくても、町では昔からの家柄ではあるし、放蕩だと言つても、それは若い中には誰もあることだ。さういふことは婚には勘定に入れたつて際限がない。かういふ普遍的な、妥協的な低級道德の世間では、障礙になるにはなつても、さう大して重きを置いては居られなかつた。中には、『却つて、さういふ世間のことをよく知つてゐるものゝ方が結局好いもんだ。人情といふことがよくわかるから。』などと言つた。

かれがその相談を父母からかけられた時には、かれは何うでも好いといふやうな氣がしてゐた。さうかと言つて、全然興味を惹かないといふ譯でもなかつた。大勢の女の中の一人にその女があり、その女に特別に妻といふ名の附くといふことが不思議でもありめづらしくもあるといふやうな氣でかれはゐた。

かれは其時三人の女の寫眞を母親から示された。

其の三人の一人が、束髪に結つた丸顔の脊の高い女が、それでもM市へ行つて一年女學校へ通つたといふ女が、見合をした時にはイヤにきまりがわるさうに低頭してゐた女が、悲しい辛いことを言はれるとすぐ泣いたり喚いたりするやうな女が、床に入つても完全に男に觸れることも出来ないやうな女が、髪結び方や衣服の着方も満足に知らないやうな女が、慌たゞしく不用意に彼の妻といふ名目の下に置かれたといふことは、かれに取つては、體にも心にも別に深い感動をも興味をも起さなかつた。一夜寢たあくる朝は、かれは床の中で、かれの關係した大勢の女とその女とを比べて退屈さうに欠びなどをしてゐた。

その女はお雪と言つた。それが不思議にも、突然にも、かれに會てかれの關係した小婢を思ひ起させた。柔しかつたその心、專念に男の方に縋りついたおどおどした心、可憐な眼に涙を一杯溜めて泣いて寄つて來るやうな心、それが思ひもかけずかれの心に蘇つて來た。『お雪、お雪。』かう言つて母親の呼ぶ聲を聞くと、男の薄情に、男の冷淡な態度に眼を泣腫らして、しほく／＼とその母に伴れられて行つたあはれな姿が思ひ出された。

何うかすると、その母親に呼ばれてゐるのは、あのお雪で、裏の小屋で今日も傭曳をする約束があつた筈だといふ風にかれには空想された。田舎では、時は更にあたりの状態を變へなかつた。そこに柿の木

がある。そこに青々とした畑がある。そこに昔と少しも變らない物置小屋がある。矢張その時のやうに米や麥や豆が入れられてある。雀なども同じやうにその喧しい囀りを續けてゐる……。

しかし妻のお雪は、そのやさしい心の持主ではなかつた。また男に縋つて來るやうな女でもなかつた。顔だけは、それでも満足で、衣服でも着替へさせて、おつくりでもさせて、しやんとして伴れて歩けば、田舎の息子の妻としては、先づ十人並以上に見られるけれども、硬ばつたその心と、形式づけられたその態度はかれにまだ鍛鍊の施してない線の單純な拙い彫刻を思ひ起させた。人の心の曲折とか、苦悶を通過して來た心の變遷とか、さういふものには少しも觸れる處のない女をかれは發見した。

女の里の父親や母親もかれに好い印象を與へなかつた。『道樂もまア好い加減に切り上げて、ちつとはこれから精を出すだ。』こんなことを言はれると、假令自分の最愛の娘だとは言へ、あゝいふ娘の力で、價値で、この辛いさびしい悲しい自分の心が慰められ暖められ満足させられると思ふ愚な妻の親達を冷笑せずには居られなかつた。その父親の頭に出來てゐる瘤も醜ければ、母親の田舎臭い言葉も不愉快であつた。金と先祖の田地とを後生大事に守つて、眞黒になつて働いてゐるといふやうな生活もかれには物足りなかつた。

であるから、籤が當つて、いよく入營するといふ段になつても、かれは、妻に就いては何等の顧慮をも責任をも持つてゐなかつた。否、それ以前にも、妻を餘所にして、依然として茶屋酒を飲みにかれが掛けて行くので、母親などは、あれのこれのと言つて心配したが、かれは別にそれを罪だともわるいことをしたとも思はなかつた。夜寝る時も、運わるく田舎の女郎屋で床振りにでも出遇つた時のやうに、残酷に妻を取扱つたことも稀ではなかつた。

しかし、兵營に入つて行くことも、かれには喜ばしいことではなかつた。體格は大きいし、病氣は二三年前に罹つた花柳病位で、間がわるければ徴兵に取られるといふことはかねて覺悟してゐたことであつたが——時にはまたかうした不愉快な故郷に辱められて壓迫されて暮してゐるよりは、いつそ兵營にでも入つて、變つた世界の空氣でも吸つて來た方が好いとも思はないこともなかつたが、それでも愈々籤が中つて、入營と決定した時には、愈々その運命の大鐵槌が自分の頭の上に落ちて來たやうな氣がした。町から出て三年の兵營生活をして來た者の話は、今更のやうに、かれの身を壓迫した。鬼のやうな上等兵、寒い冬の朝の雑巾掛、暑い夏の行軍、嚴重な検査、意地のわるい軍曹、新兵の間の辛さは、それはそれは口にも話にも出來ないといふ。除隊された今だから、かうやつて、のんきに昔話でもするやうにして話すけれどなど、言つて、その經驗のある人達は、軍隊に於ける勤めと規律の如何に困難であるかをも話した。それから又かれはひどいところからでも出て來たやうにして、または籠の中から放たれた鳥のやうにして、除隊兵の喜んで國に歸つて行くのを度々見たことがあつた。軍隊は彼のやうな矛盾した扨格した性格に取つては、必らず辛くあらねばならぬやうに思はれた。

かれとかれの妻とに就いては、其後種々な相談がかれら兩家族の間に持上つたらしかつた。初めは除隊になつて歸つて来るまで家に置いて、嫁としてとめて行くといふ話であつたが、入營が近づいて來た頃には、矢張、それまでは里に歸して置く方が好からうといふことになつた。妻の籍もまだ公には此方に入つてゐなかつた。

いよく入營する五六日前から、それでも送別の宴があちこちで開かれた。兎にも角にも、かれに取つては、今までの生活の一破壊であると共に一革新一大變化であらねばならなかつた。執念深く纏り着きからみ着いたこの山裾の町の空氣、温泉宿の匂ひ、明るい賑やかな灯のかがやき、乗合馬車の喇叭の音、夕日にかやく色硝子の窓、軒を並べてゐる小料理屋の酌婦の白い顔、さういふものは、かれに取つて大抵は苦悶と懊惱と焦燥を與へたものではあるけれども、それでも猶ほ此處を離れて、廣い別の社會に入つて行くといふことは、かれには名残惜しく感じられた。それに、新聞の記事だから、まだよくわからなけれども、殊によると、近くに外國との戦争があるかも知れないといふことが、新たに入營して行く人々と、その人々の家庭とを不安にした。

二三日前から、町の入營者の家の前には、例の『祝入營』とか『送何兵某君』とかいふ旗が澤山に立てられて、黄い白い吹流しが晴れた冬の碧い空に捺すやうに靡いて見られた。中でも要太郎の家の前には、それが澤山に澤山に立てられて、袴を着けたり、赤い顔をしたりした人々が大勢出たり入つたりした。

「たうとう郵便局の息子さんも、行くけな。兵隊さんになつて……」町の藝者達もこんな噂をした。

しかししんからかれの入營を悲しんで、表向では出来ないが、人知れずこつそりなりと見送りたいといふやうな女は一人もなかつた。それはかれは梓以來、女に對して愛撫したり同情したりやさしい心づかひをしたりするやうなことはもうなかつたから。

で其日は區長や、病院長や、小學校の校長や、その他の有志にぞろぞろ乗合馬車の立場まで送られて、萬歳を三唱されて、M市へと行つた。妻はそれでも舅と自分の父親と其他の親類の人達と一緒にM市まで送つて行つて、其夜は大きな旅館に一夜寢て、あくる朝早く區長に送られてかれは兵營の門を入つた。

十

氣が附くと、かれはM市の南の方面のあやしい女などの家毎にゐる狭い汚い通りを歩いてゐた。もう夜はかなりに更けたらしく、往來ももう人影が稀に、灯の影のみ徒らに瞬いて、客のない酒屋の店では女が欠びをしてゐるのが見えた。

かれは川の畔を去つてから、市中を何う歩いたか、自分にもよくわからなかつた。頭は種々なことで一杯になつて、終には何が何だかわからなくなつた。故郷のことやら、一年行つてゐた戰場のことやら、幼い記憶やら、兵營の中の友達やら、凄じい砲彈の炸烈やら、妻のことやら、さういふものが一緒にな

つて渦を卷いたその中に、鐵槌のやうにはつきりと横たはつてゐるのは、爲替を竊取したあとの手紙が箱の底に残つてゐるといふこと、折角取戻した名譽をこの一事ですつかり蹂躪して了つたといふこと、永久に脱營するとしても何うしてそれを巧に完全に實行して好いかといふことであつた。一度は強く永久の逃遁を肯定し、それより他に途はないと決心して、そして川端の闇の中から身を動かしたのであつたが、それとて確乎とした動搖しないものではなく、一二間歩くと、そんなことはとても出来ないと思ふと同時に、かうして歩いてゐる中にも憲兵なり巡察將校なりに發見されて、意氣地なく捉へられて、兵營に引張つて行かれて、衆人環視の中で、罵られ、嗚なれ、撲られ、果てはすつかり軍人としての名譽を毀損されて營倉に投り込まれてゐる自分の姿を見た。折角戦地で立てた軍功、故郷への唯一の土産にしようとしてゐた功勞、それももう滅茶々になつてゐる自分を見た。さうかと思ふと、二三日かうして歩いてゐる中に、何處からか自分を救つて呉れるものがあつて、思つたより軽い罪で再び兵營に戻つて行くやうな徑路などをまかれは頭に描いた。

少くともかれは此處まで來る間に、賑やかな通りを歩いて來た。人の大勢通る晴れがましい灯の中に自分の姿の際立つて見えるのを氣にして、成たけ暗い處を歩いて來た。それから大きな門のある暗い板塀のところ、身を寄せるやうにして立つて、長い間いくら考へても考へ切れない身の始末をかれは考へて來た。寺の前のやうなところも通つた。M町通らしい賑やかなところをも通つて來た。巡查の交番の灯、

それは兵士としての今迄の自分等には何等の權力がなく、酔拂つた時など、寧ろその前を威張るやうにして、歌など唄つて通つたものが、今ではその巡查の立つてゐる交番の灯さへ恐れられて、成たけそれを避けるやうにしてかれは歩いて來た。ふと、ある酒場らしい店の前に來た時、「なアに、構ふことはない、酒でも一杯飲んでやれ。」かう思つて、かれはいきなりそこに飛込んだ。かれはさつき女の家で財布の中からチャラチャラ金を出してわたした時に、まだあとに五六十錢残つてゐるのを知つてゐた。で、かれが卓の前の椅子に腰をかけると、色の蒼白い白いエプロンをかけた、何方から見ても心を惹くやうなところのない、十八九の給仕女が酒かビールかといふことを訊いた後で、コップに波々と正宗をついで持つて來た。

それをかれは顔を仰向け加減にして一氣に見事に呷つた。コップの底にさした電燈の光は、その酒が見る／＼波を打つてかれの咽喉に旨さうに入つて行くのを照した。蒼白い顔の女は黙つてその傍に立つて見てゐた。

『もう一杯。』

かう言つてかれはコップを出した。さも旨かつたと言ふやうに、かれはあと口を甜め廻しながら……。續いて女が持つて來た酒をも、かれは同じやうにして飲み干した。かれは烈しいアルコール性の刺戟が忽ち全身に熱く漲つて來るのを感じた。

かれは猶暫く考へてゐたが、その間にもその未來の問題が少しく首を出しかけてゐたが、それを押除けるやうに頭を振つて、『姐さん、もう一杯!』かうかれは叫んだ。

錢を拂つて其處を出たが、忽ち利目を現はした酒は、今迄とは違つて、かれの前に廣い節制のないし、かし激昂した自由の世界を現出した。『なアに、構ふもんか。なるやうにしかならんのだ。』かう口に出して言つて、かれはまた頭を振つた。

かれは戦地のことなどを頭に繰返しながら歩いた。頭上で砲彈の炸裂する音を聞きながら、半日も進出が出来ないで、塹壕の中にうづくまつてゐた光景などが歴々と映つて見えた。『なアに、戦争に行つた時の心持を考へると、何でも出来ないことはない。』かう思つて氣負つて凱旋して來た當時のことなどが不思議にもかれの前に現はれた。『何も小さくなつてゐることはない。これでも俺は金鵝勳章に値する功を立てた兵士だ。立派な帝國軍人の一人だ。』

急に、かれの頭の上つて來たのは、そのM市の南の方面にあるある一區劃のことであつた。と、女の顔——久しく逢はなかつた女の顔が、かれの記憶の底からほつかりと浮んで來た。色の白い丸ほちやの豊かな肉の持主である女の顔が……。

『なアに、構ふもんか、金なんか何うにでもなる。そんなことは其時になつてからで好い。もう一生の中に二度と逢はれるか逢はれないか知れない女だ。さうだ、さうしよう。思ひ立つたら勇敢にやらう。』

かう思つて、かれは歩調を早くした。

その一區劃——あやしい女の大勢集を作つてゐるその一區劃は、此處からさして遠くなかつた。表面は酒場か、でなければ小さな看板許りの小料理屋、その奥に二間か三間かの小さな部屋があつて、警察のさう喧しくない此頃では、場合に由つては、満更泊めないこともないといふこともかれは知つてゐた。苦悶、懊惱、不安、さういふものよりより以上に強い魅力を持つたものは、女と酒とより他に何物もなかつた。

やがてその一區劃に入り込んだかれは、今までとは違つて、わざと歩調を緩くして靜かに歩いた。夜が更けたので、あたりはもう靜かで、滅多に人の通つて行くものもなかつた。かれは長い間、あちこちを彷徨ひ歩いたことを考へた。その時雨がほつゝりと一つ顔に當つた。

『ヤ、雨かな……』

かう思つてかれは上を仰いで見た。空は眞暗で、星の影は一つも見えず、蒸暑い鬱陶しい空氣が、壓すやうにあたり到低く垂れてゐた。此頃の夜によく見る靄もいくらかはあるらしく、向うにある小料理屋の灯もほんやりと光を放たずにかゝやいてゐた。

かれは酔つてゐた。いくらか體がよろ／＼する位であつた。で、やがて二三度來たことのあるその店の灯の前に來たが、その入口の傍の低い櫃子窓の一寸ほど明いた所へと顔を寄せて、そして店の中を覗

くやうにした。其處にはかねて知つてゐる色の白い丸ほちやの女はゐなかつたが、矢張其時も出て来てちやほやした十八九の脊の低い眉のくしやくした女が、ふつと色の白い顔を明るい電燈の光の中にあけて、此方を見るやうにした。女はすぐ立つて来た。

『あら、まア貴方！』いきなり入口の半ば明いた障子の蔭に来てその女は言つた。

かれは手で押へるやうにした。

『ゐるわよ。』

『今、ゐるのかえ？』

『今、ちよつと餘所に行つてゐるけども、ぢき来るわよ。あの人、この頃、よそに下宿してゐるんだから……。』

『本當に来るかえ？』

『来るッたら、お上んなさいよ。』かう言つて軍服の袖口を引張つたが、今度は短かい劍鞘を攫んで、店の中に無理に押入れながら、『一體、何うしたのさ、こんな遅く……。兵隊さんなんか、今時分出てゐるものはないぢやないか。』

『外泊を貰つて来たんだい。明日故郷に行くんだい。親が大病なんだい。』

靴をぬぎながら、こんなことを辯解らしく言ふと、女は、

『親が大病なのに、来たの？ 感心だわねえ。留ちやん、喜ぶわ、屹度。』

其處に、奥の二階の階梯の下の帳場にゐた四十先の氣の利いた上さんが出て来て、『貴方本當にお久しいのね。』よく入らつしやいましたね。』よく路を忘れませんでしたね。』とか言つて、二人して、其のまゝ、かれを奥の一間の方へと伴れて行つた。そこに行く前に、かれは上さんのゐる帳場のあるゴタゴタした六疊の電氣の明るい中を通つて行つた。そこには上さんの子らしい女の兒が、心持よさゝうに、半ば軀を蒲團の外に出してすやすや寝てゐた。

奥の一間へ入らうとするところで、かれは二階の明るい灯と、半ば明けられた障子とをちらと見上げた。そこには客がゐるらしかつた。

六疊の真中にある餉臺の前にとつかと坐つたかれは、一番先に、時計を出して見て、

『なんだ、十一時だ。もう……。』

と言つた。かれの頭には、消燈時刻はとうに過ぎ去つて、皆な暗い一間の中に並んで寝てゐる光景が、ありありと浮んで見えた。硝子窓を透して夜の空が白く見えてゐるさまなどもそれと見えた。

かれは黯然として、やがて傍に身を倒して肱を曲けて頭に當てた。さつき取つた軍帽だの劍だのがその傍に散らばつてゐた。

『あら、ま、もう寝ころんぢやつたの、イヤだねえ。酔つてるの、貴方？』

『うん……』

『枕を持って來ませうか。』

『好いよ。』

と言つたが、またすぐ起きかへつて、

『來るのかえ？』

『今、すぐ來るつたら、貴方、さうでせうよ、お待兼ねでせうよ。久し振りですからね。』ちよつと
餉臺にかれと對して坐つて見たが、『でも、お酒を持つて來るのね？ それから、一品、二品……』
點頭いて見せると、

『ぢや、すぐ寄こすからね、待つてゐらつしやい。』

かう言つて女は出て行つた。

と、又かれはすぐぐつたりと横に倒れて、前と同じやうに肱を顔に當てた。思はず溜息が出た。

ふと何も彼も忘れたといふやうに、乃至は軀も心も疲れ切つて了つたといふやうに、急に睡氣がかれ
に催して來た。女が再び酒と料理とを運んで來た時には、かれは重苦しい躰を立て、眠つてゐた。

『また、寢ちやつたのね。酒が來てよ、もし貴方。』

かう女は呼起した。恐ろしい夢から覺めたやうに、かれはまたすつくと起上つた。そして四邊を見廻

した。

『何か言つたかえ？』

『何にも……』

『さうかえ……あ、夢を見た——。』かう言つて、重苦しうな不愉快な顔をして、盃を取つて女の酌
を受けた。

其處に、女の廊下を歩いて來る軽い足音がした。障子が明いた。

『お待兼ねだよ、お留ちやん、お奢りよ。』

『ばア。』

と言つて、その留といふ女はそこに顔を出して、かれの傍に寄添ふやうにして坐つた。色の白い肉附
の好い顔、丸々と肥つた白い腕、二つの乳の盛上るやうに高くなつた胸、かれは急に元氣の全身に漲り
渡つて來るのを感じた。

『あそこに行つてゐたんだらう？』

かれは顔で二階をしやくつて見せた。

『何うせ、さうさ、きまつてゐらね。』かう言つて女は盃を男に渡して、『甚介なんか起すもんぢやない
よ、男は。』

『でも、二番煎じは恐れるからな。』

『煎じ直しは好いもんよ、ねえおつるさん。』留といふ女ももうかなり酔つてゐるのをかれは見た。五六杯さしたりさゝれたりする頃には、かれの眼の前には、黄い塵埃が舞つてゐるやうな氣がして、頭ががんとした。『かうして、酒を飲んで、騒いでゐる中だ……。騒ぐ中だけでも面白く騒がなければつまらない。』こんなことを考へたかれは、又盃を自分の口に當てた。

少し経つた後には、其一間からは陽氣な唄やら、きやツきやツと騒ぐ聲やら、女の男に押される氣勢やらが洩れてきこえた。三味線も何もなしに、手拍子か何かで、続けざまに、乃至は自暴に男は淫らな卑しい唄をうたつた。

『さうだんべいよ。そんなに酔つてゐちや歸れめいよ。泊めてやるべいよ。』こんな大口を聞きながらやがて女の出て行く氣勢がした。浴衣に着替へて寝るやうに支度が出来てから、女は中々やつて來なかつた。かれは立つたりゐたりした。床のなかに入つて寝て見たが、何うも寝られない。頭がガンガンする。そして、隙を覗つては、その不安と絶望と焦燥とが頭を擡げて來る。……かうしてはゐられないやうな氣がする。……それに、計畫を實行するには、あたりをもつとよく見て置かなければならぬやうな氣がする。……悪酒の刺戟で頭が重いと共に胸がむかつきさうになる。二階の一間に確かに行つたらしい女が氣になる。寝たり起きたり、わざ／＼疊の上に来て坐つて見たりしたが、急に廁に行くやう風をし

て、かれは靜かに障子をあけて廊下に出た。

庭に松があつて、石があつて、その向うに塀があるのが夜目にもそれが明かに見えた。彼は種々な計畫を胸に描きながら、烈しく酔つてゐるのにも拘らず、足元正しく靜かに廊下を傳つて廁の方へ行つた。

廁の中では、出ない小便をしほりながら、かなり長い間種々なことを考へながら立つてゐた。しかしそれも際限がないので、そこから出て來て、そこにある手水鉢で手を洗はうとすると、ふとある光景が鋭いかれの眼に歴々と映つた。

折曲つた廊下の向うは、丁度上さんのゐる帳場のあるところに當つてゐた。そこには電燈が明るくついでゐるので、暗い此方からは、その一間のさまがはつきりと手に取るやうに見えた。女の兒の寝てゐる傍に、机があつて、その此方に用簞笥が置いてあるが、上さんが此方向きになつて坐つて、頻りに錢勘定をしてゐた。そこに錢箱があつた。かれは暫く立つてそれを見てゐた。上さんが立つて用簞笥を明けるのをも見てゐた。ある的確とした計畫がその時かれの胸に浮んだ。

戻つて行く時は、わざと音高く、足元危く見せかけて、その上さんの居間の傍を通つて行つた。

『お下ですか。』

など、上さんは聲をかけた。

今度はいくらかその計畫のために、心が落着いて、かれは床の上に身を横たへた。暫くすると、女の輕

い足音がして、その白い肌の大きな乳の持主である女が此方にやつて来る氣勢がした。

十一

五燭につけかへた電燈には、薄く蔽ひがかけてあるので、室の中は、さうはつきりとは見えなかつたが、それでも上さんの向うむきになつてゐる髪と、女の兒の此方に向いてすやすや寝てゐる白い顔とがほんやりと見えた。

錢箱も、用筆筒も、机も、長火鉢も、さつき見た時と同じであつた。上さんのぬいだ着物の赤い裏地が、淡い夜着の上にかけてあるのが見えた。

外の廊下のところに立つてゐるかれの影は、薄く障子に映つてゐた。

靜かに、靜かに、机のあるところの隅の障子が明いた。僅か一寸ほど。暫くしてそれが二寸ほどになつたと思ふと、その下の下から、殆ど疊に近い位のところから、太い手が靜かに動いて来て、それが錢箱の縁にかゝつたかと思ふと、その錢箱はすうとそつちへと音もせず引寄せられて行つた。上さんは大きな金是用筆筒に藏つたが、あく朝早く歸ると言ふので、二階の客の勘定した四圓なにかしの紙幣は、小錢と一緒に、鍵もかけずにその中に投げ込んで置いた。

大きな手には、やがて、その四枚の紙幣が一枚一枚づゝ握られた。で、一度、その手は引込んで了つ

たが、もう一度出て来て、今度は錢箱の中をかき廻すやうにした。錢の音がした。

その手はすぐ引込んで了つた。

それでもう思ひあきらめたらしかつた。今度は障子が靜かにまた少しづゝ閉められて行つた。そしてそれがまた元のやうに閉つた。

今まで微かに障子に映つてゐた薄い影は、いつかそこから除かれて行つた。人の靜かに歩くやうな氣勢と、をりくゝミシゝゝいふ音、それもいつか元の夜の寂寥に返つて了つた。

ふと夢に魘されたやうに、上さんは微かなうめき聲を立て、寢反りを打つた。今度は白い顔が見えるやうになつた。

此方では、女が眼を覺した。或は無意識に男が靜かに障子を明けて入つて来るのが耳に入つてそれで眼を覺したのかも知れなかつた。女は男が壁にかけてある上衣のところ立つて、後姿を見せて、何かごそくやつてゐるのが眼に入つた。

女は起上つた。

『歸るの、もう？』

『いや。』

『だって……』

『今、小便に起きたんだよ。時計が落ちてゐたから……。』

『さう。』女は眠さうにして、『何時、一體？』

かれは時計を見て、

『まだ、三時だよ。』

『それぢやまだ早いわ。』

『でも、今朝は早く歸らなければならぬんだから。親が大病だつて言ふんだから。』

『でも、まだ早いわ。』

で、再びかれは床に入つた。静かな話聲が長くく續いた。

十二

あくる朝の七時頃には、軍服を着たかれの姿が、M市からT町の方へ行く大きな街道の松並木のところに動いて行つてゐた。昨夜降つた雨は、からりとあがつて、路傍の草や、木や、小砂利や、さういふものは洗つたやうに綺麗になつて見えてゐたけれども、空にはさうした面影はもう少しも残つてゐなかつた。碧い濃やかな前の山からは、白い湧くやうな雲がもくもくと渦巻きあがつた。

朝日は既に昇つて、その燦爛とした光線は廣い野から遠い山へとさし渡つてゐた。露は皆な美しくか

がやいて躍つた。山裾のところくくに散在してゐる村落からは、朝炊の煙が半ば白く半ば灰色に眞直に立昇つてゐた。

かれは昨夜からのことを細かに頭に浮べながら歩いた。かれはまだ暗い中に、二圓なにかしの勘定をして、逸早くそこから遁れるやうにして出て来たことを思つた。そしてそこから裏道をすつと大通りに出て此方へとやつて来たことを思つた。しかしかれの持つた重荷は、依然として元のまゝであつた。一毫も減じなかつた。兎に角、さういふ危機を遁れたといふ喜悅はあつても、それはほんの一些事で、かれは其の身の處置に就いては猶ほ深く思ひ悩まなければならなかつた。大通り近くに來た時には、もう夜が明け離れてゐたが、かれは何んなにその軍服姿を町の人々に見られるのを恐れたであらう。少し知識のあるものは朝早く兵士の歩いてゐるのを見て怪しまぬものはあるまい。もし、憲兵にでも逢つたら、何と言はう。何とごまかして遁れよう。昨日脱營兵のあつたことは、最早市の憲兵隊には知れてゐよう。或は既にその搜索の網を張つてゐるかも知れない。路の角で、ひよつくり憲兵に邂逅したが最後、もう萬事了すである。その曉には何も彼も知れる。爲替の一件ばかりではない、昨夜やつたことも知れる。かれはもう川の畔で思つたやうな煮え切らない決心ではゐられないことを痛切に思つた。かれの運命は一夜の中に益々その轍の中に深く入つて行つてゐるのをかれは思つた。もう、何うしても逃避するより他に仕方がない。今までの自分の生活も知らず、存在も知らなかつたところに行くより他仕方がない。

『あの酒がわるかつた。あの酒場の酒がわるかつた。あの時、あの酒を飲まずに、行きにくくとも親類の家に行くか、さうでなければ、中隊長の宅にでも行つて、自分の過失をあやまればよかつた。あの酒がわるかつた。』かう後悔して見てももう追附かなかつた。

それに、一方には、『もうかうなつた上は仕方がない。なるやうにしかならない。ぐづぐづしてゐて、恥の上塗をするやうになつては、それこそ猶ほ愚だ。』かういふ腹があつた。或はかれは、財布に金の餘裕があつたなら、否金があつてもM市では出来ないが、もし出来たなら、逸早くこの軍帽と軍服と銃剣とを捨て、普通の和服に着替へたいと思つた。かれは蒼白い昂奮した顔をして、巡査の交番の前を通るのをすら恐れて、廻り道をして、辛うじて此方の街道の方へ出て來たのであつた。

この街道はM市からずつと長く東京の方にもつゞいてゐるし、又反對に日本の北の涯までも行つてゐるやうな古い大きな重要な交通路であるが、それに沿つて汽車のレールもつゞき、電信の柱も並んでゐた。それはかれの故郷の方へ行く街道とは全く方角を異にしてゐた。

しかし、かれが何うしてこの街道を選んだか。此方の方に向つて歩いて來たか。知己も縁故も何もない此方面に向つて何故その最初の歩を進めて來たか。それにもかれが廣い自由な世間に向つてその身をかくさうとする意識が動いてゐたことは確かであるが、それ以外に、かれは豫て漫然聞いてゐた大きな稻荷社のある、賑かな馬市の立つそのT町に行つて見て、猶ほそこで、もう一度深く自分の運命について

考へて見ようと言ふやうな念が、かれの心の底の底に潜んでゐた。

『しかし、何を置いても先づ第一に、危険の多いこのM市から脱しなければならぬ。』かう思つて、かれは一生懸命に場末の家並の不揃な町を歩いて來た。

で、町から來る最初の松並木の入口に來ると、かれは立留つて溜息を吐いた。

かれは軍帽を取つて、ポケットから引出した手巾で、流れ落ちる汗を拭いて、それから胸の釦を外した。

と、兵營の生活がまた新たにかれにいろ／＼と思出されて來た。もう七時半だ。起床喇叭はとうに鳴つた。もうそろ／＼人員點呼が始まつてゐる頃だ。あの班長は相變らず鬚を捻りながら號令を立てゝるのだらう。殊によるとあの將校は難かしい顔をして、營庭で兵士達に號令をかけてゐるであらう。Nは、あいつは平生から仲がわるかつたから、別に何とも思つてゐないだらうけれど、戦友のKは流石にこの俺の身を心配してゐて呉れるだらう。何うしたらうと思つて呉れるだらう。Kには、昨日、町を彷徨いてゐる時に、あのB通りでちよつと出會つた。Kはいくらか酒に酔つてゐて冗談口などを利いた。そこで逢つたこの俺が——その時までにはこんなことがあらうとは思つてゐなかつた俺が、不意に脱營兵の汚名を帯びやうとは、Kも不思議にも思つてゐるだらうし、驚いてもゐるだらう。あの男とは戦争に一緒に行つて、恐しい塹壕の中の生活の味も俱に嘗めれば、危険な斥候にも俱に出かけて行つたことが

あつた。敵の騎兵に追かけられて、林の中から池の中に半日かくれてゐた時、あいつは向うの土手の下に小さくなつてゐたつけ……。かう思ふと、考へは戦場の光景の方へとゆくりなく引寄せられて行つた。辛いには辛かつたけれど、面白いにも面白かつた。あの空中にぱつと散る敵の砲弾。……白い乃至は灰色の炸煙。……山陰に巧にかくれてある敵の砲兵陣地、ピカリと光ると思ふと、凄じい雷のやうな轟の反響……。

何だか自分の今歩いてゐるところは、戦地で、あの向うの林のこんもりとした中に敵が隠れてゐるやうな気がする。自分はある任務を持つて此處に来てゐるやうな気がする。——急にわれに返る。不安の重荷が依然としてかれの胸を塞いで来る。

『しかし、兎に角、此處まで来れば、もう大丈夫だ。憲兵に捉へられる虞はない。』
かう思つてまたかれは歩き始めた。

その松並木を出ようとする時、ふと遠くから音が近づいて来て、やがて長い汽車が、かれの歩いてゐるすぐ左の畠の中を通つて行つた。それは昨夜十一時に東京を出た急行車で、客車の窓には朝日がさし通つて、客がごたごたしてゐるのが半ば黒く見えてゐた。『あそこにいる人達は皆なのんきに旅行をつづけてゐるのだ。自分のやうな重荷を持つてゐるものは一人もないのだ。』ふとかう思ふと、かれは堪らなくさびしく悲しくなつて来るのを覺えた。

汽車の通過し去つた空しい長いレールをかれはほんやりした態度で、立留つて、ぢつと眺めた。
暫くしてかれはまたほつほつと歩き出した。

十三

人家が見え出して来た。茅葺の草の生えた屋根が、不揃な高低のある見すほらしい屋根が、古い大きな昔は本陣でもあつたかと思はれるやうな旅館が、一年に幾度鳴るであらうと思はれるやうな半鐘臺が、ほんやりと喪心したものゝやうにぶらりぶらり歩いてゐる男が……。

半ば崩れかけた荒壁の傍に、田舎によく見る外便所があつて、其處に栗の大きな樹に、白い花が一面に咲いてゐるのが見えた。土臺の曲つた、間の溝の仰向いた小さな家に、大和障子がのめるやうにはまつてゐて、半ば開いた處から、束ね髪の不潔な身装をした女が、欠びをしながら出て来るのが見えた。家と家との間に、狭い野菜畑があつて、馬鈴薯が白く紫に花を咲かせてゐた。家の中で母親らしい聲で何か罵つてゐるのが聞えて、やがて男の兒が急いで家から走り出して来るのが見えた。

かれは急いで来たために、既に餘程前から空腹を感じてゐた。人家のある處に行つたら、兎に角食物を捜さうと思ひながらかれは歩いて来た。まだ朝飯を食ふ位の金は残つてゐた。

ふと、うどん蕎麥と障子に書いてある家が眼に着いた。

かれは入つて行つた。

『うどんか、そばかねえかね?』

其處にゐた肥つた上さんは、靴の音にちよつと驚いたやうに振向いたが、

『まだ、ねえな、朝が早いで。』

『出来ねいかな。』

『出かして出来るが、まだ、起きたべいだな。』

『冷めたくつても、何でも好いんだが、昨日の残つたのもねえか?』

『何にも、はア、ねえだよ。』

仕方がないので、かれは出て來た。成ほどまだ朝が早い。何處の飲食店でも、朝飯を早く食はせて呉れるやうな家はありさうにも思はれなかつた。かれは二三軒、同じやうにして訊いて見たが、何處でも同じやうな答を得るばかりであつた。

かれはある店で訊いた。

『何處かないかね、食はせる家が? ……昨夜、隊に後れて、夜通し歩いて、すつかり腹が空つちやつたんだが。』

『さうさな。』

其處でかれに應對したのは、四十五六の汚い親爺であつた。『さうさな。』かうもう一度言つて考へたが、かれと一緒に外へ出て、『もう少し行くと、右側にな、古奈屋ッていふ家があるア。あそこへ行つたら出来るかもしんねえ。』

『難有う。』

か はまた歩いた。

一軒一軒、かれは右側を見い見行つた。しかし容易にその古奈屋といふ家もなければ、飲食店らしい家も見當らなかつた。唯同じやうな不揃な高低のある家並が續いた。C村信用組合など、いふ札のかかつてゐる家などもあつた。

ふとガランとした廣場がその目の前の單調を破つた。見ると、それは村の小學校であつた。奥に二階建の大きな校舎が見えて、朝日が晴れやかにそこを照した。廣場には機械體操の鞆だの、遊園木だの、木馬だのが見えた。生徒は既に大勢集つてゐた。風呂敷包を袴の上に負つてゐる女の生徒なども見えた。校舎の具合がちよつと似てゐるので、かれはまた兵營を思ひ出した。もう奴等、朝飯を食つて了つたらうな。と思ふと、ぞろぞろ炊事場へと當番の出て行くのが見えるやうな氣がした。炊事の下士が何か呶鳴つてゐるのが見える。つゞいて、戦地での炊事の光景が歴々と浮んで見えた。大きな釜……白い湯氣……磨いだ米を入れた方の釜をザブリと湯釜の中に入れる、……そこらに歩いてゐるカーキー色の軍

服、上衣を脱いでせつせと俎板で大きな鮭を切つてゐる兵士……。

人家が略々盡きて向うに野と畠と廣い街道とが見え出したと思つた時、かれはふと右側に飲食店らしい家が一軒あるのを發見した。果して古奈屋と言ふ字が入口の障子に書いてあつた。

いきなり入つて行つたかれは、

『朝飯を食はせて呉れないかな。』

其處にゐた主婦らしい中年の女の眼も、襷がけをしてゐた若いほつてりした一目でそれとわかる酌婦の眼も、前の厨のところに眠さうにして立つてゐたこれも矢張若い女の眼も、皆な一齊に此方を見た。

『へい……』

と主婦は言つて、女達とちよつと眼を合せたが、『まア、おかけなさいまし。』

これで安心したと言ふやうに、かれは其處に行つて腰をどつかと下した。かれはかなり疲れてゐた。さう大して歩いて來たと言ふわけではないが、不安が、昨夜からの不健康の行爲が、氣がねと心配と尖つた神経が、久しく忍んで來た飢がかれを全くぐつたりさせた。かれはポケットから朝日の袋を出して、四本残つてゐる中から一本出した。襷がけをしてゐるほつてりした女は、そこにある火鉢をかれの方に押してやつた。

『お上んなさい、奥も空いてゐますから。』

かう主婦は言つた。

それには返事はせずに、腰かけたまゝ、かれは火をつけた煙草をスパスバと旨さうに吸つた。淺黒い底には若い氣分のある昂奮した顔が軍帽の下からそれと覗かれた。厨の方にゐる女はまた此方の方を見た。

『まア、お上んなさい。』

主婦は又勧めた。

かれは煙草を吸ひながら、辯護するやうに、『昨夜、演習で後れちやつてね、夜ひる歩いて、すつかり腹が減つちやつた。』

『それは何うも……』

『何處に行つちやつたか。これから隊を捜さなくつちやならない。』

『それは大變ですね。』

『此村は、隊は昨夜通らなかつたかな。』

主婦は女達の方を向いて、『兵隊さん？……通らないやうだつたね、お前。』

『え、通らないやうでしたよ。』

厨の方の女が答へた。

『ぢや、この村は通過しなかつたんだな。何處に行つちやつたか。』かう言つて、わざとかれは考へるやうな風をして、『ぢや、向うへ行つたと見えるな。』

暫くして、『まアお上んなさい。』かう主婦は勧めた。

『面倒だから、此處で好いや。』

『まア、それでも……』

『ぢや上るかな。』

かう言つて、靴をぬいで、かれは上へと上りかけた。ほつてりした方の女がかれの先に立つた。

かれには入つて来た時から、この飲食店の何ういふ種類の飲食店であるかといふことがすぐ飲み込めた。厨の方にずらりと並んでゐる徳利、膳、椀、小皿、その下にまだ片附けずにある膳と椀と徳利とは、昨夜更けてからのある男の騒ぎと歡樂と耽溺との名残を語つてゐた。かれは自分の昨夜やつたことなどを繰返した。

かれの導かれたのは、すぐとつときの六疊の間であつた。中央に焼こけだらけの餉臺が置いてあつて、疊も酒や汁や焼穴で汚なくよごれてゐた。

安物の火入の縁のかけてゐる烟草盆に一杯になるやうな大きなオキを入れて、廳で女は持つて來た。

女は莞爾と笑ひながら、

『隊におくれちや困つたらうね。』

『うん……困つた。』

『これからまた探すのかえ。』

『もう少し捜して、わからなければ仕方なえから、歸るんだが——』

かう言つたが、『早く持つて來てお呉れね。何にもなくつても好いから……』

『かしこまりました。お酒は？』

『酒なんかいらない。』

『さう？』

女はまだ其處を去らずに、餉臺に寄りかゝるやうにして、色の白い肉附の好い笑顔を此方に見せてゐた。

昨夜の女のことがかれの頭に絡み附くやうに見えた。その女の肉附の好い肌がそこにゐる女と一緒になつてかれを刺戟した。

『忙しいだらう？』

『さう忙しくもねえがね——』笑つてまだ去らずにゐる。

『面白いことがあるかね。』

『何にもねえよ。』

『そんなことはねえだらう。澤山あるだらう。』

かう軽い心持で言つたが、さういふ心持ではゐられない自分であることを思つて、かれは顔を曇らせた。

女はぐづぐづしてゐるが、何か田舎唄らしいものを軽く口の中で唄ひながら、立つて向うへ行つた。一人になつたかれは、それとなく四邊を見廻した。長押には何と讀むのだからわからない大きな字を書いた額がかゝつてゐて、その下に押入れがあり、右に汚いぐしやぐしやした庭が小さく見えてゐた。かれは立つて押入を明けて見た。箱見たいなものと、汚い蒲團と、油だらけになつた船底枕とが入つてゐた。

ふと、酒を一本飲むかなとかれは思つた。昨夜の悪酒がいくらかまだ残つてゐて、頭がぎんぐ痛む。いやに壓しつけるやうな気分である。迎酒をすれば屹度好いにきまつてゐる。かれは腹の中で、財布に残つてゐる金を考へた。まだ一圓と少し残つてゐる筈である。『一本、飲んでやれ、構ふもんか。』かうかれは思つた。しかしすぐ手を鳴らす氣にもなれなかつた。

女が玉子焼か何かで膳を運んで來たのは、稍暫く立つてからであつた。それでもかれはまだ酒を飲むか、飲むまいかと思つて考へてゐた。

急に、

『一本、おくれな。』

『お酒?』

『その代り一本きりだ。酔つちやつても困るから……。』

女は笑ひながら出て行つた。かうした女には、客は何ういふ客であるか、これまで自分達と同じやうな女を相手にした客であるか、それともさうでないか。さういふことはすぐわかるらしかつた。やがて女は徳利を持つて來た。

そして其處に坐つて酌をした。

あつゝ酒は疲れた體にじつと染み込むやうに感じられた。頗る旨かつた。一杯二杯とかれは盃を重ねた。

昨夜の女の肌がまたはつきりと浮んで來た。かれには何うしてさう女がついて廻つてゐるのかわからないが、また何うしてさう女が深く自分の頭の中に食ひ込んでゐるのかわからないが、兎に角その繊維と自分の繊維の間に密接なある接觸關係を深く強く持つてゐることを考へずには居られなかつた。かれは悲しいやうな氣がした。とは言へ、ほつてりした肉附の好い女が、かれと一緒に其處にゐて、酌をして呉れるといふことは、かれをその重荷からいくらか落附かせたことは事實であつた。



かれは冗談口を利くやうな軽い氣分でないのに拘らず、それでも矢張女を相手にして軽い口を利いた。かれは女の生れ故郷などを訊いた。

『さうかえ、A町かえ。』

『知つてゐるの？』

『B町に、親類があるから、よく行つたことがあるよ。』

『さうかね、まア！』

など、言つて女はなつかしがつた。その近所の話だの、そこのお祭の話などをかれはした。しかしかれは疲れてゐた。飢ゑてゐた。一本酒を飲んで了ふと、かれはすぐ飯を食つた。

膳を片附けて、女の再び其處に入つて來た時には、かれは坐つた位置のまゝに後に倒れて、兩手を後頭部にあてながら、昏睡したといふやうにして眠つてゐた。體の飽滿とアルコールの刺戟とは、苦もなく疲れたかれを眠らせた。

女が枕を出して頭に宛てがつたのもかれは知らずにゐた。

何時間眠つたかかれは知らなかつたが、ふと氣が附くと、さつきのほつてりした女が傍に來て、頻りにかれを呼覺ましてゐた。

かれは驚いたやうな顔をして、すぐ起上つたが、

『あゝ寝ちやつた、寝ちやつた！』

『餘りよく寝てゐるからお氣の毒だつたけれど、餘り時間が経つて、遅くなるとわりいッてお上さんが言ふから……』

『あゝ大變寝ちやつた……一體何時だ……』時計を出して見て、『もう十一時だ。午だ。随分寝た。』

『餘程くたびれたと見えるのね。』

『行かう、行かう、大變邪魔しちやつた……』かう言つてかれは立上つた。勘定の外にかれは二十錢女にやつた。

十四

かれはまた歩き出した。

寢たお蔭で頭はからりと晴れてゐたが、昨夜からの疲勞も餘程恢復したやうに思はれたが、その代りにセンチメンタルな物悲しいやうな氣分がかれの心を占めてゐた。

天氣はよく晴れてゐた。日はうらゝかに照つた。若葉の濃い緑は、野にも山にも一面に漲り渡つて、麥の穂は伸び、中でももう黄く色づきかけたものなども見えた。隠元豆の畑、白い紫の花の咲いた馬鈴薯の畑、稻の綺麗に植ゑつけられてある水田、その向うには低い山から高い山へとの連亘が鮮かに指さ、

れた。

何處を見ても皆な明るく、鮮かに、天地は光りと輝きと喜悅とに満ちわたつてゐた。それに比べて、かれの心の内部の状態は、いかに慘たるものであつたらう。いかに暗澹としたものであつたらう。またいかに苦痛に満たされたものであつたらう。かれはこの明るさと鮮かさと喜ばしさに對して、ぢかにそれに面してはゐられないやうな氣がした。天地はこの通り美しく、人間は皆嬉々としてゐるのに、自分ばかり何故かう辛い苦しい重荷を抱いて懊惱しなければならぬのか。かういふハメに陥つて行かなければならないのか。急に種々な記憶やら追想やらが一緒になつて、ごたごたと集つて來て、堪へ難い涙がグツと胸にこみ上げて來た。

丁度此前家出をした時、雪の白い大きな山脈を仰いで涙を流したやうな悲哀が、止め度なく強く漲るやうにかれを襲つて來た。

かれは泣きながら歩いた。

かれは立留つたり歩いたり躊躇んだりした。

大きな街道は長くその前に續いてゐた。向うには美しい松並木がまた見え出して來てゐた。概してその路を歩いて行くものは少い方であつたが、それでもかれは種々な人達に逢つた。草鞋をはいて遠い旅をして來たやうなあはれな旅客、荷車を曳いて疲れたやうにしてやつて來る若者、舊式な屋臺をかついで

よほぐとして歩いて行く汚い風をした老翁、何處か近所の百姓の上さんらしい尻からけをした女、二三人づれで、中には女も雜つて、白粉を斑につけて月琴などを持つて歩いて行くヨカヨカ館屋、村の醫者らしい八字鬚を生やして鞆を持った車の上の中年の紳士……。と思ふと、汽車がまたその響をあたりに震はせて勢ひよく通つて行つた。

兵營のさまがをり／＼かれの頭を掠めて通つたが、しかしもうかれは初めのやうにはつきりと、また長い間それを浮べては居なかつた。何と思つたつて、もうあとへ引かへすことは出來なかつた。先へ――新しい運命へ向つて行くより外に仕方がないといふことをかれは思つた。

T町――其處は汽車では度々通つたが、また話には聞いてゐたが、大きな日本での元祖であるTといふ稻荷があつて、馬市には非常に賑やかであるとは知つてゐたが、兎に角始めて其處に行くかれは、理由なしに、其處にある運命がかれを待つてゐるやうな氣がした。兎に角、其處まで行つて見よう。さうした上で、先へ出るなりあとに戻るなりするとして、それまで一切種々なことを思ひ惱んだり苦んだりするのは止さう。或は其處に行つたなら、思ひもかけない運命が自分を待つてゐて、この不安な不定な状態を容易に解決し得るかも知れなかつた。

M市からT町まで、五里には少し遠かつた。

午後三時頃、かれの姿はT町から一里手前にある、昔の中の宿と言つたやうなK町の通に見えてゐた。それは汚ない衰へた長い町で、養蠶などで僅に息をついてゐるやうな小さな町であつた。従つて何處の家でも、養蠶につかふ籠やざるが干してあつて、軒には白い繭が美しく日にかゝやいて光つてゐた。いくらか午後からは風が出て、街道の埃がところ／＼白く颯つてゐるのが見えた。何處かで大工の鋸や鉋を使つてゐる音がした。

かれは軍帽を脱いで、をり／＼額の汗を拭つた。上衣の釦は半ば外してある。ズボンは遠く歩いて來たといふしるしの埃が白くほかしのやうに附いてゐる。一步一步歩く靴も重さうであつた。

かれはこの町の入口で、旨さうに湯氣の白く颯つてゐるふかし立の饅頭を五つ買つて、それでいくらか空き加減の腹を満した。今、かれはその町の外れ近いところを歩いてゐた。

其處に一軒、桶屋があつた。店には出來上つた桶だの、出來かゝつた桶だの、桶にする板だのが一杯に棚やら仕事場やらに並んでゐて、中小僧がせつせと臺に板を當てながら鉋で削つてゐるのが、午後の斜にさし込んで來る日影に明るく浮き出さうに見えてゐた。家の前では、四十五六になるその亭主が、地面に筵を敷いて坐つて、桶のたがをかけるために、長い細い割竹を精々と扱いて丸めてゐた。

かれは其處に來かゝつたが、そのたがに丸める細い割竹のくるくると廻るのに眼を留めて、さながらめづらしいものに見惚れた子供か何ぞのやうに、じつと立つてそれを見た。

と言つて、傍に寄るでもなく、何か亭主に話しかけるでもなかつた。かれはほんやりとして唯立留つて眺めた。

亭主の引くにつれて、細い割竹はくる／＼と丸まつて、段々たがになつて行つたが、それを亭主は桶の縁にあて、一度あてがつて見て、又外して、緩めたりつめたりして、更にそれを桶の縁にはめ込ませた。そして宛てがつたくさびの上を、桶を廻しながらトントンと軽く叩くと、たがは次第に旨く桶の中ほどのところにはまつて行つた。

トン、トンと叩くにつれて、亭主の手にした桶は面白く廻つて行つた。かれはほんやりと立つて見詰めた。

一つ濟むと、今度は亭主は更に又細い長い割竹を取つて手繰つて丸め始めた。くるくると見るがうちに、竹は丸く輪を描いて、手早く再びたがになつて行つた。長い細い割竹が絶えず動いた。

立留つたかれの横顔の半面からかけて、亭主の手元、桶の一方の側、それから店の仕事場、中小僧の鉋をつかつてゐる方へと午後の日影は明るくさしわたつてゐた。

かれはそこに十分ほどじつとして立留つてゐた。何故そこにさうして立盡してゐたか、亭主のたがを

はめるさまが面白くつてそれに見惚れてゐたのか、それとも他に何か理由があつたのか、それとも又疲れたのか、それはかれ自身にもわからなかつた。かれは喪心したものゝやうに見えた。やがて再びかれは歩き始めた。

亭主は店の中小僧に言つた。

『變な兵隊がゐるもんだな。立つて見てやがつた。』

『本當ですね。私はまた何か用でもあるんかと思つた。』

『餓鬼ぢやありやしめいしな。たがを入れてゐるのを見てゐる奴もねえもんだ。變な兵隊だな。』

『本當ですね、親方。』

『何うかしてやがるんだ。何うだ、あの歩きざまを見ろよ、肩が落ちるやうな恰好をして歩いてら。』

『どれ？』

と言つて、中小僧は仕事をやめて出て來た。それときゝつけて上さんも出て來た。『それだよ、それ、向うによちよち歩いて行く兵隊だよ。ちつと後に來て立つて見てやがる。それがちよつとぢやねえ、このたがを二つはめて了ふ間見てやがつた。何か言ふかと思へや何にも言ひやしねえ。變なのんきな兵隊もあつたもんだな。』

『どれさ……。』

出て來た上さんは訊いた。

『それ、向うにぐづぐづ歩いて行くぢやねえか。』

『あゝ、あれ。』

かう言つた上さんは、午後の日影の中を、通りの右側に添つて、茶褐色の軍服と軍帽とをはつきりとあたりに見せて、靜かに歩いて行つてゐる一人の兵士の姿を見た。

『本當に變でしたね、親方。』

かう言つて三人は笑つた。風がまた白い埃をあたりに立てた。

十六

T町に行き着くまでに、かれは猶ほかなり長い時間を費した。腹は減つたけれども、もう晝飯を食ふ錢もないので、二錢出して、かれはまたふかし薯を買つて食つた。同じやうな松並木と、町と、村落と、野と、畠とは、行つても行つても際限なく續いた。

右に絶えずその前景を爲してゐる山嶺の連亘は、その色と姿とをいつか變へて行つてゐた。今は午後の日影の下に、碧は稍赤味を帯び、その複雑した襞も、午前のやうなはつきりした形を見せなくなつた。雲はいくらか出て、遠い山の頂には湧くやうな白い堆積が渦巻き上つた。

入口に汚ない襦袢の蒲團を干してゐるやうな家もあれば、ほつとり道路に面してさびしく立つてゐる農家などもあつた。ところ／＼川が満ちて流れて、川柳や芦や萱が青々と生えてゐた。あるところでは、さうした小川に橋がかかつて、その向うに農家の邸宅と思はるゝやうな瀟洒な家に女の姿などが見えた。摺れ違つた男にかれば訊いた。

『T町までまだ餘程ありますか。』

『いゝえ、もうすぐ。』

と言ひ捨て、その男は素氣なく向うに行つた。

暫く行つて、かれはまた同じ問をくり返した。

今度は絆纏を着た汚ない爺さんであつたが、立留つて了寧に、『もうすぐだ。五六町あんめい。もう家が見える筈だ。』かう言つて後の方を指して見せた。

少し行くと、果してそのT町——何んな運命が其處にかれを待つてゐるか知れないT町が、午後の日影を帯びてそれと見え出して來た。高い低い藁、白い土藏、混雜した家並、それが廣い晴れた平野の地平線の上に浮き出すやうに……。

汽車のレールがすつと町に入つて行つて、その向うに大きな停車場、信號柱、其處に留つてゐる貨車などが見えた。白ほつたけた小さな丘陵が其處此處に現はれ出して、ひよろ松が一二本その上に生えて

ゐた。左は一面の野で、青々とした水田の果ては濶く遠く、多分海の上に浮んでゐるだらうと思はれる。白い大きな鳥の翼のやうな雲が、日に照されて半ば赤く染つて見わたされた。

やがてかれはT町の入口のところへと來た。

川の水が流れてゐた。そこには橋がかゝつてゐる。見ると、向う岸にこんもりとした緑樹の繁茂があつて、その下に偏つた流れに家鴨が七八羽ギヤアギヤア言ひながら泳いでゐた。山から出てまだいくらかも流れない水は綺麗で、せゝらぎを立て、流れてゐたが、此方は石原に青い草が生えて、子供達が其間を跳足で遊んでゐるのが見えた。緑草の中には何といふ花か知らないが白い花が雜つて咲いてゐた。野藤などもかゝつてゐた。

橋の上で又ほんやりとして立留つたかれは、見るともなく、その水に浮んだ家鴨の群を見た。家鴨は水かきのついた大きな足で、體の重さを持扱つてゐるやうにして鳴きながらよちよち歩いた。ふとかれは故郷のことを思つた。一番先に、母親の顔が眼に浮んだ。この前の日曜日別に用事があつてM市に來た次手だと言つて、ある家の二階で半日母親と一緒にゐた。母も老いて、白髪がもう眼に立ち始めて來てゐた。其時里に歸つてゐる妻の話をしたことをかれは思ひ出した。母親は里の人達の義理知らず情しらずを散々並べ立てた後で、『一體、お雪はまた何ういふ氣でゐるんだか。』と言つた。かれは其時、『なアに、投つて置くさ、あんな奴、もう歸つて來て貰はなくつたつて好いんだよ、母さん。』と言つた。其

時は今度の戦功で、金鵝勳章はとて貰へないが、ちよつとは金が餘計に下るだらうなどと言つて、一年後の除隊の時の話などを母親にした。それもこれも皆な駄目になつたとかれは思つた。續いてかれは山裾の寺の中に埋められてゐる老祖母の皺の多い笑顔を思ひ出した。大きい女郎屋の色硝子の窓に當つた夕日のさまがちよつと浮んでそしてすぐ又消えて行つた。

いつとなくかれは橋の欄干に凭りかゝるやうにしてゐた。もうかれは家鴨の群を見るでもなく、子供達の遊ぶのを見るでもなく、又川の流れを眺めるでもなかつた。かれは唯ほんやりしてゐた。と、その傍を荷車が通つたり、女を乗せた俵が通つたり、人がぞろぞろ通つたりした。若い町の娘が二人づれで手をつなぎながら、何か面白さうに楽しさうに笑つて話しつゝ通つて行つたりした。

暫くしてはつと氣が附いたやうにして、かれはまた靜かに歩き出した。

町が長く續いた。それはこの平野の中では、M市についての重要な町で、人口も一萬近くあつて、月に三回賑やかな市も立つので、何處となくあたりが活氣に富んでゐた。家並なども揃つてゐた。

でも、町の中心まで來るには、かなりの距離があつた。尠くとも七八町、もつとあるやうにすらかれには思はれた。呉服屋、乾物屋、雜貨店、金物屋、桶屋、ある家の前では、小僧が精々と荷をつくつてゐた。ある店では、此處等に見かけないやうな若い東京風の細君が、束髮姿を後に見せて、丸い小椅子に腰をかけて、物を買つてゐた。ある店には禿頭の番頭が退屈さうに坐つて通りを見てゐた。

町に入ると共に、暫くかれを離れてゐた不安が又かれを襲つて來た。此處には、憲兵の心配はないが、それでもかうして一人で軍服で歩いてゐて、もしや人に疑ははれないか。不思議に思はれやしないか。かう思ふと、何だかたまらなく不安に危険に感じられて來た。何より一刻も早くこの軍服を脱ぐ算段をしなければならぬと思つた。さうだ……本當に一刻も早く……。

『しかし、仕方がない。もし咎められたら、外泊で歸郷中だと答へよう。外泊證を見せろと言つたらまた其時のことだ。……或は、隙からこゝまでもう手が廻つてゐるかも知れないけれど、警察と軍隊とは搜索の方針も違ふだらうから、まだ大丈夫だらう。知れたら、知れた時だ。』こんなことを思ひながらかれは歩いた。

段々町の中心に近づきつゝあつた。しかし思ひの外に時が経つた。ある處で見た時計は、もう五時を五六分すぎてるた。五六里の路に一日！自分ながら随分ぐづぐづして歩いて來たものだと思つた。

『しかし、あそこで半日は寝たやうなもんだから、』とも思つた。それに、早く行く必要はない。餘り早く行つて泊ると却つて旅館の人達にも疑はれる。

つゝいて自分の財布にもういくらも金が残つてゐないことが氣になり出した。何處にかれは宿賃を得るであらうか。何處にかれは茶代を得るであらうか。かれはまた昨夜のやうにして金を得る算段をしなければならぬのか。かう思ふと、かれはうんざりした。何處までこの重荷がかれについて廻つて行く

のであらう。何處まで行つたら、かれはこの重荷を脱することが出来るであらう。かれの考へは、循環小數のやうに、又それからそれへと繰返された。『あの時躊躇せず、警門の中に入つて行けば好かつた。何故行かなかつたか。何故……』かう思ふと同時に、いつそこから宿に着いたら、國に手紙を出して、事情を詳しく書いて金を送つて貰はうか。かういふ考がまた浮んだ。しかしさうすれば、何うしても再び兵舎の中に戻つて行かなければならなかつた。自分のやつた罪惡を明るみに出すばかりではなく、微罰令以上の恐ろしい禁錮の處分を今度は受けなければならなかつた。従つて、來年どころか、猶二年も三年もあの兵營の中になければならなかつた。本當に何うして好いか、かれには分らなくなつて了つた。

銀行だの、信用組合だのが段々町の兩側にあらはれ出して來た。大きな土藏造の家などがあつた。T銀行と小さく黒い札に金文字で書いてある煉瓦づくりの家の前には、自轉車が二三臺置いてあつたが、丁度その時二十一のハイカラな店員が、新しい藁帽とセルの洋服とをくつきりとあたりに見せて、そこに置いてある一臺の自轉車に乗つて、すうと巧にそこから出かけて行つた。屹度何處かに現金を持つて行くのに違ひない。あの男の持つた折靴の中には五百や千の金は入つてゐる。……もつと入つてゐるか知れない……。かう思つてかれはその後姿を見送つた。

郵便局の大きな建物の前では、貯金、爲替と札の出でるところに、髪をくし卷にした女と近在の百姓らしい汚ない爺とが立つて待つてゐた。局員の事務を執つてゐるのが金網を透して見えた。

『爲替や貯金の時間は、もうすぎた筈だがな。』

それとなくかれは思つた。

それから少し行つたところで、かれは、T町警察署と書いた札のさがつてゐるのを見た。かれはぎつくりした。かれはかれとこの建物との間に何か斷つことの出来ない因縁があつて、何となく自分の體がそつちに引張られるやうな氣がした。それは大きな白いペンキ塗の建物であつた。二階造りであつた。門の中に形の面白いひよろ松が一二本栽ゑてあつて、その奥に五六段の石段のある嚴めしい入口が覗かれた。ズボンだけ白い服にした巡査が劍を鳴らして其處から出て來た。

かれは急いで、それを避けるやうに、通りの反對の方の側に行つた。しかし幸にも巡査は一人かうして歩いてゐる兵士をあやしもしなかつた。かれの振返つた時には、その巡査は既に遠くの方へ歩いて行つてゐた。

かれは又歩調を緩やかにした。

有名な稻荷の社は、何でも町でも南の外れ近いところにあるといふことをかねてかれは聞いてゐた。そしてその町の旅館の大きいのもその近所にあるといふことであつた。相馬屋といふ旅館の名をかれは度々耳にした。『T町では、相馬屋が一等さ。』誰もかれも皆なかう言つた。

その相馬屋にかれは泊らうと思つた。『兎に角、そこに行つて考へよう。』かうまたかれは思つた。かれは向うから来た人に訊いた。

『相馬屋ツて言ふ旅籠屋はまだでせうか。』

『相馬屋、それは稻荷さまの前だ。もうぢきだが——』

『難有う。』

かうかれは辭儀をした。

それでもまだ稻荷社のあるところまでは一二町あつた。やがて流行神の門前町のやうなカラアがかれの眼に映り出して来た。小さな旅館、つゞいて、小さな料理屋、赤い襷をかけた頼の赤い女中、土産物などを一杯に並べてゐる店、正月の初祭は大したもの、近在近郷から賽客が大勢集つて来て、汽車が臨時列車を出しても乗切れないほどで、その時は旅館は何んな小さな旅館でも、客で一杯になるといふことであつた。それは古い千年も前からある稻荷社で、M市がまだ城にならない時分から、既に儼としてそこに鎮坐してゐたのであつた。

『お入んなさい、お休みなさい。』

かう言ふ聲は賑やかに其處にも此處にもきこえた。

大きな稻荷社は、通りからは、ずつと奥深く入つて行つてゐて、覗くと、大きな華表と門と宮とが暗

く深い杉の森を背景にして見えてゐた。

しかし、縁日でも何でもないので、その日は参詣するものも少く、何の料理店にも旅館にも、客がさう澤山は入つてゐないらしかつた。通りの角には、昔、街道であつた時分の名残の大きな女郎屋の青い古びた暖簾が、さびしさうな夕風に靡いてゐた。通りには駄馬が五頭も六頭もつゞいて通つてゐた。

ふと左の方を見た彼は、そこに三階建ての大きな古い旅館のあるのを見た。それが相馬屋であつた。店の真中に置いてある眞鍮の大きな火鉢や、講社のビラや、左にひろく出来てゐる門などが一番先にかれの眼に映つた。店に接して、別に奥深く庭から入つて行く入口なども見えた。

かれはそこに來て立留つて、高い三階を仰いだ。三階の廊下には、白い日除の幕に夕日が明るくさし渡つてゐた。かれは店の方から入つて行つた。

十七

『入らつしやい！』

かう言つて番頭は迎へた。

それにつゞいて、『入らつしやい、』といふ上さんやら女中やらの異口同音の聲が聞えた。大きな帳場のところには、かなり年を取つた此家の祖母らしい婆さんが莞爾して笑つてゐるのが見えた。

『お泊りさまで、』『へいさやうで御座いますか。』など、かれの様子をじろく見ながら番頭は言ったが、『ぢや、二階の奥の十番。』かう其處に案内に立たうとして出て來た女中に言った。

『静かなところが好いのだがな。』

『へい、ごく静かで、……今ぢや、何處も空いてをりますから……へい、今は丁度養蠶の時期で、田舎から御參詣が御座いせんから、それは静かで、へい。』

かう番頭は矢張揉手をしながら言った。

で、かれはだぶふするズボンのポケットに両手を差込みながら、幅の廣い階段を女中に導かれて昇つて行つた。

横肥りに肥つた餘り容色の好くない女中をかれは見た。

成ほど番頭の言つた通り、何處の室もがらりと明いてゐて、二階の上り口の一間に近在の農家の息子らしい客が一人ゐるばかりであつた。やがてかれはそれをぐるりと廻つて、裏の裁込に面したやうな六疊の一間に通された。

『ちと陰氣だね。』

『でも静かなことはこゝが一番静かですぞな。』

『それはさうだね。』

『よろしいでせうか。』

『好いよ、此處で。』

女中はすぐ下りて行つた。

流石にかれは疲勞を感じた。僅か五里の道ではあるけれど、——平生ならば半日かゝらずに歩いて來るほどの距離ではあるけれども、精神と神経が動搖してゐるので、十里も十五里も遠く歩いて來たやうな氣がした。かれは劍を吊つた帶皮を取ると、そのまゝいつもするやうに両手を後頭部に當て、仰向に倒れた。

かれは溜息を深くついた。

そして天井を見詰めたまゝ、何か物を考へてゐるものゝやうに大きく眼を明いてぢつとしてゐた。

女中はやがて火を持つて來て箱火鉢の中にそれを入れて、残つた巻煙草の吸殻を十能に取つた。つゞいて菓子と茶とを持つて來た。浴衣をも持つて來た。それでも猶仰向けになつたまゝ、かれは身動きをもしなかつた。

女中は言つた。

『おくれたびれでせうね?』

『うむ。』

始めて其處に女中がゐるのに氣が附いたやうに、此方を見て、

『そんなに歩かないのだがな。』

『何處から來たな、お客さん。』

『M市から……』

『汽車でなしに歩いて來たんですか。』

『途中に用があつたで……』

『でも、歩いちや、大變ですね。五里ですか、六里ですか。』

『六里だな。五里には遠いな。』

『さうでせうね。お客様も、何うかすれや歩いて來たつて言ふ人があるけど、矢張さう言ふで。』

『此頃は静かかね？』

『今日は静かだけでも……昨日は十人ほどの講中が來てな。それが騒いで、いそがしかつた。』かう言つたが、女中はまだ起きようともしないかれを見て、『くたびれが治るだで、すぐお湯に入んなされな。』

『もう、出來てるのか。』

『今、沸いて、向うのお客さんが入つたばかりだ。』

『あのお客さん、前からゐるのかね。』

『昨日、一昨日から泊つてゐるな。何でも、登記所か何か用があるんでせう。今日は其處に行つてた……』

『在郷のもんかね？』

『さうらしいな。』

かれは體を起したが、『あゝもう和服を持つて來て呉れたのか、それは難有い。軍服は窮屈でな。』かう言つて立上つて、釦を外して上衣を脱いで、白い埃に塗れたズボンを取つた。下には格子縞の綿ネルのシャツの洗ひ晒しに汗の染み込んでゐるのが見えた。ズボン下ももう薄黒く汚れてゐた。

女中がズボンを二階の欄干のところに出して、埃を拂つてゐる間に、かれは其處に置いてあつたさつぱりした浴衣を取つて着た。

『あゝ、これでさつぱりした。』

餉臺の前にゆるく胡坐をかきながらかれは言つた。

『ぢや、お風呂にお入んなされな。』

女中に促されて、かれは靜かに體を起した。『まア湯にでも入つて考へよう。』かうかれは思つたのである。二階の裏の折れ曲つた階梯の上に来た時、そこに深く茂つた梧桐に日影の薄れて行つてゐるのを見れば見た。風はまだ吹いてゐるが、餘程靜かにはなつたらしく、前に深紫の山嶺の連互を持つた平野

の町は、やがて静かな初夏の薄暮に迫らうとしつゝあつた。

やゝ薄暗い足元の危い階梯を下に下りると、又、庭の栽ゑ込みに添つた廊下があつて、その奥に廁らしきものが見えて、手水鉢などが置いてある。そこに又もやほんやりとして立つてゐるかれを、『此方です、』と言つて女中は色硝子をはめたその風呂場の扉を明けた。

かれは一番先にそこに掲げてある大きな鏡に自分の顔の映つてゐるのを見た。蒼白い顔、額のところの軍帽をかぶつた白い跡、帽子のあとを印した延びた五分刈の頭、角度の著しく際立つた頬骨、何だかそれは自分ではないやうな氣がして、――昨夜あゝいふことをしたり、長い路をやつて來たりした自分ではないやうな氣がして、ぢつと深くそれに見入つた。かれはまた軽い溜息を吐いた。

湯に入つてゐる時間はかなり長かつた。隙とはちがつて如何にも静かな風呂場であつた。そこは早や既に薄暗かつたが、それでも前から夕暮の残照がさし込んでゐるので、まだ洋燈を要するほどでもなかつた。『お加減は如何で御座いますか?』顔は見えずに、外で女の聲がした。

『丁度好いよ。』

綺麗な湯の中に白く自分の體のすき徹るのを見ながら、かれはかう無意味に答へた。あとは女は去つたらしく、外に人のゐる氣勢もしなかつた。

穴から覗いて見ると、其處は家の裏の野菜畑になつてゐるらしく、隠元だの菜だの馬鈴薯だのが栽ゑ

られてゐるのが見えた。さゝげに手がやつてゐるのなども見えた。赤い白い花などが咲いてゐた。

流しに出ても、かれは別に體を洗はうともしなかつた。一瞬の間にも心はすぐその重荷に觸れて行つてゐた。かれはほんやりとして、考へるともなくまたそのことを考へ始めた。

硝子戸の隅のところを微かにさし込んで來てゐた夕暮の餘照は、次第に薄く薄くなつて、もう少しでその痕をとゞめなくなるばかりになつてゐたが、かれが二度目に湯に入つて流しへ出て來た時には、もうその影も全く消えて了つてゐた。

かれはさびしい氣がした。

それでも湯から上つて、浴衣を着た時には、流石に體がサバサバして、そんなことを同じやうに考へてゐたつて仕方がない、もう少し元氣を附けなければいけない。かういふ風にかれは考へた。一方から考へて見ると、さう煩悶して、思ひ崩折れてばかりはゐられなかつた。如何やうにしてもかれはそのあやしい運命の中から活路を求めなければならなかつた。

かれは風呂場の入口の扉を明けて、それから廁に入つて、やがてそこから出て來て手を洗つたが、ふと昨夜の庭を隔てた居間の燈の光景を思ひ出した。かれはそれとなく四邊を見廻した。

それは楨だの檜だの松だのの繁つてゐる栽込のところの大きな石が置いてあるやうな庭であつた。石燈籠が一つ薄暮の空氣の中に立つてゐた。垣を隔て、隣の廣場を隔て、斜に廣い平野の山のかゞやき

が見えた。

しかし別にかれの心を惹くやうなものはない。かれはそのまま、靜かに歩を進めて、もと來た廊下を折れ曲つた階段の方へ行つた。

もう薄暗くなつた二階の階段を二三段上つて、折れ曲つて、猶ほ昇らうとしたかれは、ふとそこに、上に一人の女の立つてゐる姿を見た。女は顔を斜めにして、柱に片手を寄せて、戸外の夕暮のさまでも見てゐるといふ風であつた。

さつきの女中ではないと言ふことはすぐわかつたが、かれは別に心にもかけず、そのまま一段二段と階段を上つて行つた。ふと、女は此方を見たが、自分の眼を疑ふといふやうにして、更にちつと此方を見詰めて、

『まア。』

と叫んだ。

かれも驚かすには居られなかつた。かう言ふところにかれを知つてゐるものはない筈であつた。かれは再び女を見た。驚愕は周章を混じた喜悅と昔の罪惡に對する不安とに變つた。かれはそこに小婢を見た。裏の小屋で傭曳したお雪を見た。絶つて來るやさしい心と情と涙との持主であるお雪を見た。いざとなつて冷淡に突放したお雪を見た。自分の今の妻と同名であるがために、『お雪、お雪、』と母親が呼ぶ

聲を聞いて、今は何處に何うしてゐるであらうと思つたお雪を見た。大勢の女に觸れて見てから始めてその小さい眼から出た眞珠のやうなまことの涙を理解することが出來たそのお雪を見た。

『お雪ぢやないか？』

『まア。』

女も餘りの不意に、暫しは心臓の鼓動に堪へなかつたやうに、または何ういふ言葉を交して好いかと思ひ惑つたやうに、今でも思ひ出すには思ひ出したが、逢つたら、今度逢つたら思ふさま此方から辛く出て行つてやらうと不斷思つてゐたのに、それを現に此處で逢つて、何うした態度に出たら好いかと思ひ惑ふやうに、いくらか躊躇の態度を見せたが、しかし、そのなつかしい、惚れた記憶のある、始めて深い戀といふことを小さな心に植ゑつけてくれたその男に對しては、恨み、つらみより何より先に、なつかしいといふ念が胸に一杯になつて來て、女は平生の考へなどをその刹那の念頭に置いてゐるわけには行かなかつた。

『まア、ねえ。』

『えらいところで逢つたね、こんなところで逢はうとは思はなかつた。』

かういふ男の言葉の中にも、お雪は其の聲と態度と表情と氣分とのかくすところなく現はれてゐるのを見た。それはなつかしく戀しいと共に、恨めしく腹立たしい聲であり表情であり氣分であつた。お雪

はちつと男の顔を見た。

要太郎はまた要太郎で著しく變つてゐるお雪を見た。かの女はもういつの間にかすっかり大人になつて、肉附にも、顔にも、髪にも、多い男の中を、愛憎と執着と惑溺との満ちた中を、乃至は欺騙と虚偽と遊蕩との中を幾つとなく通過して來た痕跡の残つてゐるのをかれは見た。

かれもお雪も種々な記憶やら感じやらの雜然として起つて來るのに逢つて、互に黙つて立つたまゝ、急には何も言へなかつた。二人は互に二人を調べ合ふやうにして立つてゐた。

『えらいところで逢つたね。』

男の方がまた言つた。一種の微笑——昔お雪に對してよく男が見せた忘れ難いなつかしい微笑をお雪は見た。

『本當ですなえ。私は、何うも似てる、似てるツて思つてはゐたんですよ。さつき、廊下で後姿を見た時にも、さう思つただけども……まさか、若旦那だとは思ひもなかけかつたもんだから……今、そこで顔を合せた時は、本當にはツとしましたよ。』

『全く奇遇だな。』かう言つたかれの心の底には、自分の運命の前に突然あらはれて來たこの一女性が、溺れかけたこの自分に救命繩を投げかけて呉れるか、それとも深い谷の中に一層深く自分を陥れて行く怖ろしい手となるか、それが何方ともわからないやうな不安が起つた。一方では、『こいつから、金を引

出してやれ、』なども考へてゐた。

昔の怨みの痕跡——始めちよつと見えたその怨みの痕が、やがて時の間にすっかり女の顔から態度から消えてなくなつてゐるのを男は見遁さなかつた。一言二言話してゐる中に、かれは裏の小屋で酷く取扱つた小娘の笑ひと表情とを再びそこに發見した。かれに取つては不思議に、または全く奇蹟と思はれるばかりに、自分の心が女に向つて著しく偏つて行つてゐるのを感じた。かれは其處に昔の小婢の涙と色白のあはれな顔と男の冷たい情に泣いて母親に伴れられて行くさまを描いた。『お雪、お雪。』かう今の妻の名を母親が呼ぶ毎に、その小さなあはれな鳩を思ひ出した心が今でも續いて波打ちつゝあるのを感じた。

『若旦那は兵隊さんになつて戦争に行つてゐるツて聞きましたが、もう除隊になつたんですか？』

『いや、今日、ちよつと用があつてね。』どきりとしたのを面にもあらはさず、かう軽い調子でかれは言つた。

『戦争からはいつお歸りになつたの？』

『つい此間だよ。まだ五六ヶ月しか経たないよ。』

『ぢや、凱旋の時ですか。』

『あの少し前だ。』

『さうですか……』

かれは、『今日はね、少し用があつてね、二三日の暇を貰つて出て来たんだよ。』

『さうですか。』

かう言つたが、お雪は笑つて、『若旦那、色が黒くなつたのね。』

『さうかな。何うしても、兵隊さんになつちやね。』矢張笑つて見せたが、『お前も随分變つたぜ！』

『それは變りましたとも……』ふとそれからの種々の艱難を思ひ出したといふ風に、女は曇つた顔の表情をして、『あれから、いろんなことがあつたんですもの。』

『さうだらうね。』

女の顔をちつと見て、

『随分、苦勞したらうね。』

『それや、ね、苦勞しましたよ、若旦那！』種々なことを思ひ出すと、俄かに胸が迫つて来たといふやうに、『話し切れないほどいろんなことがあるんですよ。』

涙が女の眼に浮んだ。

『何時から來てるんだえ？ 此處に……』

『此處に來たのは、まだ先月、先々月ですけどもね。此處に來るまでに、随分、あつちこつちを歩き

ましたよ。』

突然、下で、『お雪さん、お雪さん！』と呼ぶ朋輩の聲がした。

『はアい、何に、此處にゐるよ。』

かう大きな聲で言つたが、要太郎の方に寄つて、『十番ね。あとで、ゆつくり話しに行きますからね。』

……でもね、私が貴方を前から知つてるやうにはしないで置いて下さいね。丸で知らない人のやうにして置いて下さいね。』

かれは點頭いて見せた。

『お雪さん、なにしてるのよ。』下からかういふ聲が迫つて來た。

『今、行くよ。忙しいね、本當に……』かう言つたが、要太郎の方を見て、ちよつと笑つて見せて、

すたすたと折れ曲つた階段を下りて行つた。

要太郎は二歩三步靜かに歩いて、廊下の曲り角の處へ行つて無意識に立留つた。突然湧くやうにかれの前に起つて來た思ひもかけなかつた邂逅が、かれの體の底に横はつてゐる暗い不安の状態と一緒になつて種々に渦を卷いた。しかし今の場合、かれに取つて、その女がかれの前に現はれて來たといふことは、決して喜ばしくないことはなかつた。久し振で、其の柔かい、やさしい聲を聞き、涙脆い素直な姿を見、なつかしい笑顔に接しただけでも嬉しかった。それに、女が當然持つてゐるであらう男のことより

も、女の財布の底などが暗いかれの心の中を掠めて行つた。

かれはやゝ暫く其處に立つてゐた。野は既に暮れつゝあつた。山々にさし残つた夕日の影も暗く、何處か遠くで馬子の唄を唄ふ聲がした。街道の角の古い大きな遊女屋では、女のさゝめく氣勢が賑かにきこえた。

十八

今は稻荷への参詣の客の大勢來る時節ではなかつたけれども、それでも昔からT町の相馬屋と言つて聞えてゐる旅館だけに、薄暮に大分泊客が大勢入つて來たらしく、女中達の忙しげに二階を上つたり下りたりして行く氣勢や、どたとと客の座敷に入つて來る音や、手を鳴らす音や、番頭が何か言つてゐる聲などが、其處の角此處の廊下に賑やかにきこえた。『入らつしやい』などいふ聲が下で聞えたりした。

要太郎の眼には、さつきちよつと下りて行つて見て來た、大きな店の明るいさまが歴々と映つて見えた。店の真中に吊された大きなランプ、明るく四方にさし渡つた光線、しかも火鉢を前にして坐つてゐる番頭、大福帳だの算盤だの、一杯に置いてある帳場の中に坐つてゐる主人、その向うは、厨で、そこには忙しげに物を煮る湯氣が白く颯つて、ランプの薄暗い光線の中に、鮪の一疋なりの大きなのが倒さに吊されてゐるのなどが見えた。女中達は皆な忙しさうにして働いてゐた。何處に行つたかと思つて、

あたりを見廻すと、お雪は厨の向うの暗い處に後姿を見せて、半分膝をついて、頻りに膳部の準備をしてゐた。

要太郎はその以前に、既に宿帳をつけ、夕飯を濟ませせてゐた。

番頭が宿帳を持つて來たのは、階段の上でお雪にわかれて、自分の室に歸つて來てから間もなくであつた。番頭は腰を低くして、其處に厚い宿帳と禿びた筆の二三本入つてゐる硯箱とを置いて行つた。かれは番頭の去つた後で、宿帳をひつくり返して見て、さて何と名をつけやうかと思ひ迷つた。お雪に逢ひさへしなければ、無論匿名で書くのであつたけれど、お雪自身も自分とお雪とは知合ではないやうにして置いて呉れとは言つたけれども、お雪に見られて、匿名で書いたのを疑はれてはと思つた。かれは又ちよつと思案した。またかれは思つた。何うせ一二日の中には、何うにか自分の運命がきまるのである。又、きめなければならぬのである。構ふものか、本當の名を書いてやれと思つて、筆に墨をつけた。しかしかれはまた躊躇した。憲兵隊と警察との連絡は、何うなつてゐるか能く解らないけれど、何の道、それは危険でないことはない。もしものことがないとも限らない。お雪に知れると言つたつて、お雪と自分との知合であることが知られない以上、匿名で書いたとして、お雪に知られるやうなことは先づ減多にはあるまい。で、かれは自分の近所の町のある商家の息子の名を其處につけた。

夕飯の給仕は、最初かれを此室に案内した女が來てした。刺身、野菜、椀盛——さういふものが膳の

上に並んでゐた。酒を一杯飲みたかつたけれど、かれはそれよりも一層夥しく飢ゑてゐた。晝飯はかれは饅頭とふかし薯で間に合せた。

『姐さん、いつからゐるんだね?』

『私は古狸だよ。これでも……』

『何年位ゐるんだえ?』

『もう三年。』

『面白いことがあるだらうね?』

『面白いことなんかあるもんかね。忙しいのと、眠いのと、それつきりだよ。』

『何うだかな……』

『私のやうなもの、誰が構ひ手があるもんかね。』

『旨く言つてゐるア。』

『本當だよ。』

言葉のぞんざいなのに比べて、身装などはちよつと小綺麗にしてゐた。縞子の腹合せ帯などをしてゐた。

『一體、何人ゐるんだネ? 姐さん達は?』

『今?』

かう言つて考へて、『五人……』

『割合に少いね。』

『だから忙しいんだよ。』

『お雪といふのがゐるね。』

『知つてるの?』

『いや、さつき呼んでたからさ。』

こんな通り一遍の話をしながら、要太郎は夕飯を四杯までお代りをして食つた。刺身、肴、野菜、椀の汁の最後の一滴も残さず吸つた。しかも、さうしてゐる間にも、かれは營舎のことを考へずには居られなかつた。昨夜から、今日にかけて、中隊で、大騒ぎをして自分の行方をさがしてゐるさまなどが歴史と映つて見えた。無論、故郷にもその報知が行つたらう。M市の知己の許にも尋ねて行つたらう。或は——或は昨夜とまつたあの家にも行つたかも知れないと考へて見たが、誰も班の者で一緒に行つたものはないからと思つて、それは否定した。丁度今時分は營舎では食事がすんだ頃だ。暢氣に煙草でも喫して自分の噂をしてゐるだらう。かう思ふと、昨夜、川の畔でほんやりしてゐたことが思ひ出された。女中のをりく、話しかける言葉と、さうした想像と、箸を取つて行くにつれて飢が満されて行く快感

とが、一緒になつてかれの體を領した。兵士が一人かうして普通の旅舎にとまつてゐることに就いての疑ひが、この旅舎の人達に起つてゐるはしないかといふ不安も、をり／＼は頭を擡げて來るので、かれは鋭い眼附をして、女中の方を見た。お雪と詳しい話をするまでは——それまでは、脱營兵であるといふことを知られたくない。こんな風にもかれは考へた。わざとのんきな風を装つて見たりした。

『明日は別にお早くなくつても好いんだね。』かう言つて、女中は膳をお櫃の上に乗せて、そして下になりて行つた。幸ひに女中はかれの明日の行程をきかなかつた。疑つてゐるやうな素振も少しもなかつた。再び上つて來た時には、女中はかれが横に倒れてゐるのを見たが、さつきかれのつけたまゝ其處に置いてあつた宿帳に眼を附けて、

『もう書いたの？』

『うん……書いた。』

寢ながらかれが言ふと、女中はそのまゝそれを持つて、半ば明いた障子のところから出て行つた。

涼しい夜風が室に吹込んで來た。

横になつて、ぢつとしてゐると、すぐその運命に對する怖い不安が頭を擡げて來るので——種々と頭が痛くなるほど神経が尖つて來るので、かれはすつと立つて、廊下へ出て、闇の夜に吹く涼しい風に熱い顔を向けた。故郷に手紙を出して金を送つて貰はうとちよつと思つたが、かれはすぐそれを打消した。

た。

何時の間に、かう大勢客が來たかと思はれるやうに、室ごとに灯が明るくついて、笑聲だの話聲だのがきこえた。大きな聞えた旅館ではあるけれども、この近所の慣習の料理屋兼業なので、きやつきやつと笑ふ女中などの聲も陽氣に、何處か碎けた、土地の淫蕩の臭ひのあたりに満ちわたつてゐるやうのをかれは感じた。何處かで、三味線の音などがした。

廊下を歩いて行くと、『あら、田中さん、そんなことをしちやいやよ、』などゝいふ女中の聲がした。男が女に戯れてゐるさまがかれの神経を尖らせた。

『お雪ぢやないか？』

かう思つたが、それはお雪ではないらしかつたので安心して、二足三足向うに行きかけたが、今度はお雪が何うしてゐるか見ないではゐられないやうな氣がし出して來た。お雪はあれつきり姿を見せなかつた。忙しいのではあらうが、何うしたらう？ 何をしてゐるだらう？ と、急に『兎に角、家を見て置くことが肝心だ。此處で自分の運命を右なり左なりにきめるのだ。さうだ。見て置かう。』かうかれは思つて歩き出した。

室がすつと並んでゐた。そして廊下がぐるりとその室々を廻つてゐるやうになつてゐた。そろ／＼暑くなつて來る頃なので、何處の室も大抵障子は一枚位づゝ明けてあつた。ある客は商人らしく、さつき

の女中を相手にして、さびしさうにしてもさ／＼飯を食つてゐた。ある客は、食事をすました後の身を暢々と横へて、手帳などをつけてゐた。大方今日使つた金を書き附けてゐるのであらう。ある室では、洋服姿の男が、これから何處かに出ようとしてゐた。ある室では、客はるずに、大きな旅鞆が二つまで床の間に置いてあるのがかれの眼に映つた。と、その鞆の中がかれに考へられて来た。

で、かれはお雪の姿を彼方此方に捜したが、最後に、厨の奥に膳拵へをしてゐる後姿を發見するまで何處にもその姿を見出すことが出来なかつた。順番で、今日はお雪は、膳拵への方へ廻つて、忙しくしてゐるのであつた。

店に出た時、四十五六の主人が、

『何處かお出かけですか？』

かう聲をかれにかけた。

『ちよつと町を散歩して来る。』

で、番頭は下駄を並べて呉れた。ふと番頭の禿けた頭が灯に光つて見えた。

『行つていらつしやい。』

かういふ聲をあとにして、かれは大通りへと出た。流石は稻荷の社の前だけに、その門前には、茶屋だの料理店だの、灯がちら／＼と明るくついて、色の白い女や、湯氣の颯つた厨や、二階に上る段梯子な

どが闇の夜の中に透くやうに見えてゐたが、少し町を外れると、もうすつかり闇で、蛙の聲が唯湧くやうにきこえて来るばかりであつた。かれは其處に行つて、やゝ暫く立つてゐた。涼しい風が袖の明いた寛いだ浴衣から肌へと吹き込んで来た。

星の光りに山々の黒く靡いてゐるのが見えた。

引返して、稻荷社へ入る角の古い遊女屋の前に立留つたかれの頭には、山裾の故郷の町の遊廓が思ひ出されてゐた。こゝらでも、故郷の町と同じく、矢張、張見世をしないので、廣い座敷が唯がらんとしてゐるだけであるが、それでも、さうした家の内部に熟してゐるかれには、眼に見えない内部のさまざま歴々と見えるやうな氣がした。梓の顔などが思ひ出された。

暫くして、其處を出て、稻荷の社の中に入りかけて見たが、灯も見えず、路も闇く、別に心を惹くやうなものもないので、かれはすぐ引返して、ぶらり／＼と歩いて、晝間歩いて来た通りを警察署のあるあたりまで行つた。

そしてかれはそこから引返して来た。

お雪の後姿は、矢張、厨の奥のところに見えてゐた。『おかへんなさいまし。』かう言つて其處にゐた人は迎へた。

ふと、かれの眼にくつきりと映つたものがあつた。それは此處の祖母らしい婆様が坐つてゐる帳場の

傍に、一ところ三尺の押入位にくりあけて、そこに大きな金箱らしいものが置いてあることであつた。金庫ではなかつたが、尠くともそこに金が藏つてあると言ふことは、本能的にすぐかれの頭に反響した。かれはちつとそこに見入つた。今年七八歳になる女の兒に何か言ひかけてゐる白髪の婆さまの皺の多い顔もそれと見た。

かれは急いで階梯を上つた。

十九

それから一時間ほど経つて、かれは剛へ行かうとして、暗い廊下のところを通ると、向うから運よくお雪が來た。

幸に四邊に誰もなかつた。

『あ、若旦那！』

『忙しさうだね。』

『今日は下番の方に廻されたもんだから、手が明けられないんですもの。……行つて、お話がしたいけども……』

『……………』

『もう、しかし、ぢき障になりますから……』

『すんだら、お出で……』

『え。』

かう言つて、『でも、誰にも、若旦那が私を知つてゐることを言はないでせう？』

『言はない、言はない。』

『十番ね。』

『さうだよ。』

白い笑顔が闇の中に浮き出すやうに見えてゐた。向うには、樹の繁つた裁込があつて、その綠葉に、二階からかそれとも下座敷からか灯が明るく線をつくつてさし渡つてゐるのが見えた。そしてそれとは反對に、かれ等のゐる廊下は、暗くなつてゐた。廊下の突當りからは、二階に上る折れ曲つた階段があり、此方は、矢張細い廊下を通つて、店の方へ行くやうになつてゐた。下座敷と二階との寢道具のしまつてある室がそこにあつた。棚には船底枕とく、り枕とが澤山並んでゐた。

かれはお雪の白い笑顔を見、お雪は要太郎の五分刈の頭と顔とを闇の中に見た。さつき突然邂逅した時にも一度結ばれた肉のきづなが、女の方では男の冷酷に對しての戒愼があり、男の方ではかねて残酷な自己の所爲に對する一種の反抗のやうな心持があつたのにも拘らず、強い力で互にそれを結び附けや

うとしてゐたが、今では、その強い力が、一層盲目的に、丁度遠心力と求心力とが相交錯するやうに、二人の心と體との間にある漲溢を示して來てゐた。

しかし男に對するお雪の戒慎の力はまだかなり強くその盲目な愛情の中に働いてゐた。厨で忙がしがつてゐる間にも、お雪は種々男のことを考へた。再び陥つて行く自分の運命など、いふことも考へた。それに、お雪には、此處に來て間もなく出來たKといふ男がゐて、それが深切に何彼とやさしいことを言つて呉れるので、惚れてゐるといふほどではないが、頼りになる人とは思つてゐた。膳ごしらへをしながら、お雪はその男のことを考へたり、二階にゐる昔の残酷な戀人のことを考へたりした。厨にばかりゐて、二階に上つて行かなかつたのも、單にお雪が忙がしいばかりではなかつたのであつた。お雪はもう昔の無邪氣な小鳩のやうな娘ではなかつた。お雪はその時の悲哀と恨みと母親の憤怒とを今でもくりくりは思ひ起した。それでゐて、お雪は又わかれてからも二年も三年もその残酷な戀人が忘れなかつたことを思ひ出した。或は残酷なだけそれだけ忘れられなかつたのかも知れなかつた。いつそもう今日は逢ふまい。なまじいに逢つて、自分を陥れて行くよりも、明日になつて靜かに、普通の人と少しも變らないやうにして行く方が好い。かうも考へた。しかしあらゆる抑制も戒慎も、盲目な愛慾に對しては、何の効もないやうな一種の強い衝動をお雪は感じた。

それに、わかれてからの自分の經て來たつらい悲しい境遇を男に話さずには居られないやうな氣がした。人の來る氣勢がして別れようとした時、お雪は不意に、男の熱い握手を自分の右の手に感じた。お雪は無理に引離すやうにして、頭を振つて見せた。戒慎と抑制とがまたお雪の胸に上つて來た。

『ぢや、ね、話もあるからね。』

『え。』

かう言つて、女はわざとバタ／＼と草履の音を立て、店の明るい灯の方へその姿を隠した。

二十

何んな物語がお雪の口から話されたであらうか。虐けられ、蹂躪せられ、打たれ、罵られた小さな鳩の物語——それが何んなに深い影響を要太郎の心と體との上に齎したであらうか。

其處にかれはかれが梓や他の女のために嘗めさせられた爛れるやうな苦痛と悲哀とを發見した。鞭と苦との下に折檻せられるもの、苦痛と悲哀とを發見した。水と火との中に半ば溺れやうとした憐れなもの、小さなもの、姿を發見した。かの女はかれの家を出てから、母親と繼父との折檻を受けなかつた日はなかつたといふ。殆ど食ふものをすら碌に食はせられなかつたといふ。豪家の若旦那をさういふところまで手に入れて置きながら、何うすることも出來なかつた意氣地なさを何んなにひどく罵られたか知れ

なかつたといふ。それに思ひもかけない新しい事實がかれを驚かした。女の言ふところに據ると、かれの家を出る時、女は月のものがとまつてゐたといふことであつた。しかし経験のない身には、別に、さういふことも氣が附かず、始めてそれと疑はれ出したのは、それから二月ほど経つてからのことであつたが、父母に知れて、若旦那の許に又その心配を持つて行くやうなことがあつてはと思つて、何んなに女は苦勞したか知れなかつた。それに、さういふ話を若旦那のところへ持つて行くといふことは、絶対に二人の間を割いて了ふことだと信じてゐたかの女は、小さい心ながらも、獨りでそれを處分しようとして、何んなに苦心したか知れなかつたといふ。幸ひ、近所に、不斷からかの女の不幸に同情してゐて呉れた中年の女がゐて、それをおろすやうにして呉れたが、そのため、かの女は半年以上も苦しい病床に横はつて寝てゐたといふ。そして、その間にも、絶えず残酷な戀人のことを思つて忘れることが出来なかつたといふ。

それを聞いた時、

『本當かな——』

かう要太郎が言ふと、

『本當でないことを私が言ふわけがありませんか。』

かう言つて、やさしいおとなしい性質に似けなく、女は眼を吊し上げて、涙をほろほろこぼしながら

言つた。

要太郎は黙つて手を拱いたまゝにしてゐた。

かれにしては、かうした大きな運命の瀬戸際に立つて、更にかうした大きな愛情に打突かるといふことは、驚かるゝことでもあり、又更に神祕な不可思議な報酬を報いられつゝあるやうにも感ぜずには居られなかつた。女の戀の苦痛は、これまでかれの経験した戀の水火の苦痛の中に一々裏書をして再現されて來た。梓や其他の女に向つて注いだかれの空しい愛情を、女も矢張かれの爲めに長い間経験させられてゐたといふことが、段々かれにもわかつて來た。

女の家は彼の生れた町から東に七八里を隔てたM市に近い廣野の中にある小さな農家であつた。女は毎日彼のゐる山の方を見て暮したといふ。そこに雪がかかつたり晴れたりするのを見ては、闇から闇へと葬られた愛情の塊を思つたといふ。そして唯一言でも好い、それだけでも好いから告げたい。一生の中は是非その話をせずには置かない。かう思つてかの女は暮した。かの女はやがて其處から西に十五里もある町へ酌婦として賣られて行つた。それはこの附近に見るやうな田舎の人達を相手にする家で、一面其家の婢のやうにして働くと共に、夕方からは、着物を着更へたり白粉をつけたりして客の酒の席へと行つた。其處には疳癩持の亭主がゐて、毎日のやうに嘔鳴りつけられた。横面を張り倒される位のことは何でもなかつた。二十にもなつて味噌藏の中で一日泣いたりしたことなどもあつた。しかし石の上にも、水火

の中にも生きれば生きられる生活があつた。そこで女は男といふものゝ淫蕩な不真面目な女の真心を玩具にすることを得意とするものであることを教へられた。自分の正直な小さな心ではとてもその荒い熱い波を凌いで行くことが出来ないといふことをも悟つた。かの女の今までの状態は赤手で恐ろしい火の中に飛び込んで行つたやうなものであつた。一夜、お雪は泣いて泣いて泣き盡した。それは自分が今まで思つてゐた男の心の冷酷といふことが心から飲み込めたためであつた。あゝした残酷も、あのやうな薄情も、皆なさうした男の心であると思つた時、一層涙は胸へとこみ上げて來た。胸の底に人知らず思ひを包んで、この真心のいつかは先方に通ずる機会があるであらうと憑みにして、そればかりを大事な大事な生命のやうに思つてゐたのも皆な空頼みで、空想で、夢か幻のやうなものだと女は段々思ひ始めたのであつた。かの女は今でもその夜の涙をはつきりと思ひ出すことが出來た。譯なしに涙が出て來る。窓に凭つてゐても出て來る。星の空を見ても出て來る。客の前に坐つてゐても出て來る。そして冷めた夜床も、浮くばかりに一夜泣き明かした。

その翌年、かの女は其處から温泉のある遠い山の中に行つた。しかし時は既にかの女の小さな純な心を碎いてゐた。もう酒席に出て小さくなつてゐるやうなお雪ではなくなつてゐた。客の枕席に侍するにも、最初の一二年のやうな苦痛と悲哀とを感じなくなつてゐた。かの女は運命に従はねばならない身を自覺してゐた。従つてお客を綾なして金をつかはせる術をも覚え、心にもないやさしい言葉を客に投げ

かける手管なども覺えた。軽い口なども利くやうになつた。

要太郎が梓を忘れ兼ねて懊惱煩悶してゐる時分、丁度かの女はその遠い温泉の山の中にある。かの女は土地のある若者に思はれて、その男は毎晩のやうにかの女のある小料理屋へとやつて來た。小さな室、山に向つた小さな櫃子窓のついた室、其處をかゝる女は今でも歴々と頭に描くことが出來た。その窓からは、山にかゝる雲が見え、白く瀨をなして流るゝ谷川が見え、一時間毎に吹き上げる温泉の白い湯氣の颯るのが見えた。谷川の橋の上を雨の降る日に傘の通つて行くのをかの女はよく眺めた。

繁々通つて來るその若い男を要太郎と思つて見たこともあつた。そしてその積りで心を靡かせて行つて見たりした。裏の小屋での嬉しなシインをその儘その山に向つた室でのシインと一緒に雑ぜて楽しんでなどした。忘れ難いのは、初戀の心であつた。しかし、いかに交せて見ても、其聲、其顔、其言葉、其表情、さういふところから、その幻影はいつも破れて行つた。その若者のために別にかの女の許に通つて來た中年の男を、振つたり何かしたので、その土地では一時はかなりに評判になつたが、しかしその若者が親類から束縛されて、無理に妻帯した時にも、かの女は別に深く悲しみもしなかつた。その若者と別れて來る時にも、要太郎に別れた時の半分も心も動かさうとしなかつた。

それからかの女は彼方此方へと流れた。E町にもゐたこともあれば、K町にもゐたことがある。そしてそれから移り替つて行く度に、その借金は殖えて行つてゐた。そしてそれは大抵は強慾な母と繼父と

のためであつた。今でも、をりく母親はやつて来て、折角心がけてためて置いた金や着物を持ち出して行つた。

要太郎の妻がかの女と同じ名で、今は里に歸してあるといふ話を聞いた時には、お雪は言つた。

「子供は？」

「子供なんかいない。」

「うそでせう。あるんでせう。坊ちゃん？ 嬢ちゃん？」

「本當にありやしないよ。」

「さう、本當に……」

お雪は凝つと男の顔を見て、

「お兄さんは？」

「東京の學校に行つてる。」

「もう、大學に入るんですか？」

「來年だらう？」

「矢張、それぢや、あの方がかり母さんや父さんに可愛がられてゐるのね？」

「何うせ、さうさ……」

「何うしてでせうね。」

「矢張、俺が馬鹿だからさ……」要太郎は考へるやうな眼附をして、「戦争にはやられる。死ぬ生きるの思はする。兵隊の辛い勤務はする。……今でも、それで苦しんでゐるんだからな。」

「本當ですな。何うして、あゝ親御さんと氣が合はないんでせうね。」

「誰にだつて氣なんか合はないんだ。初めから、誰にでも憎まれるやうに生れて來たんだから……」

「……………」

其時分を知つてゐるお雪には、要太郎の境遇が同情されずには居られないやうな氣がした。家の人達が誰も構はない。丸で他人の厄介息子のやうな取扱をしてゐる。それを氣の毒に思つたのも、お雪の戀の初めの心であつたかも知れなかつた。

二人は黙つて相對した。夜はもう十二時を過ぎてゐた。誰も彼も皆な眼つた。女中も客のあるものは客の室へ、ないものは女中室にいぎたなく熟睡してゐた。お雪は此處にやつて來る前に、既に自分の受持の用事をすまし、主人夫婦、つゞいていつも遅くまで起きてゐる老婆の奥に寢に入つて行くのを見送り、料理方の男と番頭とが大戸を閉めて外へ出て行くのを見済まし、朋輩のお咲が客があつて、三階の奥の一間に寢に行くのを承知してから、靜かにこつそりとこの十番の室へとやつて來たのであつた。入つて來た時には、要太郎は床の中に入つてゐたが、それでもまだ大きな眼を明いて起きてゐた。餉

臺の上のランプは、ホヤが黒くなつて薄暗い光線を一間に投げてゐた。お雪は靜かに障子を明けて、少し笑ひながら入つて來た。

要太郎は起き上つた。

火鉢にはまだ火がいくら残つてゐて、そこに掛けてある鐵瓶の湯はまだ熱かつた。薄暗い光線の中を透して、長押にかゝつてゐる軍服と軍帽とが微かに見えた。

火鉢を前にして坐つたお雪は、餉臺の角のところに坐つてゐる要太郎と、丁度斜に相對するといふ形になつてゐた。お雪は眞面目な顔の表情をして、艶めかしい様子などは更に少しも見せなかつた。

始めは小聲で話した。

暫くしてから、

「隣は？」

かうお雪は訊いた。

「ゐないだらう、誰も……」

「さう。」

かう言つて、「ゐるんぢやない」と疑ふやうにしたが、そのまゝ立つて行つて、中じきりの襖を細目にあけて覗いて見て、「大丈夫、ゐない。」

で、元の座に戻つて、それから二人は普通の聲で話した。

艱難と苦痛との長い話、それも口に上せては、さう長くはかゝらなかつた。要太郎はお雪の色の白い頬にをり／＼涙の傳つて落ちるのを見た。思ひ出しては堪らないといふやうにして、話をやめて、袖で涙を拭くのを見た。悲しい思出に自ら誘はれてをり／＼話を途中でやめる顔のあはれな表情を見た。要太郎も動かされずには居られなかつた。かれは憐れな女の物語に引摺られて行くやうなを感じた。自己の冷酷と無情に對する報酬が完全に酬はれつゝあるのを感じた。かういふ心持を餘所にして、他に熱いまことの心を求めた自己の愚さなどもくり返された。お雪も要太郎の目の時々潤んで行くのを見遣さなかつた。

艱難の多い人生が今更のやうに要太郎の胸を壓した。自分に離れずについて廻つてゐる重荷、その重荷も時々かれの胸に重苦しく蘇つて來た。年に比べていろ／＼な經驗をしたとは言ひながら、流石に年のまだ若い要太郎は、これから來る人生の大波に對して、不安と恐怖とを感ぜずには居られなかつた。かれに取つては、これから無限にひろけられた人生は、全く暗黒で一道の光明すらその前に認められないうやうなものであつた。

女の話をしてゐる間に、今日長い路をM市から此處までやつて來た自分のあはれな姿が見えたり、かくしに一文の金もなく甘藷を午飯の代りにした自分が見えたり、寢床に熟睡した兵士達の顔が見え

たりした。故郷の父母の顔、裏の小屋、夕日の當つた女郎屋の色硝子の窓、三等郵便局の卓なども見えた。要太郎は二三本残つた煙草を靜かにふかした。女は火箸で灰の中をいちぢつてゐた。

女は急に訊いた。

『それでも奥さんは時々来て？』

『凱旋した時に、ちよつと一度来たきりだよ。』要太郎は口を歪めて皮肉な顔をして、『鼻なんかにも、もう思ひは残つてゐないんだよ。除隊になつて歸つて行つたつて、鼻なんか、もう歸つて來やしないよ。』

『そんなことはないでせう？』

『だつて、さうなんだもの。この間、お袋が來た時にも、その話をしたんだもの。あんな奴は何うでも好いんだ！』

『だつて……』

『離縁して貰ふやうに話してあるんだよ、もう。何うせ、氣が合はないし、それに、親達同士も仲がわるいんだ。』

『何うして、また、そんな奥さんを貰つたんだらうね。』

『始めから、かうなるのは、わかつてゐるんだ。不思議はないんだよ。……思はないとも……鼻のことなんかちつとも思ひやしない。戦地に行つてゐたつて、手紙一本よこしやしない。一年以上も一緒に

ゐて、子供も出來ないんでも分らア。』

『矢張、薄情なのね、貴方は？』

かう女は眞面目に言つた。

『だつて……だつて、『かれはどきまぎして、『だつて、氣が合はない奴なんだもの。』』

『奥さんだつて可哀相だ。』

『何アに、可哀相なことなんかあるもんか。先だつて、ちつとも己のことなんか考へてゐやしないんだ……。向うから離縁されるのを望んでゐるんだもの。』

『何處の人？』

『M村の百姓だよ。』

『大盡？』

『金は少しはあるんだらう。……』かう言つたが、『本當にお前も苦勞したな。』

『えゝ……』

『まア、仕方がないあの時分は、己もまだわからなかつたんだから。子供だつたんだから。男と女のことなんかよくわからなかつたんだから……』

『今ぢや、もう餘程經驗が積んで、猶ほ薄情になつたんでせう？』

『随分、いろんな目に逢つたよ、俺も……、』梓のことなどを要太郎は頭に浮べながら、『随分女にはえらい眼に逢はせられたよ。これも皆んなお前のたゝりだ。』

『旨いことを言ふのねえ。』

『本當だよ。苦勞させて、本當にすまないと思つたよ。だつて、その證據には、鼻の名がお前と同じなので、お袋が呼ぶと、お前を思ひ出して困つたんだもの。』

女はそれには頓着せずに、『でも、私の思ひだけでも届いたから好い。何うか一度は逢つて話したい。話さずには置かない。何んなお婆さんになつてからでも、一生の中には一度は逢つて話さずには置かないと思つたんだ……。でなくつちや闇へやつた子に對してもすまないと思つてゐたんだから……。』

女は長い話をすませて、ほつとしたといふやうな顔をしてゐた。二久はまた暫し黙つて相對した。

要太郎は鐵瓶を取つて、まだいくらか熱くなつてゐる湯を急須にさして、それを茶碗について、自分も飲み、お雪にも勧めた。新しい局面が二人の間に展けて來なければならぬやうな氣がそれとなくあつたに満ちた。

『戦争は大變でしたらうね?』

『随分えらい目に逢つたよ。』

『銃丸なんか來るところへ行くんでせうね。』

『行くどころぢやない。もつと先へ行くんだ。敵の中に斥候に行く時なんか、それやえらいもんだよ。丸で生きてゐる空はないね。』

『さうでせうね。』

お雪は考へて、『その代り、手柄したんでせう。勳章は貰へるんでせう?』

『何うだか、當てにはならないけれども……ちつとは貰へるだらう?』

『除隊はいつ?』

『順よく行けば、來年だけれども……何うなるか。』重荷に對する不安は、又かれの胸に押寄せて來た。

『今日は何うして此方に來たの?』

かれははつとした。脱營兵——かう思ふと胸が震へた。

『ちよつと用があつて……。』

『明日歸るんですか。』

『明日は何うなるか、用の都合で、もう一日ゐなくつちやならないかも知れない。海岸まで行つて來なくつちやならないかも知れないから……。』

お雪は別に深く疑ふやうな様子もないのでかれはいくらか安心して、『隊があるんだよ、海岸に……。K町にゐるか、それともT村にゐるかちよつとわからないがね……。その都合で、明日一日また泊らなけれ

やならないかも知れない。』

『さう？』

お雪は笑つて見せたが、其處に置いてある時計を取つて見て、『もう一時よ。』

『さうなるかね。』

かう言つたが、要太郎は急にある衝動を受けたと言ふやうに、いきなり手を女の方に延ばした。

女はそれを避けるやうにして立上つた。

男も續いて身を起した。

女は男の手に袖を執られながら、『歸して頂戴よ、ね、後生ですから。聞いて戴きさへすれやそれでもう好いんだから……。このまゝにして、その代り一生、貴方のことを忘れずに考へてゐますからね、後生ですから、お願ひだから。』かう言つた女の眼からは、ほろ／＼と涙が流れた。お雪は昂奮してゐた。

『堪忍して呉れ、な、な、本當に、今夜といふ今夜、お前の本當の心はわかつたんだから。今度こそ、俺が本當の真心を見せてやるから……。な、な、本當に堪忍して呉れ、俺だつて、俺だつて、そんなにわるい人間ぢやないんだから、これでも血もあり涙もある同じ人間なんだから、な、な、』かう言つて傍に立つて來た要太郎の眼からも、涙がほろ／＼落ちた。

『俺ア、悪人ぢやないんだから、な、な、本當にすまなかつた。な、な。』

『でも、後生ですから。』お雪も泣きながら言つた。

お雪も男の眼から涙の流れて落ちるのを見た。お雪も何うすることも出来なかつた。

『まア、坐つて……。』

かう言つて、男は無理にお雪をそこに坐らせた。

暗いランプがバチ、バチと音を立てた。暫くすると、夜行の汽車が來たらしく、停車場の方で物の動く音が一しきり賑やかに聞えた。お雪はかよい自由にならない女の身の悲哀を染々と感じた。

二十一

何うかしなければならぬ。愈々決心を固めなければならぬ。右なら右、左なら左へ行く決心をしなければならぬ。かういふハメに陥つた以上はもう仕方がない。實行、實行、それより他に路はない。自分の出て行く路はない。

……それなら、國に歸る？ イヤだ。イヤなことだ。國にはもう思ひ残すところはない。國に歸つたつて何も無い。噂は無論離縁、父親だつて母親だつて、俺に對して愛情はちつともない。捨て、去つたつて、何とも思ひやしない。故郷のあの山、山裾の町、湯、そんなものだつて、一つとして自分に敵意を持つてゐないものはない。誰の顔も皆な俺を見て笑つてゐる。罵つてゐる。冷笑してゐる。温かい心

持などを持つてゐる呉れるものは一人もない。

遁ける……このまゝ遁ける……お雪をつれて遁ける。何處の海の果か、山の中か、さういふところに
お雪を伴れて遁けのびる。さうすれば、お雪と一緒にすることが出来る……地方へ歸つたのでは——除
隊されて國に歸つたのでは、到底お雪と一緒にすることは出来ない。とても出来ない。親達や親類の反
對だけでも出来ないのはきまりきつてゐる。……それに、お雪がこんなにまでこの俺を思つてゐる呉れ
たとは思はなかつた。熱いまことの心が——さがしてさがし廻した心が、かうして此處にあらうとは夢
にも思はなかつた。……遁けるより外に路はない。お雪をつれて遁ける。初めは自分は一人で遁けて、
そして、あとからお雪がやつて来るやうにする……。それには是非實行しなければならぬ。一文も持
つてゐない自分は、先づ金をつくることを考へなければならぬ。……金、……金、……金、かう思ふ
と、晝間銀行で金を持つて行つたらしい銀行員の自轉車姿がふと浮んで見えた。

と思ふと、一方では、お雪の戀を再び得たことが何とも言はれずうれしいやうな力強いやうな神祕の
やうな氣がする。自分の運命の中に突然さうした女の情が入つて來たといふことは、善か悪か、さうい
ふことは少しもわからないけれども、兎に角何等かの暗示であるやうに思はれる。……すぐ自分の傍に
その心がある。その魂がある。その呼吸がする。觸れば觸られる。髪がある。油臭い鬘がある。
ふとある計畫をかれが考へた時には、かれははつとした。神経が昂ぶつて、體が動搖して、身が際限

のない谷底に陥つて行くやうな氣がした。と、一方では、祕密、罪惡に對するかれの興味がかなりに強
い力でかれの魂に蘇つて來た。暗い闇の中に自分が見える。安芝居などで見た悪人の心理が自分の心理
になる。怖ろしい罪惡を平氣で自分がやつてゐる。罪惡そのものよりも、それを實行する勇氣が潑刺と
して眼の前に浮んで見える。他人の出来ないことを自分がしてゐるといふことに深い戰慄を感じる。暗
くなつたり、明るくなつたりする。闇の中に無限の罪惡が見える……と思ふと、金銀の輪がちつと見詰
めた闇の中に燦爛として見える。つゞいて、閃々とした火が見える。戰爭の巷である。自分が今其處に
ゐる。黄色い灰色の砲烟が其處にも此處にも颯る。砲聲が耳を劈くばかりに、ひゞいて來る。自分は今
その中を通つて、疎らな林の中をぬけて、味方の陣地の方へと歸つて來てゐる。あの時の心持を思ふと、
いぢけた意氣地のないやうな氣分は爪の垢ほどもない。何も彼も張詰めてゐる。この世の中の罪惡を犯
す心などはそれに比べると何でもない。何故ならば、それは死を賭してゐるからである。かう思ふと、
戰爭で養はれた何うともなれといふ氣分が、盛に頭を擡げ出して來る。其處は丸で別の世界だ。喧嘩が
したければする。掠奪がしたければいくらでも出来る。支那の女が小さな足で、ちよこちよこ逃げて行
く。それを追ひかけてつかまへる……。

ぐづぐづしてゐるから人間は駄目なのだ。死を賭さへすれば、何んなことでも出来る。出来ないと言ふものはない。と、今度はそれに對する嚴しい制裁が目覺めて來る。自分は倒さにつるし上げられる。

でなければ寒中氷を割つて水風呂に入れられる。曾て聞いた銃殺の光景が眼に浮ぶ。……ウテ！ バラ、バラ、バラ、バラ。標的にされた奴は忽ち倒れる。かれは其處まで考へて行つて思はずぶる／＼と戦慄した。

女はよく寝てゐる。すやく／＼と静かに呼吸をついてゐる。いつそ殺して一緒に死なうかと言ふやうな荒誕な残酷な心が起つて来る。そしてそれと共に昨夜の心も魂も奪はれた大きな歡樂の光景が病的に誇張されて考へられて来る。扱帯を取る。そしてそれを女の首の周圍にそつと廻す。そしてぐつと緊める。力限りに緊める。聲も立てずに死んで行つて了ふに相違ない。さて死んだのを見すまして、今度は自分で死ぬ支度をする。ふと考へた。自分はその時になつて死ぬるだらうか。死ぬつもりでも、その時になつたら、生きてるつもりになりやしないか。そしてこつそりと雨戸を明けて、屋根を傳はつて遁げる方法を講じはしないか。と思ふと、自分が今現にそれを實行してゐるやうな氣がする。押しつめられて、行くところがなくなつて、さういふことをしてゐる自分が見える。夜は明けたばかりで、あたりは茫としてゐる。人はまだ誰も起きてゐない。自分は屋根をそつと傳はつて、庭の樹の枝に縋つて、反動を附けて塀に取り附く。まご／＼すると、ずぶりと足の裏を刺しさうな大き釘がそこに並んでゐる……それを無事に下りる……一散に街道を遁け出す……。

女はよく寝てゐる。夜着の襟に押されて、静かにつく呼吸が苦しさうにきこえる。餘程起さうかと思つたが、よして、此方へ寢反りを打つて、『まア、まア、決心をするにしても明日になつてからだ。今夜は先づ寢よう、靜かに寢よう。』かう思つて、かれは眠るべく骨折つた。矢張、長い間眠られなかつた。妄想は拂つても拂つてもあとからあととやつて来た。殆ど際限がなかつた。

しかしいつの間にか眠つたと見える。ふと眼を明くと、雨戸の隙間はもう明るくなつて、女は靜かに障子を明けてそして廊下へ出ようとしてゐた。

一言二言話をして女が階段を下りて行つたあとで、かれは再び深い深い熟睡の境に落ちた。

二十二

女中が入つて来たので、目を覺ましたのは、それから二三時間経つてからのことであつた。いつの間にか、雨戸はすっかり明放されて、朝日が麗かに室から室へとさし込んでゐる。雀がちうちうと喜ばしさうに軒に囀つてゐた。

今日も好い天氣だ。

がばとはね起きて、『もう、遅いのかえ？』

女中は持つて来た火を火鉢に入れながら、『さうだね。そんなに早くもないよ。さつき一度来たんだけ

ども……餘りよく寝てたから、起きずに行つて了つたんですよ。』

かれは半ば起き上りながら、餉臺の上の時計を手に取つて見た。九時五分前——『ああ九時だ。』かう言つたが、睡眠不足と神経昂奮とで充血したかれの眼は、赤く爛れたやうになつて居た。顔にも緊張した表情が覗かれた。

九時まで寝てゐたことなどは何年にもない。かう思ふと、すぐ自分の身の上が、運命が、重荷が漲るばかりに押寄せて來た。餘り思ひ詰めたので頭が一時ぼんやりしたやうにも思はれる。かと思ふと、一方では何うにかしなければならぬといふ氣が張り詰める。今日で三日目だ。あと三日経過すれば、もう逃亡だ。つかまへられ、ば軍法會議に廻されて重い刑に附せられるのだ……。もう遅い……。つゞいて昨夜のことが考へられる。今朝そつと出て行つたお雪のことが考へられる。見ると、茶器も座蒲團もそのままになつてゐる。そこに坐つたあとが依然として残つてゐるやうに思はれる。泣いて袖を顔に當てたさまが見える。思ひもかけない真心を浴せかけられた自分が見える。實際かうしたものが此處に自分を待受けてゐるやうとは思ひもかけなかつた。脱營兵の自分を、一文なしの自分を、何方にも行くことの出来ない窮地に陥つた自分を……。

やがて女中が運んで來た朝飯の箸をかれは取つた。その前に、かれは下に、風呂場に近ところにある洗面所に行つて、つまみ鹽で齒をみがいてそして顔を洗つた。昨日風呂の中で、『お加減は?』と外か

ら訊いた女はお雪であつたといふことをふとかれは其時思ひ出した。顔こそ合せないが、其處で始めて五六年も逢はなかつた二つの心が逢つたのであつた。昨夜お雪はさう話した。で、かれは顔を洗つてから、お雪の姿をあちこちと目で捜して見たけれども、三階にでも行つてゐると見えて、あたりにその姿は見えなかつた。かれは鹹い汁を吸ひ、硬いボソボソとした飯を食つた。米の飯でありながら、それも咽喉に通らぬやうな氣がした。心も體もすつかり勞れて、頭がガンガンした。眼の前には黄い塵が日に舞つて見えた。

『お軽いね。』

かう言つて、女中は濟んだ櫃をかゝへて立上つたが、ちよつと立留つて、『今日は御滞在?』

『用の都合で何うなるかわからない……。鳥渡出て來なくつちやならないから。』

『やう。』

かう言つて、女中は靜かに下へ下りて行つた。

兎に角何うかしなければならぬとかれは思つた。女の熱い情を考へると、それを捨て、去ることは出來ない。何うしても、將來一緒になる。妻にする。自分の残酷冷情であつた報酬から言つても、これからあのお雪を妻にして、悲しい魂を復活させてやらなければならぬ。それには是非あることを實行しなければならぬ。金をつくらなければならぬ……。ふと帳場の傍にある金錢を入れて置くらしい

錠の下りた大きな箱が眼に映つて見えた。

滞在客を除いた他の泊り客は、もう大抵支度をして勘定をして立つて行つたらしかつた。『御機嫌よう。』『お大事に。』などといふ聲が店の方から聞えた。

ちよつと出て來ると言つて置いたので、何處かに行つて來なければと思つたが、さていざとなると外出する氣にはなれなかつた。大勢人の歩いてゐる町中を、巡查なども歩いてゐる通りを、足跡を捜されてゐる場所を、うかうかと歩いては行けないやうな氣がした。それに金も持つてゐなかつた。かれは半ば喪心したやうにして、草履を突掛けて、長い前の廊下を、通りに面した方の角の所まで歩いて行つた。

その角のところからは、車やら荷馬車やら旅客やらの混雜した通りを隔てて、角の大きな女郎屋から奥深く稻荷の社に入つて行く廣い路が見えてゐた。初夏の朝日が朗かに照つて、大きい華表の向うに門、その向うに古風な社殿、その背後を塗つたこんもりとした杉の森の中には、暗い緑の葉の中に新しい緑葉がくつきりと際立つて鮮かに靡いてゐるのが見えた。華表の前には二三本幟がばたばたと朝の風に動いてゐた。

此方の門前の小料理屋の前では、赤い襷をかけた女が二人立つて何か頻りに話してゐた。かれはほんやりしてそれを見るときもなく見詰めてゐた。

二二三

一片附かたづいた時分、お雪は其處にその姿を見せた。

『もう手が明いた？』

『まだ、用があるにはあるんだけど……もうさつき起きたの？』

『もう、すこしさつき飯を食つたばかりだよ。昨夜は寝られなかつたもんだから……』

『お……』

お雪は莞爾と嬉しさうにしてゐた。

『誰かに知れやしなかつたかえ？』

『大丈夫ですよ。』

かう言つたが、『昨夜、考へたのよ……。昨夜言つたことは本當？』

かれは點頭いて見せると、

『屹度本當ですね。……それなら私もよく考へて置くから……そしてね、貴方が除隊になる時分、其方に行けるやうにして置くからね』

『うむ……』

『でも……貴方の父さんや母さんが何とか言ふかも知れないけども……』

『大丈夫だよ。……ぐづぐづ言へば、脇に出て了ふから。俺は家にゐなくつたつて好い人間なんだから。』

『さうですね……』嬉しさうにして、『本當ですね。今度こそうそを言ふと、一生恨んで恨んで恨みぬくから……』

『大丈夫だよ。』

『その積りでね、それぢやね、來年まで私も辛抱するから……』

かう言つたが、『何處かへ行つて來るんぢやないの?』

『うん、行つて來なくつちやならないんだけども……』

『そして、今日歸るの?』

『今日は何うだか……もう一晩泊るやうになるかも知れない。』かう言つたかれは、いつそ女にだけ話して了はうかと思つた。自分の重荷を、運命を……。しかし昨夜もさう思つて打明けることが出来なかつたと同じやうに、かれはそれを深く自分の胸の中に藏めた。尠くともそれを話して了つては、自分の實行しなければならぬある事の邪魔になるとかれは思つた。かれは一種の勇氣に似た戰慄を總身に覺えた。

それを隠すやうにして、『稻荷さまの祭禮の時は賑やかだらうね?』

『正月はそれは賑やかですよ。』

通りの方を向いて、『そこら、一杯に店が立つから……』

『馬市は何方でやるんだえ?』

『馬? 馬市は、『お雪は指して、『そら、華表の向うに、廣いところがあるでせう。あそこが一杯に馬市になるんですよ。それはその時は賑やかですよ。赤いんだの黄いんだの白いんだのいろ／＼な旗が立つてね……そして、私達が聞いちやわからないけれど、博勞衆達がわい／＼つて符牒を言つてね。……それに、お詣りが大變ですから……』

『忙しいだらうね、其時分は?』

『それは忙しいにも何にも、何んな室でもお客が三人や四人はぎつしり詰るんですから、それは目が廻るやうですよ。』

『ふだんの縁日は?』

『五日に十日。』

『その時も客が出るだらう?』

『少しは出ますけども……それはそんな忙しいほどでもない。』

二人は廊下の角のところであうして立話をしてゐるが、やがて、『お雪さん！』と呼ぶ聲が下でしたので、女はそのまゝ下へ下りて行つて了つた。

其後も猶ほやゝ暫く要太郎は其處にほんやりして立つてゐるが、ふとあることを思ひついたと言ふやうにその向うにある階梯のところを目を附けて、凝つと長い間それを見詰めてゐるが、そのまゝ歩を移して、ある見えざる力に引張られるやうにして、一步一步階段を三階の方へと登つて行つた。

三階と言つても、さう大して広いものではなかつた。廊下が矢張ぐるりと三方を廻つてゐて、六疊、八疊の間が一つ一つ並んでつくられてあつた。客は皆な立つて了つて、どの室も皆ながらあきになつてゐた。床の間に懸物がかけてあつたり置物が置いてあつたりした。ある室には、午前の日影が美しくさし込んで來てゐた。廊下の角からは前に聳えた山々に雲の白く颯つてゐるのが指さされた。

一間一間、見て行つた向うの角のところに、かれはふと隅にかくれるやうになつて四疊半の一間のあゝるのを見た。そしてその一間の此方の廊下の前には、三階で使ふ夜着や蒲團や枕や煙草盆や火鉢がごたごたと置いてあるのを見た。折れ曲つた階段は、さつきかれの上つて來たのとは丸で別に、それを下りて行くと、丁度かれの泊つてゐる一間の傍に出て行くやうになつてゐた。

ふと、下からバケツを持つた女中が上つて來た。

『あゝ重い！』

かう言つて、女中は水の八分目満たされたバケツを其處に置いた。それは知らない十八九の女中で、銀杏返に結つて、尻端折をして、下から赤い腰巻を見せてゐた。袖を後で結んで、白い兩腕を惜しげもなく出してゐた。

『三階は眺望が好いね。』

こんなことをかれは言つた。

『でもね、高くつて、掃除は厄介ですよ。水を持つて上がるのが大變でね。』

『それはさうだね。手傳つてやらうかね。』

『手傳つて下さいよ。深切があるなら……』

かう言つて女中は笑つた。かれも笑つて見せた。

『本當に大變だな。』ちよつと途絶えて、『しかし面白いこともあるだらうね。』

『何が面白いことなんかあるもんですか。夜は遅く寝るし、朝は早く起されるし、それに一日働いてさ……。夜になると、足が棒のやうになつて了ひますよ。』

かう言ひながらも、じつとしてはるすに、女中はバケツの水の中から、雑巾を出して、尻を高くして、元氣よく、此方から向うへと廊下を拭いて行つた。

『三階の番は君かね。』

『私ばかりでもないのよ。毎日順番があるから……』

かれは女中の雑巾がけをするのを見ながら、暫く其處に立つてゐた。ふと氣が附くと、其處からは、裏の畑——風呂場の背後になつてゐるらしい野菜畑が見えて、そこに此家の老祖母が三歳位になる子を背負つて、彼方此方と歩いてゐた。物干には赤い白い着物や足袋がかけて干してあつた。

やがてトントンと靜かに音をさせて、かれは階梯を下りて行つた。

かれに取つては、尠くとも、此家にお雪があるといふことが力でもあり生命でもあり、又氣懸りでもあつた。で、午前はたうとうかれは一步も外へ出ず、不安と懊惱と神経の動搖とある事を實行するに於いての妄想と、さういふものゝ中に、徒らに時間を過したが、しかし其間にも、時々はお雪の姿の髣髴を得たいと思つた。かれは剛に行くにつけても、そこらぶら／＼するにつけても、其處にお雪の姿が見えやしないかと思つて目で搜した。ある時はお雪が他の女中と何か話してゐるところを發見して、その傍を通つて行つた。目と目で話をした。ある時は風呂場の傍でお雪がせつせと働いてゐるのを見た。晝飯の時には、氣をきかせて、お雪が膳を運んで來た。

二十四

午後三時頃、旅舎の浴衣を着た要太郎の姿が、稻荷社の門前町から、大きな華表の方へ靜かに歩いて

行くのが見えた。『お入んなさい。お休みなさい。』といふ聲が喧しく兩側からきこえた。

初夏の晴れた好い日であつた。風といふほどの風もなかつた。午前と違つて、新緑の葉はその鮮やかさと美しさをいくらか減じてゐたけれども、それでも空氣が澄んでゐるので、碧い空との對照が、美しく人の顔に照り榮えた。物がすべて明るく浮き出すやうに見えた。華表も、門も、社殿も、兩側に並んでゐる家も、參詣に出かけて行く人達も、何も彼も……。

華表を入らうとすると少し手前の右側に、茅葺の、ちよつと見ると小屋のやうな家が二軒並んでゐて、其處に同じやうな婆さんが二人、稻荷のお狐様に供へるための鶏卵と油揚とを、頻りに參詣者に勧めてゐた。

『油揚と玉子は入りまへんかね。お狐様に上げる油揚と玉子！』

かう言つては、人が通る度に、出て來て勧めた。

二人とも五十から六十位の婆さんで、純乎たる田舎者で、髪を後に丸く束ねて、汚れた着物を着て、繩のやうな帯を緊めて、しかも二人とも競争者であるかのやうに、『お狐さまに上げる油揚と玉子！』を連呼した。

ちよつと他から聞いてはわかり兼ねるやうなひどい田舎訛で、『お狐さまな、な、油揚を上げると、えらう喜ばつしやるでな。きつと御利益のうあるで、な、な、一杯、買つて上げつしやい。』と、かう言つ

て二人は参詣者の袂を取らぬばかりにした。

『一籠十錢！ 一籠十錢！』

かう呼ぶ聲が遠くから聞えた。

さうかと言つて、この婆様達は、油揚と玉子ばかりを賣つてゐるのではなかつた。店にはいろいろ煮染だの、鰯だの、芋子だのが皿に盛つて並べて置いてあつて、一寸休んで一杯飲めるやうにもしてあつた。そして祭禮の時は、この狭い小屋が田舎の百姓の爺や婆で一杯になつた。従つて稻荷の婆さんと言へば、土地でも誰知らぬものではなく、昔から金の儲かる好い株になつてゐて、婆さんが死ぬと、その位置は、町の婆さん達の大きな競争の的になるのが常であつた。そしてこの慣習はかなり古い昔からつゞいて來てゐた。狐に供へる油揚を賣るその婆さん達と言へば、その流行神の稻荷での一つのカラアにまでなつてゐた。

要太郎が通ると、婆さん達は油揚と玉子の入つた籠を競つて持つて出て來て、わからないひどい田舎訛の言葉を霞のやうにかれに浴せかけた。

『御利益があるでな、な、一つ買はしやれ！ 上げなされ！』

『お狐様が喜ばつしやるで、な、な、』

一人の婆さんは、執念くかれに絡り着いて勧めた。

『二籠十錢！ 一籠十錢！ お賽錢を上げたと思はつしやれ！』

一文も金といふものを持つてゐないのにも拘らず、要太郎はその一人の婆さまの勧める油揚と玉子の入つてゐる籠を無理やりに持たせられた。

しかしかれはほんやりしてゐた。一面には何うともなれ！と言ふやうな心持が首を擡げてゐた。で、かれは平氣で、押つけられた一つの籠を取つて、それを手に持つて、大きな華表の中へと入つて行つた。『歸りに寄らつしやれ。』後からかういふ婆さんの聲がきこえた。

小さな籠を持つて一步一步社殿の前の門の方へと歩いて行く要太郎の姿は、午後の日影の明るい中にくつきりと見えてゐた。あたりにはさう澤山参詣者はなかつた。田舎の爺婆が一人二人歩いてゐるばかりであつた。廣い廣場には新緑が美しく靡いて光つた。

大きな門——それは古風な典雅な建築で、何でも七八百年をその儘経過したといふので有名であつた。要太郎の姿は、やがてその門のところに見えた。かれは籠を持つたまゝそこに立留つて、梁を見たり長押を見たり彫刻を見たりしてゐた。しかし、かれはそれを注意して、又は興味を持つて見てゐるといふのではなかつた。かれは唯ほんやりとして立つてゐた。かれの眼は心は、外部よりもかれの内部に向つて鋭く開かれてゐた。

籠を供へるところは、丁度社殿の裏の方になつてゐた。そこには十八九の少年が袴を穿いて、それを

供へる参詣者の來るのを待つて、一々奥の神前に供へるべくそれを受取つた。要太郎も其處で籠を渡した。

それからかれは大きな社殿の方に歩いて來た。かれは別に神に祈念するでもなく、そこにかゝつてゐる大きな鈴を鳴らすでもなく、唯ちつと喪心したものゝやうに四邊を眺めて立つてゐた。その間にも、参詣者が二三人來ては鈴を鳴らして行つた。

要太郎の姿は、其處に立つたまゝ、暫く動かなかつた。お詣りして歸つて行く参詣者も、其處を通つて行く神官の白衣姿も、庭に綺麗な箒の目を立て、掃除してゐる爺さんの姿も、何も彼も全くかれの眼には映らぬやうに見えた。始めはかれは立つてゐるが、暫くすると蹲踞んだ。そして又同じやうにぢつとしてゐた。

参詣者の鳴らす鈴の音が絶えず聞えた。

しかし三十分ほど経つた後には、かれの姿は、今度は門の中を通らずに、その傍の廣場に添つて、ぶらりぶらり歩いて戻つて來るのが見えた。旅舎の浴衣の袖と裾とが靜かに動いた。

華表を出ると、

『お歸り、お歸り、休まつしやれ、休まつしやれ！』

かう言つて、さつきの婆さまがそのまゝ、かれを其店に引張り込んだ。

かれは婆さまの言ふなりにして、その小さな店の中にある古い長い腰掛に腰をやすめた。

『好い天氣だな、もし……御参詣には何よりだな、もし。』

かう言つて丸い小さな火鉢を其處に持つて來た。

かれは昨日巻煙草の最後の一本を吸つてから、全く煙草を吸はなかつた。で、『煙草はあるかえ、』と言つたが、無いと言ふので、づか／＼立つて行つて、『一服、おさき煙草だ。』かう平氣で言つて、婆さまの吸つてゐる煙管と煙草とを持つて來て、それを一服つめて旨さうに鼻から出して吸つた。つゞけてもう一服吸つた。

かれは四邊を胸してゐるが、其處に並んでゐる徳利と、皿に盛つてある煮染とに眼を付けると、もう堪らなくなつたと言ふやうに、

『お婆さん、酒があるな！』

『一本つけやすか、へえ、かしこまりやした。』

婆さんが後向きになつて、大きな壺から片口にゴト／＼音をさせて酒を出してゐるのが此方から聞えた。その音が要太郎には何とも言へぬ快さを與へた。やがて婆さんはそれを爛徳利にうつしたらしく、傍に置いてある古風な茶釜の蓋を取ると、湯氣がぱつと白く薄暗い家の空氣の中に颯つた。爛徳利を入れる氣勢がつゞいてした。

『お菜は何にすべかな。』

『何があるな。』

『鯛に、焼豆腐に、芋位なもんだ。』

『鯛と焼豆腐くれや。』

暫らくして、小さな盆に徳利と盃と鯛を入れた皿とを載せて、箸を添へて持つて来た婆さんは、

『お前さん、兵隊さんかね？』

『何うして？』

要太郎はぎよつとした。

『さうだべ？』

『……………』

『俺の眼で見れや間違ひこはないだからな、えらかんべや。』笑つて見せて、『だつて、すぐわからアな。頭のところ、黒く白く筋がついてゐらアな。胸がしやんと張つてゐらアな。兵隊さんツて言ふことは一目でわかるアな。』

『さうかな。』

かう言つてかれはいくらか安心したやうにして、手酌で酒を盃に注いで、そしてぐつと飲んだ。アル

コオル性の強い刺戟が體と心とに染みるやうな氣がした。

『相馬屋かな。宿は——？』

婆さんは又笑ひながら訊いた。かれは點頭きながらまた一杯ぐつと飲干した。動搖し、麻痺し、混亂した頭がいくらか恢復して、萎えた勇氣が次第に頭を擡げて來た。

『相馬屋はい、宿だな。』

『さうだな。』

『何うしても古いだで……昔からある宿だべ。俺が祖母さまの時代からあるだで、な、深切だな。』

かれは何の彼のと言ひかける婆さまは相手にせず、一杯一杯と盃を重ねた。段々體がほてつて來た。熱い熾な血が脈から脈を流るゝやうな氣がした。折々參詣者が通る度に、婆さんは例の籠を持つて、『油揚と玉子』を連發して、その傍について行つた。隣の婆さんも負けぬ氣になつて參詣者に縋り附いて行つた。

『婆さん、もう一本呉れや。』

『お代りかや。』

かう言つて、婆さんは更に支度して置いた別の徳利を茶釜に入れた。要太郎はどす赤い顔をして、鋭い眼附をあたりに放つて、そつとぬすむやうにして、皿の中の焼豆腐を挾んで口に入れた。

『兵隊さん、今日来たんけ。』

婆さんは又話し懸けた。

『いゝや。』

『お暇でも貰つて来たんけ？ さうけえ？ つらいッてな、兵隊さんは！ 俺が甥が今一人行つてゐるが、来る度に、雑巾掛が辛いッてこほして行くだよ。あんじよさうしたことをするか、同じ人間だアにッて言ふこんだがな。これもな、規則だッて言へばしやうがねえがな。』

『何アに辛いッて言ふこともねえけども……』わざと落附いた調子で要太郎は言つた。

『戦争さ、行つたけ？』

『行つた。』

『えらかつたんべな。玉ア来るッてな、頭の上さアへ……』

『それは來るとも……』

『おつかなかんべな。生きた空はあんめいな。』考へて、『俺が出た村で、騎兵でな、林清太郎ッて言ふんが、戦死したがな、知らねえかよ。』

『知らねえ。』

『大勢るんべからな。』

二度目に持つて來た徳利を空にする頃には、かれの體には、もうかなりアルコール性の持つた力が溢れて來てゐた。顔も、胸のところもわるく赤く、眼は鋭くあたりを見廻した。『さうだ。それより他に路はない。自分の出て行く路はない。さうだ。勇氣を鼓してそれを實行するに越したことはない。戦争に行つて、斥候に出たと思へば、こんなことは何でもない。盗むとか何とか言ふなら、ドヂを組むと發見される恐れがあるけれど、さうすれば知れつこはない。さうして金を得る……その金さへあれば、何んなにでもして逃げられる。ちやんとお雪に打合せをして置いて逃げられる。そして人の知らないところに行つて、名を變へて了ふ。分りつこはない。お雪だつて、何もこの近所にまごくしてゐなくつても好いんだ。……さうだ、それに限る。よし、屹度實行しよう。』かれはキツと一ところを見詰めるやうにした。

で、最後の一杯を、深く物を考へるやうにして飲み終つたが、急に、かれは懷だの三尺帯の間だのをさがし始めた。袖のない袂のところへも手をやつた。

『おや——』

婆さんは此方を見てゐた。

『おや——』立上つて、周囲を見廻したり何かした。

『何うしたな？』

かれは首を傾けて、『おや、忘れて置いて來ちやつたかな。持つて來たと思つたがな。』かう言つて、『落ちるわけではないが——』

『何だな？』

『財布だがね……確かに持つて來たと思つたんだが。……さては忘れて來たと見えるな。さうだ、床の間に置いて來ちやつたかも知れねえ。』わざと笑つて、『大變だ、勘定が出來ねえ。』

『そこらへ落したんぢやねえけ？』

『落すわけがねえ。』念の爲めといふやうに、もう一度そのあたりを見廻して、『困つたな。』

『何アに、宿がわかつてゐるで、好いやな。』

『さうだな、氣の毒だな。これア、えらい恥かきだ。ぢや、すぐ届けてよこすからな。たしかに持つて來たと思ふんだがな。』もう一遍さがして見て、『矢張、忘れて來たんだ。』ちよつと考へて、『それでいくらだな勘定は？』

『酒が二本に、鰯に焼豆腐……それに油揚、』婆さんは胸算用をして、『四十二錢になるべ。』

『それぢや、すぐ届けるから、……それに、まだ今日は一日泊つてゐるで……。本當にえらい恥かきをした。』

かう言つて平氣でかれは其處を出て行つた。

此方から行く參詣者に、『油揚に玉子、お狐さまに上げる油揚……』と勧める婆さんの聲が後でした。

二十五

自分の運命——ゆくりなく陥つて行つた不思議な重苦しい辛い自分の運命を愈々切り開かなければならない時期が到達したことをかれは思つた。風呂に入つてゐる間にも、廁に行つてゐる間にも、廊下立つて今日もまた靜かに穩かに暮れて行く夕日の山々を眺めた時にも、鳥渡の間を得てお雪と話してゐる間にも、その運命が絶えず體と心とに執念く絡み着いてゐて、それを決行して了はない中は、飯も碌に咽喉に通らず、話も落附いてしては居られず、すぐ其方に頭が引張られて行つて、自分で自分の體が自由にならないやうな氣がした。自分ながら何うしてかう突詰めたか、何うしてかうその恐ろしいある物に捉へられたか、何うしてその決行といふことに引張られて行つたか、自分でも自分がわからなかつた。をりくかれは立留つて、その決行當時の光景を頭に浮べるやうにした。それに、帳場の隣にある金の入つてゐる箱が、何處に行つても——店頭に入つて來た時は勿論、室にゐても、廊下にも、誰かと話してゐても、衝動的にすぐかれの眼から頭へと映つて行つた。人々の騒ぐ中に、それを取出してゐる自分が、手傳ふ振りをしてそれを表へ持ち出してゐる自分が、紙幣やら銀貨やらを取出してゐる自分が歴々と眼に見えた。

時には、豫めその目的物を更に正確に見て置かなければならないと思つて、素知らぬ振りをして、一度ならず二度までもその店先に下りて行つた。古い帳場、算盤、大福帳、老婆の姿、その白髪の老婆が何故かかれの氣にかゝつた。帳場の隣にある金庫に似た箱、大きな錠のかゝつた箱、その上のところには大きな廣告の美人畫が下けてあつた。主人と番頭とは何か其處で頻りに物勘定をしてゐた。二度目に下りて行つた時には、丁度其處に客が二三人來て、『入らつしやい、』と言つて、人達は其方に氣を取られてゐた。で、ほんやり立つて見てみると、其處にゐた一人の女中が、『お出かけ。』かう言つてかれの傍に寄つて來た。『いや、ちよつと湯を持つて來て貰ひたいと思つて……』かう言つてかれはごまかした。

室やら、庭やら、裏の方やらをもつと見て置かなければならないと思つたかれは、二階三階の廊下をぐる／＼歩いた。しかも成たけ人目に觸れることを恐れて、客がゐたり婢がゐたりするところは急いで何か用事でもあるやうにして通つた。庭から下駄を穿いて向うに行つた時には、木戸を明けて裏の畑の方まで行つた。廊下から裏へと出て行く扉のあることをもかれは見つて置いた。野菜畑の向うには井戸があつて、そこで體の大きな下男が唧筒仕懸の奴でせつせと風呂に水を入れてゐるのを見た。もう火を焚きつけたと見えて、青く白い烟が屋根の上の烟突から細々と颯つてゐた。その向うでは、家の男の兒らしい十二三の少年と七八歳の女の兒とが遊んでゐた。

奥の箆筒の置いてある方も見たいと思つたけれど、流石に人目が繁くて、其處まで入つては行けなかつた。

でも、其處の一部の見える廊下と店との間のところへは、かれは度々其姿を見せた。

お雪とはまた廊下でちよつとこんな話をした。

『歸つたら、屹度手紙はちよいちよい下さいよ。』

『あゝ。』

『本當ですよ、でない、心細くなつて了ひますから。』

『あゝ。』

かう言つて、『今日はいそがしいかえ？』

『さう忙しくもない……でもね、』お雪は急に聲を低くして、『昨夜は變に思はれてね。』

『何うして？』

『はつきりとわかりやしなかつたけれどね、寢たと思つた女中が起きてゐて、知つて、ね。』

『何う？』

『お雪さん、來たのは今朝だつたね、なんて言はれつちやつた。』

『でも、本當には知れやしないんだらう？』

『それや、わかりやしないけどもね、』かう言つて、『でも、今日も種々考へたのよ。……とても一緒に
はなれないかと思つて、……一緒になつても好いんだかわるいんだかわからなくなつちやつた。』

『大丈夫だよ。』

其處に人の來る氣勢がしたので、慌ただしくかれ等は別れた。

かれは室の中にあることを恐れた。何故かと言へば、それは其處に昔の生活と昔の記憶とがいつも蘇つてかれを威嚇するからであつた。脱いで長押にかけたまゝになつてゐる軍帽と軍服と、劍、それが一番先にかれの眼に着いた。かれの踏込んで來た最初の一步は其處にあつた。淺瀬からだんく深い淵に入つて行くかれの罪惡は其處にあつた。今ではもう其處から脱け出すことが出來なくなつてゐるが——脱け出さうとしてもとても脱け出せなくなつてゐるが、それでもそれを見ると、一昨夜からのことが一つ一つ眼の前に浮んで來て、堪へ難く心を不愉快にした。不安と恐怖とがすぐかれを襲つて來た。

また日が暮れて行くのであつた。三日目の日が、人間の世の中にかういふ不安と罪惡とがあるのを少しも知らないやうな日が、穩かな靜かな日が、荷車の音と馬車の喇叭の音と美しい山々の深い碧とを背景にした田舎の日が。

かれはちつとそれを眺めながら、廊下の角のところに立つてゐた。理由なしに、涙がこぼれて來た。自分を可愛がつて呉れた老いた祖母の皺くちやな顔が見えた。家出をした時の朝のやうに泣いて泣いて泣き崩折れなくなつた。

二十六

女の下りて行く氣勢がした。

その足音は折れ曲つた階梯を下りて、靜かに靜かに向うへと行つた。もう聞えなくなつたと思ふ頃でも、まだそれがはつきりきこえてゐるやうな氣がして、かれは床の中に半ば身を起して、耳を聳てた。

女が女中室にこつそり寢に入つて行くさまがありくと見えた。深夜の寂寞は既に一面にあたりを領して、少し吹き始めたらしい風の外は何の音もきこえなかつた。かれは續けて耳を聳てた。

キウキウといふ音がした。久しい間、かれはそれが何だかわからなかつた。樹の庇に觸れるやうな音でもあり、また誰か寢息を立てゝゐるやうな音でもあつた。かれは暫しそれに耳を傾けた。しかし、それは自分のある事を決行するに就いての何等の障礙でないといふことを判斷して、かれはつとめて心を平靜にしやうとした。かれは枕元の時計を見た。

二時半を少し過ぎてゐた。

兎に角皆な寢靜まつて了ふまで待たなければならぬと思つた。今歸つて行つた女の寢靜まるのも……

しかし都合は好いと思つた。今夜は三階には、客が一人向うの遠い方の室にゐるばかりであつた。二

階には三組ほどのるが、それとて邪魔にはならなかつた。首尾よく行けば、三階に一人ゐるあの客に罪をなすつて了ふことが出来るかも知れなかつた。それにかれの選んだ場所の隣りには、寝道具やら煙草盆やら火鉢やらが置いてあつた。さういふ所から起つたやうに人に思はせることも出来た。

かれは蒲團の上に身を起して、その前に置いてある時計の針を眺めた。もう廿分過ぎた。あと十分経つたら、疲れてゐるので女も大抵寝て了ふであらう。ふとかれは薄暗くついたランプの石油の壺のところに眼をやつた。石油は十分にある。大丈夫だと思つた。

又五分経つた。

かれは又耳を聳て、見た。キウ／＼といふ音はまだしてゐるけれども、他には何の音響もなかつた。事に臨んで案外冷靜であるかれの性質の冷靜が、力強くかれの全身に漲つて來た。かれは一種の力強さを感じた。戦争で斥候の任務を帯びて、深夜敵の中に入つて行つた時のことなどが思ひ出された。『決行』かう思つてかれは立上つた。

先づマッチを懐に入れて、それからランプをフツと吹き消した。と、あたりは闇になつたが、眼を定めて見ると、二間三間隔てた客のゐる間についたランプの光が微かにそこに來てゐるので、さう眞暗な闇といふほどではなかつた。かれは消したランプの笠を外し、半分位残つてゐる石油の入つた壺だけを持つて、そしてすつくと立上つて、三階の階段の方へ出て行く隅の障子をそつと細目に明けた。

ソツと身を外へ出した。

音のしないやうに、あたりが軋まないやうに、拔足して、一步々々三階へ登る階段の下のところへと行つた。そこは何處からも灯が來てゐないので、眞暗であつた。かれは却つてそれを心安く思つた。かれは手さぐりで、階段を上つて、上りきると其まゝ右の室に入つた。

南の隅の一間に客が一人ゐる筈である。それに知れてはと思つて、かれは屹立耳をして暫しじつとしてゐた。しかしあたりはしんとしてゐる。些の物音もない。それに此室は、壁の陰になつてゐるので、南の一間から來る灯の光も見えない。かれは猶ほ闇の中に立盡した。自分の今犯さうとしてゐる罪惡を反省する心と、躊躇逡巡する態度を罵る心とが兩方から強く押寄せて渦を卷いた。かれは自己の體も精神も顛倒して了ふやうな氣がした。しかしそれも瞬間であつた。かれは思ひ切つて、手に持つたランプの壺の石油を半ば疊の上に明けて、そつとマッチをすつた。光線が蒼白い昂奮したかれの顔を照した。二本目にすつたマッチの火は忽ちこぼした石油へと移つて、見る／＼蛇の這ふやうに一面に燃えひろがつた。闇は急に明るくなる。障子の棧の目や、半間の床の間や、ちがひ棚や、さういふものが浮出すやうにはつきりと見える。かれは急に不安になり出した。かれはいきなり石油の半分残つたランプの壺を火の上にひつくりかへすとそのまゝ、急いでもと來た階段を下へと下りた。

自分の室に入りかけて、また思ひ返して、かれはもう一度階段のところに行つて上を仰いで見た。上

は一面に明るくなつてゐる。火は障子に燃えついたらしい。

再び自分の室に入つたかれは、そのまゝ床の中に入つて、夜着を頭から冠つた。じつとしてゐた。胸がドキドキした。實行したその時よりも却つて今の方が精神が戦慄するやうなさまを感じた。じつとしてゐられないのを強ひてじつとしてゐなければならぬ苦痛をかれは渾身に覺えた。

三階では盛に火が燃えてゐるらしい。三階の階段からかけて此方の方の障子も明るく照されて見えてゐる。しかしまだ誰も騒ぐものがない。皆んな知らずに眠つてゐるらしい。三階に一人ゐる客も知らぬらしい。『もう大丈夫だ。あのランプの壺も焼けて了ふ。あとに罪跡の何者をも残さない。大丈夫だ、もう大丈夫だ。』かう思つたかれは、人が騒ぎ出したら、適宜に下に下りて行つて、その計畫を成功させなければならぬと續いて思つた。

『火事だ、火事だ！』

といふ聲が戸外からきこえた。

つゞいて戸を明ける音がする。『火事だ、火事だ！』といふ聲がする。近所が俄かに騒がしくなる。戸を明けたり閉めたりする氣勢がする。内よりも却つて戸外の方に急にガヤガヤと騒ぐ音がした。しかしこれも暫くの間だ。今は内でも起きたらしく、『大變だ、大變だ、三階だ？』と言ふ聲がする。ばたんと大勢の駈けて上つて来る音がする。聲を限りに叫ぶ聲、つゞいて水を呼ぶ聲、中には女の金切聲で何

か言ふのも雜つてきこえた。

急に三階から向うの階段を慌て、客の下りて行く氣勢がした。

もう長押から、天井、屋根へと火は燃えて行つたらしかつた。晝のやうに明るくなつた光線と共に、かれは次第に火の烟の咽るやうに室内に入つて来るのを覺えた。かれは急いで起上つた。そして、始めてそれと知つて慌てたものゝやうに、わざとけたましく音を立て、二階の折れ曲つた階段を下へと下りて行つた。

『もう、駄目だ！』

大童になつて向うから駈けて來た番頭が言つた。

『駄目か？ もう……』

狼狽した主人は、寢卷のだらしない風をしてすれ違つて行つた。

半鐘が深夜の眠を驚かして、けたましく鳴り始めた。

誰も彼も皆んな起きて、ぶるぶる身をふるはして慌て廻つてゐるのをかれは見た。女中も番頭も下男も、何も手がつかないで、うろくしてゐる。氣丈な婆さんは、きよとくとしてあたりを見廻してゐる。『提灯、提灯！ 何より先に提灯！』かう言はれて、女中の一人は長押から高張提灯を下したには下したが、手足も齒の根もガタノと震へて、一つの蠟燭を點火するにすら容易でなかつた。急いで、

大童になつて下りて来た主人は、『駄目だ、もう駄目だ。出せるだけ荷物を出せ！』かう大きな聲で呶鳴つた。

町は既に騒ぎ出してゐた。俄かに半鐘の音に深い眠をさまされた近所の大勢の人達は、『群を成して通りに集つて来てゐた。今しも、三階の屋根に抜け出した凄じい紅い焔は、怪物が舌を出したかのやうに高く高く燃え上つて見られた。黄い赤い褐色の煙が燃える火を包んで、稻荷の社の門前町を晝のやうに明るくした。

風がいくらかあるので、火と火焔と煙とは、裏の方へ方へと靡いて行く。大きい小さい火の子は、無数の螢火を散らしたやうに盛に空に舞ひ上る。町にある半鐘といふ半鐘は、すべて凄じく鳴りわたる。近所の家々の慌てふためく氣勢、水を連呼する聲、群集のわい／＼騒ぐ聲、さういふものがあたりに凄じく漲り渡つて聞えた。

『おい、退け、退け！』かう言つて提灯を振り翳して、群集の中をわけて相馬屋の店先に入つて行つたのは、この分家で、停車場に店を出してゐる主人の弟とその二三の番頭とであつた。入つて行つた弟の眼は、此處の主人と番頭とが慌てふためいてま／＼してゐる傍に、浴衣を着た客らしい男が立つてじろ／＼とあたりを見廻してゐるのが映つた。弟は呶鳴つた。『兄貴、早く肝心なものを出さんといかんぜ。』

『ヤ、来て呉れたか。頼むぞ、一番先に、此處だ。』

かう言つて、主人は帳場の傍の三尺の押入の方を指した。『よし、よし。』弟と番頭とは、それを明けにかゝつたが、此時、傍に立つて見てゐた要太郎は、『何れ、俺も手傳つてやらう。』かう言つて急いでその傍へと近寄つて行つた。

その押入の中には、小さな用箆筒やら、錠のかゝつた大きな金箱やら、必要なものゝ入れられた大きな箱などが入つてゐた。弟は一番先に用箆筒を出して、つぎに金箱を出したが、『兄貴、お前さんは何にも出さんでも好いから、肝心なものを置いたところに、ちやんとついてゐなくちやいかん……』

『よし、よし。』

主人はかう言つて、金箱と用箆筒とを運び出す番頭達のあとについて行つた。要太郎は其方の方にちよつとついて行つたが、すぐ引返して、さも頼りになる手傳人のやうに、『出すものがあるなら、言へ、出してやるから、』と叫んだ。

主人の弟の眼には、見知らない蒼白い眼の鋭い顔が映つたけれど、さうした深切な手傳人を疑つて見るやうな餘裕もなかつたらしく、そこに葛籠や行李を出すと、その男はそのまゝそれを表の方へ運んで行つた。

さうかうしてゐる中に、町の彼方此方から、不時の災難に援助に向つた人達が、大勢店の中へと入つ

て来た。奥からも、箆筒や長持や鏡臺や葛籠や、さういふものが頻りに運び出される。婆さんと子供達と女達は、危ないと言つて、既に餘程前に表と裏の方へ避難させられたが、主人と上さんとは、それでも家具の搬出の指圖をしなければならぬので、奥と店との間を往來して、頻りに手傳ひに來た人達に聲を懸けた。かと思ふと、不意に肝心なものを思ひ出したやうに、「あの箆筒！ あの箆筒も出さなければ！」かう言つて上さんは奥に駆けて行つた。

要太郎はうろ／＼と彼方へ行つたり此方へ行つたりした。二三度金箱、用箆筒のある處へ行つて見たが、其處には番頭が一人嚴重に番をしてゐて、容易にその鍵を破つたり何かする隙もなかつた。一度はそつと後へも廻つて見たが、それでも何うすることも出来なかつた。で、引返して、今度は奥から運び出して來る道具類に眼を附けながら、手傳の人々の群に交つて、自分もその一人であるかのやうに見せかけつゝ、奥の方へと入つて行つた。晝間、好加減に研究はして置いたものゝ、かう混雜した状態の中に入つては、流石のかれも何うすることも出来なかつた。生かなものに目を呉れて、自分の犯した罪惡を疑はれはしないかといふ懸念もかれの敏活な行動の邪魔をした。

此時には、火は既に三階から二階へと凄じく燃え移つて、折り廻した雨戸が烟と火とに包まれてメリメリ焼け落ちて行くのが大通りから手に取るやうに見えた。二階の欄干のところにある大きな梧桐の葉の焼け爛れたのも火を透してそれと指さゝれた。町のポンプは、此時既に、二臺、三臺までやつて來て、

一臺は女郎屋の井戸に、一臺は門前の料理屋の井戸にそれを仕かけて、ヅツクの太い丸い管から水が高く迸出して行つてゐるが、その二本の管の水位では、燃えさかる火は何うすることも出来ないやうに見えた。隣り近所、わけても風下にある家の屋根には、消防に上つてゐる人々の姿が黒く浮き出すやうに見えて、近いところには、火の子の散亂し、黒烟の渦巻く中に、消防の纏の不動の態度を示して立つてゐるのがそれとはつきり指さゝれた。

『もう、一臺、東にかけろ！ まご／＼すると、隣へ移るぞ！』

かういふ命令の下に、今しも其處に到着したポンプの一臺は、向側に行つて、細い巷路の中に井戸を發見して、瞬く間にそれを仕かけたが、そのヅツクの水管からは、やがて水が迸るやうに風下の火焰の方へと向つて注がれて行くのが見られた。

『おい、おい。』

かう消防の指揮官は言つた。

遮るものなき平野の町の深夜の火事は、二三里の周圍の人達の夢を驚かしたに相違なかつた。或は山裾のさびしい村、或は海岸に近い静かな田舎、或は街道に添つた二三軒の家屋、昨日かれの通つて來た桶屋のある町あたりでも、皆な寢惚け眼をこすりながら雨戸を明けて見て、乃至は街道へ出て見て、『町は火事だ、』など、言つてゐるに相違なかつた。或はこの西の山奥の半腹にある大きな温泉宿からもこ

の夜の火事がはつきりと指さされてゐたかも知れなかつた。町に近いところに住んでゐる人達は、「稻荷さんぢやねえかな。見ろよ、あの黒く見えてゐるのが、お稻荷さんの森だんべ。……お稻荷さんでねえにしても、あの門前にちがひねえな。……あそこは、小料理屋があつて、だるまなんかあるとこだ、粗相でもしたんだんべ。」かう言つて、明るい火を仰いで噂した。

丁度其時、通つて行つた夜行の汽車の窓からは、さもくめづらしい見物だと言はぬばかりに、睡眠に落ちてゐるものも、眠りからさめて、皆な右の窓から顔を出して、すぐ近くにある黒い杉森を隔てた火事を眺めた。火は盛に燃え上つた。火焰のをりく渦巻き上るものもはつきりと見えた。「近いな、すぐそこだ。」かう言ふものもあれば、「かなり大きな家だと見える。中々よく燃える。」など、言ふものもあつた。停車場には、驛員が灯の下で依然として平氣で事務を執つてゐたけれど、それでもあたりは何となく騒々しかつた。停車場の前を大勢の人が駆けて行つたりした。乗客の一人が車掌を捉へてそれを訊くと、「稻荷の前の旅籠屋ださうです。」と教へた。夜行の汽車はやがて出て行つた。汽車の進むにつれて、その火は次第に遠くくなつて行つた。「火事はやけ太りつて言ふが、さうばかりでもねえだ。火事のために散散になつたものもあるだでな。」などと同情したらしい口吻で或る乗客は言つたりした。それも次ぎの驛に來た時分には、天末がほつと赤くなつてゐる位で、誰の頭からも既にその火事の印象は薄らぎつゝあつた。乗客達は時計を見たりして、再び眠る支度をした。

稻荷の境内にも、種々な人々が集つてその火事を見てゐた。火の反射の光で、廣場も、樓門も、社殿も、社務所も一面に晝のやうに明るかつた。祭禮の夜でもあるかのやうに、人がぞろぞろと通つた。社殿の前のところには、官司や禰宜やその家族などが見てゐた。「相馬屋は古い家だがな、何うして火事なんか出したかな。粗相かな。あそこは評判が好い家だから、他人から恨みを買ふやうなことはない筈だが……。それに、百年以來ある家だ。惜しいことをした。」かう年を取つた禰宜は言つた。

晝間要太郎に酒を飲ませた油揚を賣る婆さんも其前に出て見てゐた。その皺くちやな顔が赤く火に照されてゐた。「昨夜とりに行けや好かつた。あの兵隊も焼け出されて困つてゐるべ。」など、思ひながら、じつと立つてその二階の焼け落ちるのを見てゐた。そこにもう一人の方の婆さんがやつて來た。

『何年ツて、火事アなかつたに……』

『ほんだ……』

『えらい騒ぎだ。』

『相馬屋の婆さまも困んべ。』

など、噂した。

門前では何處の家でも、前に高張の提灯がかゝけられてない家はなかつた。見舞の人々は、家から家へと歩いて行つた。肩と肩とがすれるやうに人々が群集した。通りには、ポンプのズツク管から洩れた

水が其處此處に流れて、雨上りか何ぞのやうに路がぐちやくした。『でも、下火になつた。やつぱりポンプは豪いな。あれが来てから、ぐつと火が弱くなつた。これぢや、まア、二三軒ですみさうだ。』こんな話をしてゐるものもあつた。『俺ア、又、何うすべと思つた。火事だ！ ツ言ふんで起きて見ると、相馬屋の三階から火がほん／＼ふき出してゐるぢやねえかね。うつたまけたにも何にも……』

『何うしてまア、三階なんかから出たかな。』

『女中か何かの粗相だべな。』

かういふ會話が其處此處で取交される時分は、火はもうすっかり下火になつて、三階、二階、それから下へとすつかり焼け落ちて、その裏につゞく二三軒の家の半ば焼けて烟と餘焔との中に立つてゐるのが見えた。大黒柱は眞赤になつて、まだ倒れずに半ばそこに立つて燃えてゐた。巡查が劍を鳴らして彼方へ行つたり此方へ來たりした。一臺のポンプ管からは、未だに水が餘焔に向つて勢ひよく迸出してゐた。

『傍に寄るんぢやない！ そばに寄るんぢやない！』

かう言つて、巡查は近づいて來る人々を制した。

もう午前四時を時計は過ぎてゐた。鎮火の半鐘がところ／＼で鳴つた頃には、明けの明星が既にきらきらと黎明近い東の空に輝いてゐた。

二十六

朝が來た。

靜かな晴れた朝だ。昨夜の騒ぎは、あの凄じい火災は、あれは夢であつたかと思はれるばかりであつた。雨上りのやうにグチャ／＼した通りには、人はまだ大勢通つてゐたけれども、一珍事、一現象に向けられた興味が、既に大半は人々の頭から離れて去つたかのやうに、または町の事件がいつか一家の事件に移つて行つたもの、やうに、別に狼狽したり驚いたりするやうな様子もなく、靜かに、落附いて、唯單に一現象の跡を見るときふやうにして歩いてゐた。燒跡には焼け落ちた柱やら長押やら梁やらが縦横に散亂して、黒くなつて、まだぶすぶすと燻つてゐた。大きな大黒柱は、半分ほど残つて立つてゐた。

薄白い乃至は灰色をした烟がうつすりと朝の明るい光線を受けて、一ところは焦茶のやうな色をあたりに漲らせた。そしてそれを透して、昨夜騒いだ人達が尻端折をしたり鉢巻をしたりして運び出した家具の周圍を歩いてゐるのが見えた。庭であつたあたりには、梧桐の葉が焼けたゞれ、形の好い松が半ば焼け、裏の野菜畑の野菜が夥しく無残に蹂躪られてゐるのも見えた。野菜畑の向うの二階屋は半分焼けて下がすけて見え、此方の平屋は人が上つたり何かしたので、瓦が一面に無残に碎けてゐた。何も彼も夜の騒ぎの跡を示してゐないものはなかつた。

近所の子守が子供を負つて、頭髮を手拭で巻いて、そこらをぶらぶら歩いてゐたりした。其處に、何處から來たともなく、要太郎の姿がひよつくり現はれた。かれは旅館の浴衣を着てゐた。そしてその浴衣は處々泥を帯びてゐた。

かれは蒼白い昂奮したやうな顔をして、細い露地から出て來て、通りの方へと靜かに歩いて行つた。かれも亦跡を見ずにはゐられない一人であつた。跡を、恐ろしい騒ぎの跡を、自分の犯した罪惡の跡を……。

かれは夢に夢を見てゐるやうな氣がした。あの三階の石油の壺、あの凄じい火焰、あの恐ろしい騒動、それからつゞいてこの焼け落ちた跡、晴れた美しい朝日、それをやつたのが自分で、そしてかうして自分が此處にゐるとは何うしても思はれなかつた。恐怖と不安と不定、それも昨日とは違つて、今は恐ろしい確實な否定すべからざる物が自分の前に横はつてゐるのを感じた。かれは不思議な氣がした。一方では自己の罪惡を感じてゐながら、よく自分に——平生は氣の小さい臆病な自分にかうしたことが出來たと思つた。つゞいて成功しなかつたといふことが、徒らにこの火災を起したといふことが、馬鹿々々しい眞似をしたといふことがかれの胸の底から起つて來た。矢張、今もかれは無一物である。何うにもならない。……と思ふと、警察で當然他の旅客と一緒にしらべられなければならない不安が夥しく胸を塞いだ。その方はいかやうにも言譯はすることが出來るが……脱營兵の方は、そつちの方は？

かれは立ち盡した。大勢の人がいろいろなことを言つてかれの傍を通つて行つた。中には、「まだわかんなえか、粗相か放火か？」かう話しながら行くものもあつた。「罪跡は何も残つてゐない。何も彼もやけた。あの石油の壺も、マッチも、軍服も……何も彼もやけて了つた。それだけは大丈夫だ。誰も知つてゐるものはない。又疑はれるやうなこともない。」かうは思つたが、脱營兵のことは何う言ひ解いて好いかわからなかつた。しかし一方では平氣でゐようといふ心持がかなり強く動搖するかれの心を靜めた。「成るやうにしかなりやしねえ。行當つてから考へる方が好いや——」

かう思つて又かれは歩き出した。

通りでは、大勢の人々の中に雜つて、まだぶすくと燻つて燃えてゐる焼跡を眺めた。人達はいろいろなことを言つてゐる。「これだけの家が焼けるんだから、騒いだ筈だ。」なども言つてゐる。その話す言葉が一々自分の頭に反響して來る。ふと又お雪のことなどが考へられる。「構ふことはない。脱營兵がわかつたら、それだけの處分を受けらんのだ。」こんなことを心の中の何處かで言つてゐるのに氣が附く。

ふと、ある話が耳についた。それは泊つてゐた人もゐたらうが、困つたらうなといふやうなことを話してゐるのであつた。

かれは突然言つた。

「俺は泊つてたんだ。」

『さうかえ、貴方が——』

話してゐた人は、振返つて此方を見て、『さうかえ、まア、困つたべえ。』

『すつかり焼いちやつた。すつてんでんだ。』

『さうだんべ。……一體、何處から出たんだな。』

『三階だ。』

『お客さん何處にゐた。』

『俺ア、二階だ。火事だつて言ふんで、慌て、目を明くとすつかり煙だもの、びつくりしちゃつた。』

『粗相だんべか、つけ火だんべか。』

『それやわかんねえ……』かう言つたが、『兎に角すつかり焼いて了つて、すつてんで困つた。財

布から何からすつかり焼いて了つた。持つて出たな、時計ばかりだ。』

『えらい眼に逢つたな。』

『本當だよ。』

『どうも、これもな、災難でな、しやうがねえや。』

自分を傍に置いて、こんな話でもしてゐると、——自分に關係のない話でもしてゐるやうに話をしてゐると、いくら胸の重荷が軽くなるやうな気がした。

薄青い煙を透して、向うに滅茶々に蹂躪られた野菜畑と、半分焼けた物干と、その間を拾ふやうにして歩いてゐる人達とが見えた。黎明近く、旅館の人達の立退いた場所へ——それはそこから遠くはなかつた——自分も一緒に行つたことも思ひ出した。いつそのまゝ遁けて了はうかと思つたけれど、さうすれば愈々自分の罪が知れると思つて、何食はぬ顔をして、その大勢の人達の群の中に雜つてゐたことを思ひ出した。その避難した場所は、旅館の婆さまの弟の家で、かなり大きな呉服屋であつたが、其處では、裏から入る座敷や居間をすつかり開放して、人達の避難して來るのに任せた。婆さんや子供達は逸早く其處へ伴れられて行つた。女中達も逃げて行つた。主人が其處に來たのは、もうすつかり鎮火して、黎明の光が其處となくあたりに満ち渡る頃であつたが、激昂と奮闘とに勞れ切つたといふやうにぐたりとして、『何うもわからねえ、あんなところに火の氣のある筈はねえ。……あそこに火鉢や煙草盆が置いてあるから、女共が火のあるのを下けて、それから出たと考へれば考へるんだか、何うも變だ。』など言つてゐた。種々な家財道具は、十中八九は焼いて了つたけれども、それでも手傳人が多く、手廻しも早かつたので、肝心のものだけは出すことが出來た。『ふん、あれも出した。よかつたな。』と言つて急に思出したやうに、『あの箱は何うした？』

『出しました。』

主婦も疲れ切つたといふやうにして、亂れた髪を梳かうともせず、ほりやりした顔をして、末の女の

兒に乳房を含ませてゐた。

座敷には泊つてゐた客が七八人避難して來た。逸早く運んで來た親類からの見舞の焼出しの結飯、大きな土瓶、かけ茶碗、さういふものが一杯に其處に並べられた。出火の原因についての疑惑、驚いて寢惚け眼で飛び出した狼狽、それからそれへと何處でも火事の話で持ち切つてゐて、包を焼いたといふものもあれば、大切の書類の鞆を出す暇がなかつたといふものもあつた。慌て、戸惑ひをして何うしても出口が分らなくつて困つたといふ人の話は人々を笑はせた。三階の西の隅に寢た客は、商人風の三十五六の色の白いほつそりとした男だが、慌て、階梯を半分ほどで踏外した話をしながらも、自分に嫌疑がかゝりやしないかといふ恐れがあるので、何となく困つたやうなしよけたやうな顔をあたりに際立たせて見せてゐた。

女中達も何かしら焼かないものはなかつた。風呂敷包、葛籠、行李、中には永年働いて漸く拵へたばかりの晴衣一重ねなどもあつた。男から貰つた指環を入れて置いた小箱を焼いて了つたものもあつた。男の寫真だけを持つて逸早く外へ飛出したものもあつた。「何うも災難だから仕方がないさ。御主人はもつと大變なんだから。」など、客は女中の一人をなだめた。その間にも夜は次第に朝になりつゝあつた。消し忘れられた弓張提燈の薄明く點いてゐるのを番頭は消して歩いたりした。かれはその大勢の客の中に雜りながら、焼出しの結飯を食つたり、其場々々に適應した話の相手になつたり、手傳ふために簞笥の角

に脛を打ちつけた血のにじんだ跡を出して見せたり、其處等ぶら／＼歩いたりしてゐた。そしてかれの眼は絶えずお雪を捜した。女中の姿さへ見ると、それはお雪ではないかと思つた。勿論、今の場合、口を利くわけには行かない。うっかりして、疑はれるやうなことがあつてはならない。しかしかれはお雪の姿を眼で捜さずには居られなかつた。夜が明けてから、かれは初めて奥で女中達に雜つて一緒になつて働いてゐるお雪を認めた。

焼跡をぶら／＼歩いてゐたかれは、稻荷社の門前近くまで行つて引返して、今度は裏の道の方へと行つた。其處にも此處にも狼狽と混雜との跡が残つてゐる。半ば焼けた子供のつけ紐のついた四ツ身、八分通り焼けた女足袋、まだ火がついてぶす／＼燻つてゐる小搔卷などもあつた。ポンプの水で雨あがりのやうに泥濘になつた路には、明るく朝日がさして、子守が子供を負つてめづらしさうにあたりを見て歩いてゐたりした。物のくすぶる匂ひがそれとなくあたりに漲り渡つた。

一昨々日から自分に纏はりついて來てゐる運命が、裏の半ば焼けて庇の落ちた二階屋の傍を通る時、又も強くかれの念頭を襲つて來た。理由なしに——本當にこれといふ理由なしに、かうしたハメに陥つて、將來は何うなつて行くかわからない運命のそれでも八分通り通過したことを考へた時、かれはゾツとして身を震はせた。自分ながら自分で何うしてかういふことをしたかわからないやうな氣がした。ランプ壺をつかんで闇の中を三階へと上つて行つた自分が歴々と見える。さうしてさういふことを存外冷

静に實行した自分が、それが自分であるのが不思議に思はれる。そしてまた何故そんなことをしたかといふことが不思議に思はれる。依然として無一物であるかれにはことにさう思はれる。急に、後悔の念が凄しく胸を衝いて起つて來た。

人を騒がせ人を驚かしたのは誰か。他人の財産を、何の關係も恩怨もない他人の財産を一夜の中に亡して了つたのは誰か。そして知らぬ顔をして、乃至は出来るならばその罪を他に着せてまでも自分は好い子になつてゐようといふやうな圖太い不正直な考を持つてゐるのは誰か。さういふ人間も矢張血もあり涙もある人間の一人か。かう激昂して自分で考へたが、さういふ性質と性情とを持つてこの世の中に生れて來た自分といふことを考へると、堪らなく悲しくなつて來て、自分の心も苦痛も何も彼も闇から闇へと葬られて行くやうなさびしさと悲しさで胸が一杯になつた。翻つて考へて見ても、かれのこれまでの生活には、少しの光明もなければ、少しの温情もない。かれのやつたことは皆な誤解され、憎悪され、罵倒され、冷笑されて、一つとして自分の眞の心の通つたためしがなかつた。故郷でもさうだ。兵營でもさうだ。戦地でも矢張さうだ。……不意に、潔よく自首しようかと考へる。昨夜火をつけたのはこの身である。自分で自分がわからないこの身である。いかやうなる制裁でも受ける……。かう言つて潔よく自首しようか。さうすれば、この重荷は、心の重荷は釋然として解ける。運命もその展げる路を得る……。

かう考へてかれはほんやり立つてゐるが、しかしそれは一時の激情で、段々心が重苦しく沈んで澀んで行くのを見た。その出来るやうなかれではなかつた。またお雪のことを考へると、とてもそんなことは出来る筈はなかつた。罪惡をごまかしても、何うしても、生きてゐなければならなかつた。

で、かれはまた歩き出した。

裏道を通つて、避難所になつてゐる家の裏門近く行つた時、かれはふと劍の音をさせて、ズボンだけ白い姿を朝の空氣の中に浮出させて、二人の巡査がそこに入つて行くのを見た。かれは一種の重い戦慄を總身に覺えて其處に立留つた。

しかし思ひ返して入つて行つた彼の眼と心と態度とは、すべて鋭敏にその巡査の制服の方へ動いて行つてゐた。その他には何も見ないといふほどの強さで……。かれは巡査の一人が主人と何か話してゐるのを見ると同時に、一人の巡査が此方へ、昨夜泊つた客の大勢集つてゐる方へやつて來るのを見遁さなかつた。

それはまだ若い巡査であつた。かれはその若い巡査が落附いた聲で何か言つてゐるのを耳にした。中にゐる大勢の客達は、或は坐つたまゝで、或は其處まで出て來て、皆な銘々に勝手に自分の見たことを話した。『三階にひとりゐたつて言ふ客は誰だな？』かう問はれて、その商人風の男は、おづおづとしたといふ風で、運わるく三階に泊つたばかりでいくらかかけられてゐるらしい嫌疑をさも迷惑さうに、訥

つた口附で、自分の始めてそれと知つた時の光景を話した。『眼が覺めた時はもう眞赤でした。ぱちぱち物の燃える音がしてました。兎に角、三階の隅から出火したことだけは確かですな。』

『それから、二階には、誰がゐた？』

其處にゐた客達は彼方此方から顔を出した。『もう、一人ゐた筈だがな。』客の一人はあたりを見廻してから、庭に立つてゐるかれの方を見て、『あゝ、あそこゐる。あの人もさうです。』
と言つて指した。

若い巡査は振返つてかれの立つてゐるのを見た。かれは顔を見られるのに氣がさしたといふやうにくらか低頭加減にした。しかし巡査は別に氣にも留めぬらしかつた。

『兎に角、あとで、一應は調べなければならぬから、氣の毒だが、誰も何處にも行かずにゐて呉れ。』かう言つて、若い巡査は、また奥に行つて、もう一人の部長らしい巡査と共に、今度は主人主婦老婆女中といふ順で、いろいろに調べるらしかつた。婆さんが部長に向つて、熱心に何か頻りに述べ立てゝゐるのが、そこにゐるかれにも見えた。

巡査が歸つたあとで、かれは初めてお雪の傍に近づくことが出来た。

『何か焼きやしなかつたか？』

『大したものでもないけど……行李一つ焼きましたよ。』

『俺いちやつた……』

『何を？』

『金入を焼いちやつた……』

『さう、それはいけなかつたのね。困るでせう。それぢや——』

『困つちやつた。』

『餘程多く……』

『何アに、少しだけでも、十兩ばかり……』

『さう……』と言つたが、氣を兼ねるといふやうにあたりを見廻して、『私と貴方と知つてゐる同士だ』

ツて言ふことをわからないやうにしなかつては駄目ですよ。』

『それは大丈夫だ……』

其處に、向うに人の影が見えたので、お雪はすつと別の方へ行つて了つた。

抑留された大勢の客の中には、苦情が百出した。中には忙しい、是非今日の午前中に行かなければならない商用を持つてゐる人などもあれば、『災難とは言ひ條、馬鹿々々しい話だ。これで一日潰されて了つてはやり切れない。時は金だ。』などといきまくものなどもあつた。客が放火した。そんな話はないといふ意見に大勢は一致してゐた。『女中の粗相に相違ない。それを、客を一體にすべて調べるといふ法は』

ない。』こんなことを其處でも此處でも言つた。

奥の主人夫婦や婆さんの述べたところでは、女中の粗相では絶対にないといふ主張であつた。その三階の隅に火鉢なり煙草盆なりを昨日は置かなかつた。何うも不思議だ。あそこから火が出るわけがない。かう言つて皆な巡査の問に答へた。婆さんは中でも思ひ當ることがあるやうな調子で話した。『何うかお調べ下さい。いづれ、さういふわるいことをしたものと思ひますから、』と言つた。

家族の人達の中の評議では、何うしてもその放火者は二階と三階との客の中にあるらしく思はれた。火災保険も何もつけてないので、金や貴重な財産の一部は出したけれど、この不意の災厄に再び容易に恢復することの出来ない將來について主人は思ひ煩はずには居られなかつた。昔から何代となく評判よく續いて來た旅館、事件といふ事件も災厄といふ災厄もなかつた家、その家がかういふ騒動を町中に起させたといふことも心外であつた。『代々、人に恨まれるやうなことをした例はないんだから、何うしても物取りか何かのした仕業に相違ない。』かう主婦も婆さんも言つた。

それに、かういふことは、主として男女の關係からよく起るものだといふことを主人も婆さんも考へた。そして女中達に觀察の眼を向けた。しかし、誰にもさうした嫌疑のかゝりさうなものもなかつた。

『まア、然し、お上で調べて下さるから此方でやきもきするがものもない。』思ひ出したやうにして主人は言つた。主人は一方そのために抑留されてゐる大勢の客を氣の毒に思つて、度々其方へ行つて、挨拶

をした。その間要太郎は綠葉の日に照る縁側のところに胡坐をかいて、ほんやもとして、頭のふけなどを取つてゐた。

二十七

『お前、お前、ちよつと……』

かう小聲で、そつと手で招くやうにして、婆さんは主人をその傍に呼びつけて、耳に口を當て、何かこそそと話した。

主人は點頭いて聞いてゐるが、時々眼の前に浮んで來る光景を思ひ浮べるやうにしたり、また餘りに他人を疑ひすぎるやうな判断を考へるやうな表情をしたりして聞いてゐるが、『しかし、餘り人を疑つてもいけないからね。』

『でも、ね、何うも、さうぢやないかと思ふよ。それも、今、ふと、考へごとをしてゐて思ひついたんだがな……あそこは、『又、耳に口を寄せて、『あそこからは、階梯を上つて行けばすぐあそこだから、……それに、よく考へて見ると、をかしいことがあるだよ。第一、兵隊さんが二晩あゝして泊つてゐるつて言ふことをかしいしな。それに、道具を運ぶ時に、店先にいやにちよこまかしてゐるぢやねえかね。』

『それはさうだな。』

さう言はれ、ば、成ほどあの時、手傳つてやるとか何とか言つて、金や貴重品の入つてゐる箱に手を懸けた。それから、隙を覗つて何かしようとしたやうにも取れば取られる。主人は首を傾けて考へた。

『第一、あの顔からして氣に入らねえだ、己には——。善人ぢやねえぞな、あの顔は？ 俺は家に入つて来た時からさう思つた。』

『でもな、無闇に、さう人を疑ふわけにも行かねえだな。』

『それはさうだがな。氣をつけて見ろや、……それにな……』又耳に口を寄せて、『警察にも、それとなく言つて置けよ。何うも、さうぢやねえかと己は思ふんだ。』

小さな聲のうちに包まれた年取つた老婆の觀察、それが深くその祕密を主人に展いて見せたやうな氣がした。主人は黙つて腕を組んで考へた。成るほど祖母の言葉の中には、經驗に經驗を重ねた細かい觀察がひそんでゐる。本當にさうかも知れなかつた。しかし一方では、僅かな金を盗むために、わざ／＼火をつけなくつても好きさうなものだと思つた。主人は何方かと言へば、三階の客に疑ひを挟んでゐたのであつたが、婆さんは、『何うして、お前、三階のあのお客さんなんか、そんなことをする人ぢやねえぞな。一目見て、するかしねえか、わかるだ。』かう言つて、昔聞いたことのある同じやうな場合の話をそこに持出した。主人は深く深く考へに沈んだ。

二十八

その日の午前十時過、その避難所から、前夜の大勢の泊客がぞろぞろと揃つて、町の大通りの中ほどにある警察署の方へと歩いて行くのが見えた。主人と巡査部長とが先に立つて、あとから其人達は續いた。要太郎もその中に雜つてゐた。

町ではその噂で持ち切つてゐた。『まだ、放火か粗相かわかんねえかよ。』放火だとすると、あの大勢の中に誰かつけた奴があるんだぞよ。』何うも外から入つたものぢやねえらしいな。』こんな噂がそこにも此處にもきこえた。初夏の午前の日は明るく一行を照した。麥稈帽子をかぶつてゐるものもあれば、ほやく／＼した頭髪をそのまま、むき出しに現はしてゐるものもある。旅館の浴衣の泥に塗れたのを着てゐるものもあれば、ちぐはぐの下駄を穿いてゐるものもある。兩側の町の人達は、大抵は外に出てその一行を見送つた。

『でも、物を焼いた客もあるんだらうな。』

『それはあるだらうとも……』

『どうも、災難だから、仕方がないけれど、お客も迷惑さな。』

『もし、あの中に、やつた奴があるとすると、ひどい奴もあるもんだ。』

かうした噂がかれ等一行の歩いて行く跡に長く續いた。

中には、困つたやうにしほくした相馬屋の主人に同情して、『あゝ、いふ評判の好い家に、かういふ災難が湧いて出て来るんだから、本當に何が何だかわかりやしねえ。俺達だつて、あすが日何んな目に逢ふかわかりやしねえ。それに保険に一文もついているねえ、言ふぢやねえか。氣の毒だな、あのおやぢ。』
『本當に、相馬屋が氣の毒だ。』

やがて一行の人達は、部長に導かれて、ぞろ／＼と警察の松と階段のある入口の見えてゐる門へ入つて行つた。要太郎は一昨日の夕暮、この前を通つた時のことを思ひ出した。見えない、しかし的確な運命の糸のやうなものがあつて、それが其處と自分とを引付けて行くやうに考へたあの空想が事實となつたことをかれは思つた。しかし、かれには何うすることも出来なかつた。

警察の大きな建物に續いて、三面硝戸で明るくしきつた板敷の、ひろい、二三ヶ所に卓と腰掛とが置いてあるところへと一同は先づ入れられた。『かういふ處に入れられたのは始めてだ。』かう言ふものもあれば、『何も經驗の一つだよな。一日遊ぶ氣でゐるんさ、仕方がねえ。』などと言ふものもあつた。此の廣い板敷の中で、時々は巡查達が撃劍の稽古をするらしく、竹刀や道具がそこらに置いてあつたりした。要太郎は何となく落附かないやうな顔をして、隅の方の長い榻に腰をかけてゐたが、此時は朝あたりとは違つて、人の眼が鋭く意地わるく自分にのみ注がれてゐるやうな氣がして堪らなく無氣味であつた。こと

に、主人の眼が常にかれの態度から離れないのをかれは感じた。かれはその眼を避けるやうにした。

便所に二三人行くものがあつたので、ふとかれも立上つて其方の方へ行つた。かれには便所よりは寧ろ遁げる時のことが氣に懸つてゐた。いざと言へば、遁げなければならぬ。……その時は？　その時は？　かうかれは既に餘程前から思つてゐたが、しかし、いざ遁げるとなると、自分の罪惡を自分で承認した形になる。滅多に遁げるわけにも行かない。かう思つてかれはその逃遁の意思を押へた。しかしかにかにしても氣になつて仕方がない。體がわく／＼するやうだ。で、かれは立つて厠の方へ行つた。主人の眼がかれの方を目送るのをかれは感じた。

正直に大便所に入つて、戸を閉めたが、そこでかれは自分の罪惡と祕密とに正面に對するやうな心持がした。と同時に、一方では、何うかしてこれを切り抜けなければならぬといふ努力が渾身に漲つて來た。『そんな意氣地のないことで、何うする。昨夜のやうな大膽なことをやつた身が……』かう何處かで、自分を叱咤する聲がきこえる。かれは兎に角覺悟をきめて置かなければならぬと思つた。黙つて口を緘してゐれば、罪があつても、罪にさせられないことをかれは知つてゐる。しかし、それをすることは、兵營、世間、故郷、さういふところまで公然に知られることを覺悟しなければならぬ。新聞にも大々的に書かれるに相違ない。それよりも、逃げる方が好いとかれは思つた。何うせ逃げなければならぬ身だ。旨く行けば巧に逃げ終らせることが出来るかも知れない。かう思つて、かれは厠の中から外を見